「3，4，6，9色法」について

－子どもが自信をもち、元気になる方法－

平成20年度

三重大学大学院教育学研究科
修士課程 学校教育専攻

岡村 かや乃

複写可

修士論文

「３，４，６，９色法」について
―子どもが自信をもち、元気になる方法―

三重大学大学院　教育学研究科　学校教育専攻　学校教育専修

２０６Ｍ００１　　岡村　かや乃

平成２１年２月１３日　提出

目　　次

１．　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２

２．　研究の目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５

３．　「３・４・６・９色法」について
（１）　方法と手順・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７
（２）　開発のきっかけ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２
（３）　３・４・６・９色法の関係・・・・・・・・・・・・・・１７

４．　「色絵四法」の試行の実際と考察・・・・・・・・・・・・・　２０
（１）　３色法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２２
（２）　４色法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２６
（３）　６色法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３４
（４）　９色法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３８
（５）　親子９色法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５２
（６）　親子４色法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５７
（７）　子どもたちの色絵・・・・・・・・・・・・・・・・・・５９

５．　「色絵四法」と絵本の読み聞かせとの関係・・・・・・・　１２６

６．　考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１３２

７．　今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１３８

８．　おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１３９

９．　参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４０

１０．　謝辞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４１

１．はじめに　　―最近の子どもたちの傾向と、子どもたちを取り巻く現状―

今、子どもたちの巡る問題についての議論がかまびすしい。

ニュースや新聞で、子どもが加害者あるいは被害者になっている暴力事件・殺人事件なども多く見られる。また、学級崩壊、いじめなどの学校の中での問題もよく話題にのぼる。児童虐待などの子どもに対する大人の暴力なども数多く取り上げられている。

中日新聞（２００８年８月８日付）によると、文部科学省の発表で２００７年度に病気や経済的理由以外で、３０日以上欠席した「不登校」の小中学生が１２万９０００人に上るという。この数字は、前年度に比べて1.9%の増加で、ここ数年、高いレベルで推移している。不登校になった原因を「人間関係の構築がうまくできない子どもが増えた」と答えた都道府県教育委員会は９３％にのぼる。社会生活を営む上で絶対必要な「人間関係の構築」がうまくいかなくなっている子どもが増えていると、多くの大人が感じているのである。

加えて、学校での暴力事件や傷害事件も大きく増加し、(2007 年度 5 万 2756 件、前年度比１８％増）感情をうまく抑制できずに急に暴力をふるうなどの事件が多い。ここでもコミュニケーション能力の低下をおもな要因にあげている。最近では「キレる」という言葉で表現されることが多いが、暴力事件や傷害事件を起こしてしまった子どもたちは、人間関係も「キレて」しまっている状態にあるのかもしれない。

また、実際に顔を殴るなどの暴力事件に加え、子どもたちの生活にも浸透しているネットでのいじめ問題が大きく増えている。匿名性が強く、相手の顔（表情）が見えないので、ネットの書き込みは「何を書いてもよい」「どんな言葉でも自由に書ける」というモラルを逸した行動をとり、その結果、大人が読んでも目を背けたくなるような言葉が並ぶことになる。その言葉が、相手にとってどのように感じるか、どのように受け取られるかという想像ができないのである。自分がやられたら傷つくのに、人には平気で攻撃的なことを言ったりやったりする。もし「自分が相手の立場だったら」と、少し考えればわかりそうなものだが、そこまで想像力が及ばない。

さらに、近年、子どもが十分な養育環境で育てられていないケースも多く見られる。虐待を受けている子どもも年々増加しており、厚生労働省が調査した、全国の児童相談所の対応した虐待件数が 2007 年度には 4 万件を超えている。十分な養育環境で育てられなったことが、友だちとの関係をうまく結べなかったり、学校で不適応を起こしてしまったりしている可能性も否定できない。また、親の雇用不安などで、安心して学校の来ることができない子どもたちも増加している。筆者の教員仲間の話によると、保護者の解雇などにより、友だち

と十分なお別れもないまま、引越しや転校する子どもたちが多くなっていると聞く。

筆者が教壇に立っていても、朝から非常に疲れているような表情の子どもや、やる気を見せられない子どもたちが多くなったように感じる。登校後や休み時間に元気に外に走っていく子どもたちが少なくなっているようにも感じる。また、想像力を働かせられない子どもたちも多い。相手の立場に立てない子どもを多く見かける。あるいは、自分に自信がなく、自分が教室にいることに意義を見出せない子どもたちもいる。クラスの中で、自分の存在価値を見出せずに、友だちと関わろうとしなかったり、学習意欲もなくなってしまったりしている子どもたちが、教室の中で「自分はここにいてもいいのだ」「ここにいるのが心地よい」「クラスの一員なのだ」と思うことができるような手立てが必要となっていることを痛感する。

これらの状況を総じて、子どもに元気がない状況であるといっても過言ではないであろう。

このように子どもたちが元気のない状況であって、子どもたちは「心」を使ったかかわりを求めているのであろうが、子どもたちの周りの大人たちは「心」を使ったかかわりをしていない現状がある。

「モノ」が豊かになり、ネット社会になって、望むと望まないに関わらず、私たちはありとあらゆる情報にさらされている。子どもたちもインターネットや携帯などのネット社会に組み込まれている。「モノ」や情報が豊かになった分だけ、「心」を使った子どもとのかかわりが不足してきている。親たちの、「おもちゃを買ってあげるから、言うこと聞いてね」「ゲームを与えておけば、家の中で静かにしてくれる」など、親としては問題のある姿勢には枚挙に暇がない。しかし、「モノ」や情報が豊かになったことで、いわば「心」を遣わなくなってしまった大人が結構いるのではないだろうか。

しかし、子どもたちは「心」のこもったかかわりを望んでいるのである。大人も子どももその「心」を使わなくなった分だけ、想像力に乏しくなっている現状がある。

この想像力は、小さい時から培われるものであって、想像力に乏しいからといって、特効薬や即効性のある手立てはない。「人を傷つけてはいけません」「たたいたりけったりしてはいけません」といくら指導しても、自分がその行為をしたときに相手がどんなふうになるのか、まわりがどんなことを思うのかを考えられないのである。ことを起こしてしまってから、「そんなことになるなんて思わなかった」「相手がそんな風に思っているなんて考えなかった」と、相手の気持ちを想像することも難しくなっている子どもも多くなっているのである。そのときに気付くのはまだいい方で、問題を起こしてもまだ、他人事のような顔をしている子どもたちもいる。人間関係における想像力が働かないので、その分だけトラブルも多くな

るように思われる。

このような元気のない子どもたちが元気を取り戻し、「やった！」「すごい！」という達成感を味わい、自尊感情・自己肯定感が育てられるような活動が学校現場に求められているように感じることが多い。そのような活動を通して、子どもたちが子ども本来の元気を取り戻して欲しいと考えるのは教師として自然のことであろう。

2．研究の目的

筆者は、教員になった当時から、教室で子どもたちに絵本の読み聞かせをしてきた。どの学年であっても、絵本の読み聞かせをすることによって、純粋に絵本の世界を楽しみ、それによって想像力を育まれることを目指していた。

筆者の大学院入学当初の研究テーマは、「絵本による心の発達の可能性」であった。子どもたちの身近にある絵本を読むこと、読んでもらうことを通して、子どもたちがいかに絵本の中で想像し、その中に自分をおいてその世界を楽しむことができるか、そして、その想像の中で語る物語が豊かであればあるほど、子どもたちのこれから生きていく人生において、厚みのある人生になっていくのではと考え、より効果的な読み聞かせをするにはどんな手立てがあるか考えるのがテーマであった。

実際に筆者が絵本を読み聞かせをしていると、まず子どもたちは読んだ後の感想を述べてくれる。あるいは、絵本に出てきた登場人物になりきって、泳いでみたり大きな声で叫んでみたりすることもある。読んでもらった絵本を土台に、自由に想像の世界を少しずつ膨らませている。想像の世界を広げている子どもたちは、実に豊かな表情をしている。そこに大人の入る余地はない。さらに、子どもたちは自分の想像の世界を広げ、自分でお話を作って聞かせてくれることもある。聞かせてくれなくても、その表情から想像の世界に浸りきっていることがわかる。

筆者はこれまで教室での絵本の読み聞かせや学校図書館での読書指導の中で、子どもたちが自由に生き生きと現実の世界と想像の世界を行き来している姿を見てきた。その想像力を豊かにする絵本を効果的に読み聞かせをするには、どんな方法があるかというのが、課題研究の中での話題のひとつであった。

学校の教室や図書館、あるいは家で筆者の子どもと一緒に絵本を読んでいるとき、物語の筋とは全く関係なく、子どもたちが、その絵本の中の絵の「色そのもの」についてつぶやいていることが多数あることに気がついた。「この絵本、白と黒だけやな。」「その赤ってきれい。」という表現だけでなく、「その（絵本の中の空の）青はな、ぼくの持っているクレヨンの青とちょっと違うなあ。でもな、青のかばん、好き。だってな、・・」と、絵本の中の色から出発して、どんどんお話を膨らませる子どもたちがいるのである。また、色彩鮮やかな絵本を読み聞かせしたときと、モノトーンの絵本を読み聞かせをしたときの反応や、読み聞かせした後の子どもたちの様子が違うことも感じてきた。

そこで、絵本の読み聞かせと「色塗り」を関連付けさせて、子どもたちの想像力を育み、

元気になる方法はないか考え、本年度（平成20年度）4月から、勤務する小学校の特別支援学級において、担当する授業の中で、絵本の読み聞かせをし、読み聞かせをした後、子どもたちに心に残ったことや想像したことを絵に描いてもらい、そこから子どもたちがお話を作って語るという授業をしてきた。子どもたちは、絵本の中に出てきた場面を描くこともあるし、全く違う自分の想像した絵を描くこともある。そこから紡ぎだされるお話は、全くのオリジナルのお話であった。

今回の「３・４・６・９色法」の開発のきっかけを作ってくれたのが、絵本「カニ　ツンツン」の読み聞かせであった。これについては、本論の中で詳しく述べるが、このときの子どもたちの描いた絵がきっかけで、小山内實氏[1]がこの「３・４・６・９色法」の開発をされたのである。まず９色法を考案され、筆者はすぐに筆者の子ども（小学２年生の娘と保育園年長組の娘の２人）と一緒にこの「９色法」を試行した。実際の試行に際して生ずるかもしれない、注意すべき点がないか、前もって吟味しておいた。つまり、「９色法」を試みることが子どもたちに悪影響を与えること(例えば侵襲性)がないことを確認しておいたのである。「9色法」の試行のときの子どもたちの様子から「3色法」「4色法」「6色法」の開発につながったのであるが、原理的には小山内先生に考えていただき、ディスカッションしながら推進してきた。子どもたちと一緒にこの絵画法を試行したのは筆者である。原理的にどのようなものが子どもたちにとってやりやすいのか、小山内先生と一緒に考えていき、いくつかの細かい方法は筆者が子どもたちと一緒に絵を描いていく中で、改良してきた。

「３・４・６・９色法」は、クレヨンを使うことができる人なら、どんな年齢の人でもできる。小さい子どもも、現職の保育園の教員も一様に「楽しい！」「気持ちいい！」「スッキリする」と塗色後の感想を述べている。画用紙に色を塗るだけで、気持ちがすっきりするこの方法には、教育現場にありがちな「上手・下手」という評価は入ってこない。何らかの形を描くわけでもないので、子どもたちは安心して、色を塗る。大人たちも安心して、色を塗るのである。さらに、仕上がった自分の絵を見て、満足感を味わい、達成感を感じられるのである。この「３・４・６・９色法」をすることによって、絵本の世界と自分の現実の世界を自由に行き来し、より豊かに想像の世界を広げている子どもたちの姿があった。

以下に、この「３・４・６・９色法」のやり方、試行結果を詳しく述べていくことにする。

---

[1] 三重大学教育学部臨床心理学教室特任教授

３.「３・４・６・９色法」について

（１）「３・４・６・９色法」の方法と手順

「３・４・６・９色法」は、画用紙に色を塗るだけの単純な作業である。用意するものは、12～16色程度のクレヨン（ただし白のクレヨンは使わない。どうしても使いたいときにはその気持ちを尊重する。使いたいという理由があるからである。）、画用紙、枠を描くためのフェルトペン（油性でも水性でもかまわない）だけである。

この「３・４・６・９色法」が開発される前に、小山内らが開発・試行した「ステンドグラス法（SGⅠ）」がある。SGⅠは、クレパスを使い、２人組で線を引き合い、色を塗る描画方法で、このときに出来上がった絵を基本画と呼ぶ。出来上がりがとてもきれいで、デジタルカメラ（あるいは、写真機能つき携帯電話）で、この基本画を撮ると、光が参加して、ステンドグラスのように見えることから、この名前がつけられた。基本画があって、写真に撮ることで初めてステンドグラスとして完成する。この「ステンドグラス法」については、継続して研究されており、三重大学教育学部附属教育実践総合センター第２９号紀要（2009. ３発行予定）に詳しく述べられる予定である。

そして、同じ三重大学教育学部附属教育実践センター第２９号紀要のなかで、この「３・４・６・９色法」の開発について述べている。「３・４・６・９色法」は、このSG法の新しい試みであり、ステンドグラス法Ⅰ（SGⅠ）に続く「ステンドグラス法Ⅱ（SGⅡ）」と命名されている。SGⅠは２人組になって色を塗るのであるが、SGⅡは、１人でもできる。あるいは２人組、３人組でもできる。SGⅠもSGⅡも、クレヨンで色を塗るだけである。SGⅡとSGⅠの違いは、人数の違いだけではない。SGⅡは、画用紙の大きさや塗る部屋の数を考慮すれば、もっと小さい子どもたちや特別支援の必要な子どもでもできる方法である。

このなかで、「３・４・６・９色法」をまとめて「色絵四法」と命名しているので、ここでもすべてをまとめて述べるときには、「色絵四法」と呼ぶことにする。

３色法は、A4判の画用紙を３分の１にし（縦99㎜×横210㎜）、その画用紙にフェルトペンで枠を描き、３つの部屋（「部屋」の意味については後に述べる）を作って、その中に自分の好きな色を好きな場所から塗っていく方法である。

4色法は、A4判の画用紙を半分にし（縦148㎜×横21㎜）、その画用紙に3色法と同様にフェルトペンで枠を描き、4つの部屋を作る。その中に、自分の好きな色のクレヨンで、自分の好きなところから塗っていく方法である。3色法は、視線の動きが横だけであるのに対し、4色法は、たてと横の2方向になり、より立体的に見える。そして、塗り終わった絵を見てみると、3色法よりも広がりのある絵になる。基本の画用紙の大きさは、先に示したとおりであるが、もっと小さくしてB5判の画用紙を半分にしてもよい。（縦128㎜×横182㎜）反対に、もっと大きなスペースを塗ることができるようであれば、B5判の画用紙（縦182㎜×横257㎜）を使うこともできる。

6色法は、A4判の画用紙の半分（縦148㎜×横210㎜）の大きさの画用紙に、フェルトペンで枠を描き、その中に6つの部屋を作り、そこに自分の好きな色のクレヨンで、好きな場所から塗っていく。この場合ももっと大きい画用紙で塗ることができるようであれば、B5判の画用紙を使ってもよい。

9色法は、A4判の画用紙にフェルトペンで枠を描き、そのなかに9つの部屋を作り、その中に自分の好きな色を順次9色塗っていく単純な作業である。塗っていく順序も自分の好きな順序でよい。

色を塗るときには、白いところができないように、しっかりと塗る。だから「色ムラができないように」と指示するのである。子どもには「ぐいぐい塗ってみよう」などと指示すると、クレヨンを持つ手に力が入り、ほとんど白いところがないようになるまで塗ることができるのである。

実際に試すとすぐわかることであるが、あくまでも「あそび」なので、画用紙とクレヨンさえあれば、“どこででも”“だれにでも”できる。「あそび」なので、気構える必要のないのは当然である。

はじめの指示は、「自分の好きな色はどんな色？」「今の気分を色であらわすとどうなるかな？」など、そのときの子どもたちの心の様子を想像し、想像した心に応じて子どもの取り組む姿勢を変えることができる。普段、身の回りに「色」はたくさんあっても、意識されていないことが多く、さっと「自分の色」を選び始められる子どももいれば、好きな色がたくさんあって、1色のクレヨンを選ぶのに時間のかかる子どももいる。指導者が「赤好き？」などと言うと、そのとおりにしなければならないと考える子どももいるし、反対に指導者の教示を無視する子どももいる。迷っている子どもに対しては、「○○色はどう？」

というヒントを与えることも、場合によっては必要となる。

大抵の子どもは、白い画用紙を目の前に置かれると、着色する部分が随分「大きい」と感じてしまうらしい。しかし画用紙に枠を描き、それぞれの数の部屋（3 色法であれば 3 つ、4 色法であれば 4 つ）を作ってみると、それだけで少なくとも最初に感じた「大きい」という感覚はなくなっていくようだ。1 つずつの部屋は小さくなるので、子どもたちにとっても「（広い面積を）たくさんぬらなければ」という意識は薄くなる。「枠」の意味については、小山内らの論文に詳しい。実際に筆者が経験したことであるが、三重県下の B 小学校の特別支援学級の子どもが画用紙にむかって、クレヨンを手に取ることができない場面があった。しかし白い画用紙に「枠」を描くと、先ほどまでの困った様子が嘘のように、自分でクレヨンを選び、絵を描きだしたのである。

枠の記入は予め指導者がやっておいてもよいが、子どもたち自らが枠を描いてもよい。また、枠を描いた後で、隣の友だちと交換して塗り始めてもよい。枠があることで「色絵四法」にも取り組みやすくなると思われる。枠の色も自由にしてよい。基本的には黒のフェルトペンで枠を描くのだが、保育園の年長組で試行したときには、「自分の好きな色で枠を描こう」と教示したところ、8 色の油性のフェルトペンの中から自分の好きな色を出してきて、枠を描いた。9 色とも塗り終えてからは、初めから自分で描いたという自信のようなものを感じることができた。

「色絵四法」の試行のなかで、子どもたちの色絵を見ると、子どもたちは「枠」からはみ出ることなく、色を塗っている。「虹」やその他の装飾物を描き入れている子どもたちも、決して「枠」を出ることはない。「枠」の中で、子どもたちは想像の世界を広げ、お話を作っているのである。

次に「部屋」の意味について述べていく。我々の方法は、森谷の「九分割統合絵画法」からヒントを得たものであるが、森谷とは発想を全く異にする。3 色法にしても 4 色法にしても、あるいは 6 色法、9 色法にしても、それぞれ、「部屋を作る」という気持ちで線をひく。だから絵全体は 1 軒の家なのである。それは、3 つ（あるいは 4 つ、6 つ、9 つ）が、ひとつのかたまりであるということを無意識に感じてもらうためである。さらに 3 色（あるいは 4 色、6 色、9 色）が同じ色の仲間であるということを意識させるためである。色の仲間意識を持つということは、子どもたちもクラスの仲間意識を育てることにつながるであろう。また、「お互いに違うけれども仲間であることには変わりない」という気持ちが育つと考えられる。「九分割統合絵画法」では、ある程度工夫が必要な絵や文で表現しな

ければならないが、この「色絵四法」は、色を塗るだけなので、絵が苦手な子どもも（あるいは大人も）文章がうまく書けない子どもも抵抗なく取り組むことができると思われる。

枠の太さについては、あまり問題はないが、部屋を仕切る仕切り線については考える必要がある。なぜならば、この仕切り線があまり太すぎると、それぞれの部屋を分断してしまうことになり、「同じ色の仲間である」という気持ちになりにくくなるからである。守られた枠の中の同じ仲間であるということが意識されにくくなる。だから仕切り線については、あまり太くなりすぎないほうがよいのである。

画用紙の大きさは、色を塗る人の心の様子にあわせて、自由に変えることができる。子どもの場合は、そのときの体調、発達などを考慮し、画用紙の大きさを変えることができる。子どもたち自身が、自分で選ぶことができればそれに越したことはない。色を塗ることに対するエネルギーが少ないと感じたときは、画用紙を小さくできる。小さいスペースでも、しっかり塗ることで、色を塗ることに夢中になり、自分の選んだ色を向き合うことになる。反対に、子どもたちのエネルギーが大きいと感じたときには、画用紙を大きくできる。そのときには大きくなったスペースをしっかり塗る時間を十分に保障することが必要であろう。

絵というものは、大抵「上手・下手」という評価がでるものである。ところが、この方法だと、絵でありながら、「上手・下手」の評価は出てこない。どの色絵も「上手」なのである。「色塗り」という遊びのひとつとしてできるのである。実際に授業中にやっても「これは、遊びなんやろ（遊びなんでしょう）？」「遊びやで（だから）、いい加減でいいねん（いいんだよ）」という声が聞かれた。子どもたちは「いい加減」といいつつも、しっかり塗っているし、決していい加減な作品ではなく、「よい」作品になっている。自分の描いた絵がどのような評価をされるのだろうという緊張感もなく、のびのび取り組むことがきる方法である。

色を塗っている最中や色全部を塗り終わった後に、子どもたちは自然に感想やそのときの気持ちを口にする。誰かの発した言葉を受けて、また違う誰かが話す・・ということを繰り返していくうちに、結構子どもたちが本音の部分を話していることが多いのに気がつく。その言葉の一つ一つは、子どもたちを理解するきっかけにもなる。しっかりと耳を傾けたいものである。そして、自分の描いた絵の裏に「描いた後の感想」「今の気分」「描いている最中の気持ち」「始める前と今の気分の比較」など自分の気持ちを表すことで、自分の気持ちと向き合い、振り返りができる。今まで気がつかなかった自分の気持ちを確認す

ることもできる。小さい子どもたちには、直接聞いてもよいし、その後の行動を観察することで変化がわかる。小学生になら、周りにいる友だちと気持ちを共有することで、「自分だけじゃない」「みんな同じ気持ちになっているんだ」という仲間意識も生まれるシェアリングとなるはずである。

次に、学校の教室で行う場合や特別支援学級で行う場合について述べていく。学校の教室で行うときには、クラス単位でもグループ単位でも実施できる。保育園など就学前の子どもたちともできる。就学前の子どもたちは小さなグループ（５～８人程度）でするほうがよいであろう。子どもたちは自分の話を聞いてもらうのが大好きである。絵を描きながら話している内容は、子どもたちをより深く知るきっかけにもなるであろう。指導者一人で、全体を把握しつつ、子どもたちの話に耳を傾けることができる最大の人数が８人程度である。少人数の場合は、指導者と一緒に塗ることもできる。（そのときには、子どもたちの承諾が必要である）普段から教師にかかわりを求めてくるある子どもは「自分で何とかしようと思ったけど、できない。だから一緒に塗って。」と言ってきた。そのときも、その子どもたちの気持ちを受け止め、一緒に塗った。不思議と、筆者も温かい気持ちになってきた。

特別支援学級で行ったときには、自閉傾向のある子どもと一緒に塗った。子どもと指導者の手の動きが同じような動きになってくると、楽しくなり、普段「塗る」ということが苦手な子どもたちでも楽しく取り組むことができる。指導者と一緒に取り組み、完成させたという充実感も得られる。子どもたちだけでなく、指導者もその充実感を味わえるのである。その充実感を共有することで、「つながっている」という気持ちも出てくる。また、うまくクレヨンを使えなかった子どもが、一緒に塗っている筆者の力の入れようや塗り方、などを見て学習することもある。初めに、塗り方の手本を示しておくことは、特別支援学級の子どもたちにとっては、必要な支援なのであろう。

さらに、家庭において親子で一緒に９色法をすることもできる。同じ画用紙に一緒に塗ることもできるし、それぞれに画用紙をもって、それぞれで完成させることもできる。親子でするときにも、やはりネガティブな評価するような言動は避けるべきである。子どもたちは、学校に行く前からあらゆる場面で評価されている。「きれいに塗れたね」「じょうずにクレヨンを使えるようになったね」と肯定的に子どもたちに声をかけることで、子どもたちは大きくなった自分を確かめる。学校で実施するのと同じように家庭においても、塗りあがったものをみて、きれいなものを「きれいだな」と感じる感性も養われるものと

考える。また、兄弟姉妹で、「色絵四法」をすることもできる。画用紙の大きさは、その兄弟姉妹の年齢や発達に応じて選ぶことができる。じゃんけんをしながらゲーム的に順番に塗っていく方法、それぞれが違う画用紙を持って、「私の好きな色ってさ、いつもはピンクなんだけど、今日は緑にしようかな」などと話をしながら塗っていく方法、いろいろな方法が考えられるが、子どもたちに任せて九つの部屋を塗っていけばよいと考える。

（2）「3・4・6・9色法」の開発のきっかけ

「1．はじめに」の中でも少しふれたが、この「色絵四法」の開発のきっかけになったのは、三重県下のB小学校の特別支援学級在籍の子どもたちにした、絵本「カニ　ツンツン」の読み聞かせである。その読み聞かせの最中に、あるいは読み聞かせの後に、絵本の中の絵や言葉に対してとった子どもたちの態度から始まったのである。「カニ　ツンツン」の絵に注目したのは、子どもたちである。

まず、この特別支援学級の子どもたちについて述べたい。B小学校の特別支援学級は、3名の在籍で、3名とも6年生である。

コウは、うまれつき体が弱く、小さい時に胃ろう・食道ろう造設手術を受けている。手術後も食道が細く、飲み込みにくい状況は続き、小学校に入学してからも給食のおかずを細かく刻んで出してもらっていた。4年生になった頃から、細かく刻まなくてもしっかりかむことで、のどに詰まらせることはなくなってきた。小さい頃はのどに詰まらせて、救急車で病院に運ばれたこともあったそうである。3歳の時には、右手母指の手術を受けている。そのため、右手の握力がほとんどなく、力が入らない。給食時に使うお箸は使えないので、スプーンやフォークを使っている。知的な発達の遅れは見られないが、身体面で特別な配慮が必要な子どもであるということで、入学時に障害児学級（現在の特別支援学級）の入級となった。鉛筆やはさみなどは左手で使っている。5年生までは、国語・算数の他の教科も特別支援学級で学習することがあったが、6年生になってからは、算数と国語のみで、ほかの教科は協力学級の友だちといっしょに協力学級で授業を受けている。特に介助も必要としないので、一人で協力学級での授業を受けている。交友関係もよく、コウが手伝って欲しいときには「だれか手伝って！」と自分から友だちに言うこともできる。例えば、家庭科の授業中にミシンを一人で運んでいたコウが、重さに耐えられなくなって「運べないよーっ！手伝ってよーっ！」と大きな声で叫んだ。その声を聞いて、まわりの子どもたちは「運んだろ！（運んであげよう）」と言って、コウの持っていたミシンをコウ

の席まで運んだのである。また、中学校に入学するときには、特別支援学級でなく、普通学級在籍になる予定なので、6年生の2学期末からは、中学校に行く準備を含めて、国語や算数も協力学級での授業を受けている。栄養摂取の面で先天的な問題があったので、体が小さく、体力もあまりない。しかし、暑いときや疲れているときに、水分をとって休むなどの体調管理も自分でできるようになってきている。最近では弟（小3）よりも体が小さいことを気にして「大きくなりたい」ということをよく口にしている。

マサは、自閉的傾向があり、軽度の知的な遅れもみられる。新K式発達検査（京都で開発され、改善された発達検査。発達指数で表される）では、発達指数４６（Ｈ２０年実施）である。学習は、ほとんど特別支援学級での授業であるが、体育や家庭、図工など、協力学級の子どもたちと一緒にできるときには、介助員に介助を受けながらいっしょに授業を受けている。6年生の教室での授業は他の6年生と一緒に受けられることが多いが、特別教室や体育館などの授業は一緒に受けられることが少ない。また、1年生入学時には給食は他の友達と一緒に食べられず、特別支援学級の教室で担任教師と2人で一緒に食べていたが、3年生になると、協力学級の子どもたちが毎日２～3人ずつ特別支援学級の教室に行き、来てもらった子どもたちと一緒に給食を食べていた。協力学級の子どもたちが、ほとんど一緒に授業を受けられないマサが、どんな友だちか知りたい、マサにどんな手助けができるか考えたいという気持ちがあったからである。5年生になると、多目的ホールで5年生全員と一緒に給食を食べることができるようになった。さらに、6年生になって他の6年生の手助けもあり、6年生の教室で他の友だちと一緒に食べることができるようになっている。また朝の会や帰りの会なども協力学級の友達の輪の中に入っている。体育館やホールのような広いところでの集会や授業に行くのは苦手であるが、5年生の時には母親の付き添いがあって、卒業式に初めて参加することができた（B小学校の卒業式は全員参加)。自分がしたくないことをさせられそうになると、大きな声を出したり、腕を噛んだりして、特別支援学級の教室に走っていってしまうこともある。朝、学校にきたら特別支援学級の教室に入る、チャイムがなったら協力学級の教室に行って朝の会をするなど、決められた行動はとることができるが、自分で考えての行動はなかなかとれない。

ナミは軽度知的障害で、特別支援学級に入級している。新K式発達検査の結果では、DQ６２（H19年実施）で、現在も発達障害支援センターに月1回通院している。特別支援学級での授業は、国語、算数、社会の3教科で、その他の授業は他の6年生といっしょに授業を受けている。しかし、製作活動や表現活動など、自分で考えてやらなければなら

ない家庭や図工は、自分が何をしていいのかわからず、特別支援学級の担任が横について、細かく指示をしなければ動けないことがある。手先が不器用で、道具をうまく使いこなせないこともひとつの理由であるが、挑戦しようとする意欲にも欠けるところがある。一度動けなくなると、パニック状態になり、泣き続ける。また、やり方を理解すれば、単純な計算問題などはよくできるが、算数の文章題や国語の時間の文章の読み取りになると、意味が理解できず、教師に頼る。自分から友だちの輪のなかに入っていくことは苦手で、周りから声をかけられるのを待っていることが多い。対人関係のスキルを身につける必要があり、特別支援学級や協力学級で「こんな場合はどうしたらいいか」と場面ごとに具体的に考え、適切な行動できるように支援している。5 年生になると、母親が「学校なんて行かなくていい（本人談）」と言ったので、2 学期の後半から 3 学期にかけて、不登校に近い状態であった。テストの点数や「上手・下手」の評価を異常なほど気にしている。「テストをするよ」と言われただけで、そのことで頭がいっぱいになり、他のことは手がつかなくなることが多い。自分が困っていることがあると、周りから声をかけられるのを待っている。自分から「手伝って欲しい」と言うことはなかなかできない。

そんな３人に、読書の時間に『カニ　ツンツン』の読み聞かせをした。この絵本は、物語形式でお話が進んでいく絵本ではない。起承転結を備えたストーリーはなく、場面だけの筋、いわゆるプロットだけで構成されている絵本である。この絵本の中に並べられているのは、リズミカルな意味のない言葉である。色彩がきれいなので、子どもたちの目をひきつける。このような絵本「カニ　ツンツン」の表紙を見せた段階で、コウは「ツンツンってなんやろ？」とつぶやいて、人指し指で何かをつつく真似をしたり、「ツーン」とした表情を見せたりしていた。読んでいる最中でも、本文に出てくる「ツンツン」に反応し、何度も「ツンツン」と口にしていた。コウが「ツンツン・・」と言っているのを聞いて、ナミもマサも同じように「ツンツン・・・ツンツン、ツンツン」とリズムよく口ずさんでいた。読んだ後、心に残ったことや絵本の世界から想像したことを自由に描いてみようと呼びかけ、自由に描いた。そのときのコウの絵が、図１－１である。

「好きな色は？」と聞かれると即座に「赤」と答えるコウが、この絵を描くときも迷わず赤のクレヨンを取り出し、「でかい！から、でかちゃららつんつんだ！」（絵本の中に出てくる「ちゃらら」「つんつん」を組み合わせて作ったいわば造語。本中の言葉としては「デカチャララ　ツンツン」という言葉はない）を描き始めた。絵本の中の「ツンツン」は橙色であるが、コウの描いた「ツンツン」は橙色でなくて、赤い色をした、まさに生きてい

る「ツンツン」（カニのようなもの）の姿である。いつもは、大きなものを描く課題で（例えば校庭の木）8 ツ切の画用紙（380 ㎜×270 ㎜）の画用紙を渡されたりすると「かけやん！（描けない）」と言って投げ出すところであるが、8 つ切の画用紙より少し小さめのA4 判の画用紙（297 ㎜×210 ㎜）であったことや、絵本の意味のない言葉の連続の楽しさを十分に堪能し、自分の好きな色を使っての描画であったことが、コウの気持ちを「がんばって描こう」という気持ちにさせ、最後まで自分だけの力で絵を描いた。握力の問題もあって、しっかり色を塗りこめるということが苦手であったが、このときはしっかりクレヨンを持ち、「ツンツン」のなかに赤色を塗りこめた。出来上がった自分の絵を見てコウは「きれい！」「ちゃんと塗れたなあ」と満足な表情で感想を言っている。また、絵本の中の「ツンツン」（カニのようなもの）の口は描かれていない。しかし、コウの描いた「ツンツン」には、口が描かれている。絵を描いている最中に、何度も「『つ』の口ってこんなんかな？」と自分で「つ」の口の形をやってみせ、「カニ（と思われるもの）」に口をかいたのである。絵本の中の「カニ」から自分で作った「生きている蟹」に変化したのだと考えてよいであろう。「このカニは『ツンツン』って言ってるの」と言って、「生きているカニ」にしたのである。

マサは、コウが「デカチャララ　ツンツン」と口にしてから、同じように「デカチャララ　ツンツン」と何度も言い、手をたたきながらうれしそうな表情を見せていた。初めはリズムを楽しんでいたようであるが、「デカチャララ」のところをまわりの大人がびっくりするような大きな声で言ってみたり、「ツンツン」を優しく言い直したりしているうちに、「デカチャララ　ツンツン」のイメージが自分の中に出来上がってきたようである。実際には絵本を見ながら「ツンツン」を描いたのであるが、マサも絵本に出てくる橙色の「ツンツン」（カニのようなもの）を赤で描き、生きているかのような「ツンツン」にしたのである。（図 1―3）

ナミは、「デカチャララって、なんか変なの！」といいながらも、「このカニさんは、ツンツンさんなの。ツンツンってつつくの。」「ツンツン、ツンツンって。どんなときでもツンツンって。」と、大きなカニを描き始めた。（図１－２）

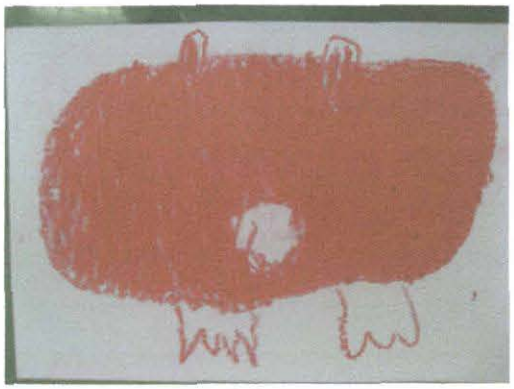


図2－1 コウの「カニ ツンツン」

図2－2 ナミの「カニ ツンツン」

図2－3 マサの「デカチャララ ツンツン」

図2－1、2－2、2－3 いずれもA4判の画用紙

この「カニ ツンツン」を描いた後、コウの表情が和らぎ、今度は自分の描いた「生きたカニ」を物語に登場させての、「自分だけの物語作り」が始まったのである。

ツンツンには、友だちがおって、それは自分と同じ色だった。「ツンツン」「ツンツン」って言いながら、一緒に遊んでいるうちに、新しい色のツンツンが近寄ってきたから、ぼくらは「なんか変な色！新種や、新種や！」って指差して笑ってて、（最初は）一緒には遊ばんかったん（遊ばなかったんだよ）。でもそのうち一緒に遊ぶようになるん。一緒に遊んだから仲良くなって、新種（のツンツン）も前からいる色（のツンツン）も関係なく、みんな仲良く友だちになったん。

ツンツンの話であるが、途中から「ぼく」になっている。コウが自分の作った物語に入り込んでしまっている様子がよくわかる。コウが、自分で描いた「ツンツン」から物語を作り、それを語っていくうちに、ゆったりとした気分になり(それは表情からもよくわかる)、元気になっていく過程が筆者にはとてもよくわかったのである。

このときの、コウの行動や心の動きを繰り返し確認し到達したのが、小山内が考案した「9 色法」であった。自分の好きな色を使っているという点、そして、自分の好きな色を塗りこめているという点が、「9色法」の開発のきっかけとなった。

この「色絵四法」の作業は、単に色を塗るだけなので、ある程度工夫が必要な絵や文章で自分の気持ちを表すよりも、抵抗なく取り組むことができる。また、クレヨンを使うことで、クレヨンの程よいやわらかさが心地よく感じられるようだ。クレヨンでの色の塗り方は、「塗りにムラができないように、しっかりと塗る」と指示する。しっかり塗ると、クレヨンの発色がよりよくなり、きれいに見える。また、デジタルカメラで撮影した画像を見ると、光が参加して一層きれいに見えるのである。自分の描いた実際の色絵よりも、デジタルカメラや携帯電話の写真機能で撮影した画像がはるかにきれいに見えることで、自分の描いたものにかなりの自信を持つことができる。塗っているときには気がつかなかった美しさに驚くこともあり、新たな自分を発見できるのである。つまり自己表現と自己実現がそこでなされていると考えられるのではないだろうか。

（3） 3・4・6・9色法の関係

「9色法」からスタートしたいわば「色塗り」であるが、試行を重ねるうちに、「色を塗るだけなら、小さい子どもにもできるのではないだろうか」という思いが筆者に出てきた。3歳児、あるいは4歳児でも「色塗り」だけに集中して取り組むことができれば、つまり集中力が出てくると、もっともっとその生活力・想像力が豊かになるのではないかと考えた。そこで、3色法、ついで4色法の開発・試行となったのである。6色法は、4色法と9色法をつなぐためのものであり、原理的には4色法となんらかわりはない。

図２－４で説明する。9色法は、①～⑨までの9つの部屋に色を塗る。1軒のアパートと考えれば、わかりやすい。9つの部屋それぞれに色を住まわすのである。だから、この部屋という言葉は、教示する際もそのまま使用している。3色法は、①・②・③を塗ればよい（⑦・⑧・⑨でも同じ)。4色法では、①・②・④・⑤を塗ればよい。6色法は、①・

②・③・④・⑤・⑥を塗ればよい。

①	②	③
④	⑤	⑥
⑦	⑧	⑨

図2－4 各法の関係

このように各部屋に色を住まわすと考えれば、３・４・６・９色法の各法は、兄弟のような関係なのである。部屋ごとに自分の好きな色を自分の好きな順番で、住まわしていけばいいのである。

試行を重ねるうちにわかってきたことであるが、3色法、4色法、6色法、9色法と、塗る部屋が多くなればなるほど難しく、芸術的になるわけではない。保育園の3歳児クラスから小学校六年まで試行したが、年齢が低いほど、あるいは何回も色塗りを経験している子どもほど、自由に絵を描く。例えば、1年生では4色法の試行のときに「4色では自分の好きな色を全部描けやん（描けない）。」と言って、ひとつの部屋をさらに二つに分け、5色塗っている子どももいた（図２－5）。あるいは、年中組のある女の子は「私、虹色が好き！」と言って、ひとつの部屋に虹を描いた（図２－６）。一方、小学校 2 年生では、同じ教示をしても虹色にしたり、色々な色を重ねて描いたりということはしなかった。このように、「自分の好きな色を塗りましょう」と同じ教示をしても、年齢が高くなると、「ひとつの部屋を単色で塗らなければならない」と考えてしまう傾向が強くなる。

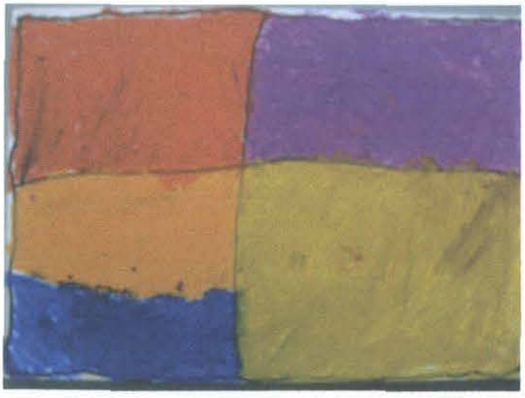


図2－5 4色法だが、4つの部屋を守りつつ、いわば“5色法”に変化（1年生）

図2－6 虹色が大好き（保育園年中組）

また、「好きな色１色」という指示もできる。名刺のような小さいカード（７㎝×１０㎝

程度）を渡して、その中に「自分の好きな色」「今の気持ちを色で表すと」と指示し、１色だけ塗るのである。クレヨンの使い方に慣れてくると、だんだん塗るのに時間がかからないようになってくる。

色を塗っている最中の子どもたちの話を聞いていると、へびが出てきたり、今子どもたちの間で流行中のキャラクターが出てきたり、自由に想像している。自分の好きなキャラクターになりきって、色を塗っている姿も見られた。子どもたちの想像の世界を広げることもできる「色絵四法」である。

３色、４色、６色、９色、と塗る色の数は違うけれども、子どもたちの色を塗る姿勢はなんら変わらない。３色から４色、４色から次は６色、その次は９色と、段階を踏んで進んでいくと、子どもたちも「自分たちはこんなにできるようになってきた！」という有能感も生まれてくる。段階を踏んだ試行であっても、そうでなくても、「かんせいーっ（完成）！」「おもしろい」「できた！」という達成感を味わうことができる「色絵四法」である。

4.「色絵四法」の試行の実際と考察

この「色絵四法」を、三重県内のA保育園の年少クラス、年中クラス、年長クラス、三重県内B小学校の1年から6年までを対象に試行した。試行した一覧は以下の表のとおりである。

表：試行対象者・試行内容・試行日（2008.05.03～2008.10.22）

	対象者（在籍数）	試行内容：実施日
1	A園年少組（3～4歳） 男子17女子9　計26名	①　3色法：7.29 ②　4色法：8.27
2	A園年中組（4～5歳） 男子13女子13　計26名	9色法：7.29
3	A園年長組（5～6歳） 男子5女子10　計15名	9色法：7.29
4	B小学校1年生 男子8女子9　　計17名	①　1色法：6.18 ②　3色法：7.2 ③　4色法：10.8 ④　6色法：10.15 ⑤　9色法：10.22
5	B小学校2年生 男子2女子11　計13名	9色法：6.11
6	B小学校3年生 男子5女子4　計9名	9色法：6.27
7	B小学校4年生 男子7女子9　計16名	9色法：10.15
8	B小学校5年生 男子のみ9名	9色法：6.2
9	B小学校6年生 男子7女子9　計16名 （特別支援学級児童を除く）	9色法：5.27

10	B小学校特別支援学級 男子２女子１計３名 全て６年生	① ９色法：5.9 ② ９色法：5.27（6年生全員） ③ ９色法：5.30 ④ ４色法：6.20 ⑤ ３色法：6.27 ⑥ ６色法：9.12
11	A園の教師たちとその家族	① ９色法：7.26、7.27、8.7 ② M先生とその家族：8.12
12	筆者（岡村）と筆者の子ども （子ども：小学２年、A園年長組）	① 筆者と筆者の子ども２人：5.3 ② 小２の子ども：8.7 ③ 筆者の子ども２人：5.3、8.8 ④ 年長児の子ども：7.29、8.4 ①～④全て９色法 ⑤ 筆者と筆者の子ども２人、筆者の姪（小6）計４人：8.13 ⑤は４色法

＊注１：A園とは、三重県下の定員９０名のA保育園である。「色絵四法」を試行したのは、幼児クラス（年長組14名、年中組26名、年少組26名）である。

＊注２：B小学校の全校児童数は、８３名。小規模校である。全員に試行した。

＊注３：保育園の試行・小学校１年、４年の試行は筆者が行い、担任の保育士・教師は子どもの様子を観察していただいた。その他の学年の試行は、筆者が単独で行った。

「色絵四法」の試行は、5月3日に、筆者の子どもと一緒にした「9色法」の試行から始まり、10月22日の1年生の「9色法」の試行まで、半年足らずの間にできる限りの試行を重ねてきた。

以下に、「色絵四法」の試行とそれに対する子どもたちの感想、実施者の感想を、考察を加えながら述べていくことにする。なお、文中に出てくる子どもたちの名前はすべて仮名であることを明記しておく。

（1）3色法

3色法は、三重県内のA保育園年少組（3、4歳児在籍)、B小学校の1年生・特別支援学級で行った。

《A保育園年少組》

この子どもたちの中には、0歳児から保育園に通っている子どももいれば、1歳になってから入園した子ども、2歳になってから入園した子ども、3歳になって入園した子どももいて、保育園での集団生活の経験は様々である。乳児クラスから保育園に通っている子どもは、日常の保育の中でクレヨンを持って絵を描くという経験を重ねているが、3歳になってから入園してきた子どもの中には、絵をほとんど描いたことのない子どももいる。

このクラスでの教示は、「大好きな色のクレヨンを選んで、色を塗りましょう」であった。子どもたちの中には、「自分の好きな色が3色」では、足りないと言わんばかりに、3つの部屋の中に色々な色を混ぜて塗っている子や、色を塗った上からさらに違う色を塗り重ねている子もいた。混色を楽しんでいる子どもに「どの色が一番好き？」と筆者が声をかけると、「全部好き！」と元気よく返答する子どもや「黄色塗って、ピンク塗って、も一回黄色塗った。だって黄色好きやもん」と自分の塗っていった過程を説明してくれる子どももいた。子どもにとって「色」は、全部好きな対象なのである。たとえ、「一番好きな色」と特定しても、子どもたちは「全部好きな色なので、迷ってしまって選べない」という状況が生まれるのではないだろうか。

また、クレヨンをうまく握ることができず、力を入れることが難しい子どもの中で、「塗ること」に集中できていない子どもも5～6人いた。何度もクレヨンを持ち直したり、塗る方向を変えたりしていた。持ち方を変えても、うまく塗ることができずにいた子どもたちは、十分に色塗りを楽しめなかったように思われる。

次に、塗色中、筆者が印象に残った子どもたちの様子を詳しく述べていく。

「これは炎」と言って、赤く塗った部屋を指差した（図3－1）ユウキは、色塗りを終えて満足そうな表情であった。ユウキは、4色法の試行の時には4つの部屋を塗り終えてから、自分の座っているいすにも自分の好きな赤のクレヨンで、色を塗った。まわりから見れば、ユウキの行動は「困った行動」になるであろうが、ユウキの気持ちに寄り添えば、「自分の好きな色を使っていたら、もっと好きになった。自分の座っているこのいすも、ぼくの好きな色で塗ったら、もっとぼくは元気になれる」という思いがあったのではないだろうか。そのくらいユウキにとって、赤は特別な色であったのであろう。あるいは、色

を塗っている間に「特別な色」に変化していったのかもしれない。

「この色はゴーオンジャー（子どもたちの間で人気のある TV 番組のキャラクター）の赤、かっこええやろ？」と教えてくれたフウは、色を塗っている最中から自分がゴーオンジャーになりきっているようで、「ゴーオンレッド参上！」「おりゃ！」「行くぞ！ブルー」などと言いながら色を塗っているのが、印象的であった（図３－２）。

図３－１　赤く塗ったところは「炎」

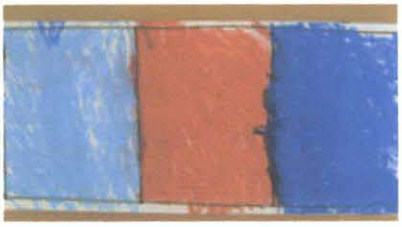


図３－２「赤はゴーオンレッド、青はゴーオンブルー」

ユメトは普段の保育の中でも多動傾向がある子どもである。運動会の開会式のときに滑り台に登って、大きな声を出したり、生活発表会の時に自分の出番ではないのにもかかわらず、高さ３０ｃｍほどの発表用の舞台に上がってうろうろしてみたりと、保育士も母親も困った表情で追いかけているのがとても印象的な子どもである。この３色法の試行のときも、筆者が「ユメ君、一緒にやろうね。」と声をかけると、ユメトは返事こそしたものの、説明の時には保育室から出て行ってしまい、保育士が連れ戻して横について、ユメトの行動を制限して様子を見ているという状態であった。つまり、多動の激しい子どもであったである。説明が終わって、ユメトのまわりの友だちが色を塗り始めると、ユメトは、初めのうちはまわりの友だちが塗っている顔を覗き込んだり、「なにかおもしろいことあるのかな？」という表情で机の周りをうろうろとしたりして、「塗ること」に興味は示してもなかなか作業に入れなかった。まわりの友だちが３色を塗り終わる頃になって、ユメトはやっと自分の席に座って、自分のクレヨンの箱を眺めて自分の好きな色を選んでいた。色を塗るという単純な作業であるが、だんだんと集中していく姿が見られた。色を塗っている最中には「うーっ！」「あーっ！」「おーっ！」と声を上げていた。筆者は、ユメト自身が発している声がユメトの行動（色を塗るという行動）を後押ししているように感じた。しかも、色を塗っている最中は、多動傾向は見られなかったのである！！（だから、このことは保育者であるこのクラスの担当の保育士もひどく驚いていた。）３色塗り終わってから、ユメトは筆者に色絵を見せに来てくれた（図３－３）。とても落ち着いた表情で、大きな声で「できた！」と言った顔は、満足感で満ち溢れていたように筆者には感じられた。クレヨンで「色を塗る」という作業は、注意散漫な子どもたちをも集中させていく力があるの

がわかる。3 色を塗り終わったユメトは、走って保育室を出て行ったが、その後の様子を担当の保育士に聞くと「今まで走り回っていたのに、この日（色塗りをした日）は、うそのように落ち着きました」とのことであった。

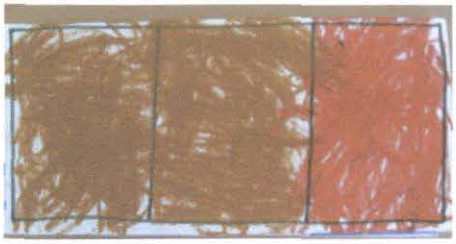


図 3−3 ユメトの 3 色法

《B 小学校 1 年生》

この学年の子どもたちは、元気いっぱいで、エネルギーに満ち溢れている。朝のショートスタディの時間に（1 時間目が始まる前の 10 分間、基礎的な学習や読書する時間）試行した。

画用紙の大きさは A4 判の画用紙の 3 分の 1（縦 99 ㎜×横 210 ㎜）の画用紙を使った。枠は予め筆者が描いておいた。子どもたちには「クレヨンの色をながめてみよう！」「クレヨンの色の中で自分を元気にしてくれる色は何色かな？」「この色を見ていたら元気になっていくよという色はどんな色かな？」と問いかけ、「配った画用紙に、自分が元気になっていく色を塗ってみよう」と教示した。教示した後、子どもたちはそれぞれに「自分を元気にする色」を選んでいた。子どもたちは「今日はちょっとのど痛いから元気がない。だから黄色がいい」「元気にする色だから明るい色がいい」「燃える色が元気になる」「がんばれがんばれの色」などと言いながら、クレヨンを選んでいた。「元気な色」から発想して、「燃える色」「明るい色」「がんばれの色」と、「（自分にとっての）元気な色」を特定して選んでいる。また、自分の選んだ色（私は赤、ぼくはピンクなど）をみんなに言うと、まわりの友だちがそれに反応し答えていた。例えば、「ぼくは赤！」と言った発言に対して、言った子に「そうか、○○ちゃん（の元気な色）は赤なんや（赤なんだね）。」などと返していた。このようなやり取りを聞いていて、子どもたちが「自分が選んだ元気な色」が同時に、その集団全体の「元気な色」になっていくことが筆者にも伝わってきた。色を塗るという作業を、集団で実施するプラス面であることは見逃してはいけない。

また、友だちの選んだ色と同じであったときには、「やった！○○ちゃんといっしょ」という子どもの声がよく聞かれた。友だちと選んだ色が一緒であることで、「同じ色を選んだ

友だち」というつながりが感じられ、仲間意識が生まれてくるようである。また反対に「△△くんがピンク（をえらんだ）だから、ぼくは赤にしよう」という発言も聞かれた。友だちが選んだ色を否定するのではなく、お互いに認め合った発言だと筆者には感じられた。子どもたちが口にしている色は、すべて「元気な色の仲間」であり、それぞれのよさを認め合った温かい雰囲気が生まれてくる。「友だちと違って当たり前、だけど仲間だよ」という色絵からのメッセージが、子どもたちの心の中に浸透していくのがわかる。だから色絵は「ちがいを認め合う」という気持ちを育てることにつながっていくのであろう。

《特別支援学級》

特別支援学級では、9色法をした後にこの3色法を試行したので、コウやナミは「3色やったら（9色にくらべて）簡単やん！」と言って、筆者が「色を塗ります」という教示をする前に、クレヨンの箱の中を眺めていた。コウは、「元気な色って、赤やな」と言って、すぐに赤のクレヨンを出し、塗り始めた。マサは何も言わずに、すぐにいつものように赤のクレヨンで塗り始めた。マサは、色塗りをするとき、赤のクレヨンで色を塗ることから始めることが多い。図工のポスターを描くときも、一番初めに赤のクレヨンを使って彩色した。「好きな色は？」と問いかけたときも、何も言わずに赤のクレヨンを取り出し、色を塗り始めた。ナミは、「元気な色は赤。」「前はピンクやったけど、変わったん。ピンクは嫌いになったん。」と言って、他の2人と同じように赤のクレヨンを取り出した。

ナミは、赤のクレヨンを使い終わってから、「きれいな色のほうが元気になれる」と言って、自分がすでに使った色のクレヨンと、寒色系の色、黒や茶色のクレヨンを箱から出してしまった（9色法のときに、一度使ったクレヨンは箱から出して、次のクレヨンを選びやすいように自分で工夫していた）。そして、残ったクレヨンのなかから「元気な色」を選んだ。つまり、ナミにとっての「元気になれる色」とは、箱の中に残った赤、オレンジ、ピンク、紫、黄緑の各色なのである。筆者は色の感じ方が子どもたち一人ひとり違うものだと改めて実感した。

赤のクレヨンで一番初めの部屋を塗った後、ナミはクレヨンの箱に残った色から選んで塗っていった。違う箱に入れることで、ナミの意識からはずれ、「自分の元気になる色」だけに浸ることができる。自分の元気になる色から最後の1色を選ぶのに、迷っている様子が伺えたが、「自分の元気になる色」で、すでにクレヨンを絞りこんであるので、いつもより選びやすいようであった。

図3－4　ナミの３色を塗っている様子

右の箱（クレヨンの箱のふたの部分）に「元気になれない色」を選び出し、左の箱にナミの「元気になれる色」を残してある。

また、この特別支援学級では、試行の一覧表以外に何度か３色法を試行した。３色法から９色法まで全てを試行した後、「きょうは、何色（なんしょく）塗る？」と筆者が問いかけた。コウが「きょうは３色の気分やな」と言って、３色法をしたことがある。それまでに何度も各色法を経験しているので、塗色の手順もわかり、何色（なんしょく）塗るかを決めてからの作業は速い。ナミは「きょうは、さっちゃんシリーズ」と言って、自分の妹の好きな色を順に塗った。妹の好きな色まで知っているナミは、妹と普段から一緒に遊んでいて、妹と仲がよいことがわかる。コウは、「きょうは一番に青の気分かも」と言って塗り始めた。マサはいつものように何も言わずに赤のクレヨンを取り出して、自分のペースで塗っている。いつもと同じように「自分の好きな色を塗ろう」と教示しても、自分で自由にテーマを決めて、色を選んでいる３人の姿があった。マサは３色塗り終わってから、「この色は何の色？」と、マサが塗った青色の部屋を指差して聞くと、「青、お母さん。緑、お父さん」と答えた。そして残った赤は誰の色か聞くと「赤はマサ」と答えた。普段から赤を選ぶことが多いマサであるが、何回も塗っているうちに「赤は自分の色」、自分に最も身近な色になり、マサにとっての特別な色になっているようであった。

色塗りという体験が、子どもたちの自由に想像する力を引き出しているように感じる。

（２）４色法

４色法の試行は、それまでに３色法を経験していたＡ保育園年少組とＢ小学校１年生、特別支援学級で行った。

《Ａ保育園年少組》

この子どもたちは、３色法の試行の約１ヵ月後に４色法を試行した。

３色法の試行のとき、一度にクラス全員に画用紙を配り、色塗りをした。しかし、人数

が多すぎて、筆者は子どもたちの様子を十分把握できなかった。そのため、今回は3つのグループにわけ、それぞれ8～9名のグループで色塗りをした。

試行の初めに、筆者は「前のときは 3 色使って自分の好きな色を塗ったこと」「年中組では、9つの部屋に9つの自分の好きな色を塗ったこと（年少組が3色法を試行した日に9色法を試行している。詳しくは「（4）9色法」の項で述べる）」「年少組も、少し大きくなって、4色塗ること」を子どもたちに説明し、前回子どもたちが塗った3色法の画用紙をそれぞれに返した。4つの部屋を作った画用紙（A4判の半分の大きさの画用紙・148㎜×210㎜）を渡されると、子どもたちは、「年中組さんになれるの？」「お兄さん・お姉さんになっていくの？」と、聞いてきた。自分より大きいお兄ちゃんやお姉ちゃんのようにきれいに色を塗れるようになっていくことがうれしい様子であった。

「色絵四法」で、筆者と色を塗るのは 2 回目ということもあり、「さあ、色塗りをしましょう！」と筆者が呼びかけると、すぐに自分の好きな色を選び、色を塗っていく子どもが多かった。3 色法のときは、なかなか自分の好きな色を選べなかった子どもたちも、3つの部屋に3つの色（あるいは3色以上）が塗られている自分の色絵を見て、以前に色塗りをしたことを思い出し、塗り始められる子どもが多かったようである。前回、クレヨンを持つ手に力が入れられなかった子どもたちがいたので、4 色法をする前に太くて短いクレヨン（直径１５㎜）を用意した。これまでは直径10㎜ほどのクレヨンを使っていた。

左がいつも使っていたクレヨン。直径1cm、長さが 6. 8cmである。一方、今回使った右のクレヨンは、直径 1. 5cm、長さは 6cmである。

子どもたちは、色を塗りながら色々なことを話す。その内容は子どものあそびなどの日常生活の話であったり、「色」に関係する話であったり、テレビの番組についての話であったり、バラエティに富む。色を塗っていると、どんどん話をしたくなるようである。

そのなかで、サクラが「これって、家族みたいに見える」「紫がお母さんで、黒がお父さん、そして緑はおにいちゃん。サクラな、お兄ちゃん大好きなん。だっていっぱい遊んでくれるもん」と言ったことをきっかけに、まわりの子どもたちが自分の塗った色絵の各部屋を指差しながら、「この部屋がお父さん、こっちがお母さん、こっちにはお姉ちゃん、

これがぼく（の部屋）！」「黒がじいちゃんとばあちゃんで、赤がお姉ちゃんとお母さん・・・」などと話を始めた。子どもたちが色を塗る中で、家族の絆を再発見したことになるのではないだろうか。そのうちにサクラは、「きょうは、お父さんがお迎えなん。おかあさん、仕事が忙しいんやって」と、自分の生活を語り出した。つまり「色を塗る」ということが、自分の生活をそのまま描いていることになっているのであろう。

カイトは、色の中に子どもたちの人気のキャラクターの姿を見ている。大人にとって「黒色」は黒色でしかないが、カイトは「黒色」の中に、自分の好きな「ブラック」（何人かいるキャラクターのうちの一人）を見ているのである。黒色を塗っている間も、「このブラック（自分の塗った黒色）がやっつける。悪者を退治してやる！」と話をしている。塗色後に「ブラックは強いから、全部黒に塗った」とカイトは言っている。

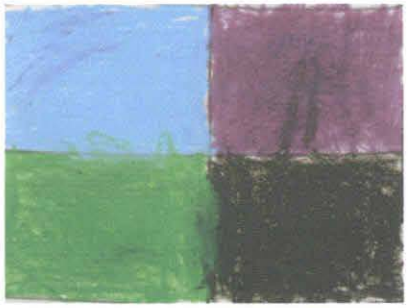


図3－5 サクラの4色法

図3－6 カイトの4色法

前出のユメトは、この日も色を塗ることに初めは集中できなかった。友だちの机のまわりをうろうろしたり、本棚にある絵本を引っ張り出したり、「色を塗ること」以外のことをしたりしていた。しかし、クレヨンを持って、自分の好きな色を選ぶと、とても集中して塗っていた。２つの部屋をピンクで塗った後、筆者に見せにきた。「とっても上手に塗れたね。あと、２つもきれいに塗れるかな？」と筆者が言うと、とてもうれしそうな顔で「うん。」とうなずき、自分の席に戻って色塗りを再開させた。（図３－７）

さらにユメトは、黄色の上に紫でぐるぐる描きをし、「黄色の上にへびがいんねん。そんで、紫食べたん（黄色の上にへびがいるんだよ。それで、紫を食べたんだよ）。」とお話を作っている。「へび、怖くない？」と聞くと、「こわくないよ！大丈夫！」と答えた。ピンクの部屋は、初め白く塗り残しているところが多かったので、筆者は、「一緒にもう一回塗ろうか」とユメトを誘い、二人で「こんこんこん、いますか？いますよー」とドアをノックするような感じでクレヨンを動かした。ユメトはきゃっきゃっと笑っている。「もっとして、なあ！もっとしてよ！」と筆者に要求したので、一緒に「こんこんこん・・・」と何回もやった。終わってから「また一緒に色ぬりしような！」と言って保育室から出て行

った。

図3－7 ユメトの4色法 黄色の部屋に紫の「ヘビ」がいる

フユキは、色を塗っているうちに偶然できたクレヨンの線を「へび」に見立て、その画用紙の中で、お話を展開させた。「『へび』がこっちにやってくる。と思ったら、赤色を食べにいった。あー、よかったって思っている。」という話を作ったフユキは、とてもうれしそうな表情であった。

4色のなかに「へび」を登場させた子どもが、ユメトとフユキのほかにも2人いた。初めにユメトが「へび」の話をしていたのを聞いていたようで、ユメトが「へび」を登場させると、次々に自分の作ったお話に「へび」を登場させる子どもが出てきた。フユキもその一人である。同じ「へび」を登場させても話の内容は全く違う。子どもたちがお話を作っていく想像力の豊かさに驚くばかりであった。

図3－8フユキの4色法 ピンクの部屋にヘビがいる

短くて太いクレヨンを持った子どもたちは、手に力が入り、ぐいぐい塗ることができた。画用紙の上で、「とんとん」と、音を楽しんでいる子どもも何人かいた。「とんとんとんって何の音？」と筆者が聞くと、「とんとんとんってドアをたたいてる。だれかいますか？って」と、ここでもお話を作っている子どもたちの姿が見られた。

グループに分けて行ったので、筆者は子どもたちの話をよく聞くことができ、色塗りを

しているときの様子もじっくり観察することができた。どの子どもも、自分の好きな色を塗ったことに加えて、まわりにいる大人、すなわち筆者と担任である保育士に、自分の話を聞いてもらうことができ、満足そうな笑顔で保育室を後にした。

《B 小学校 1 年生》

子どもたちは、「(筆者が) 久しぶりに 1 年の教室に来てくれる」と担任の先生から聞いていたので、とても楽しみにしている様子だった。4 色法を試行する前、筆者と学校内で会うと、「きょう、色塗りしたい！」「なんで色塗りしやんの？（しないの？)」と尋ねてくる児童もいた。「色塗りしたい？」と聞き返すと、「うん、色塗りしたい！元気になるもん」と、明るい声で答えてくれた。「それじゃ、今度色塗りの準備して 1 年生の教室へ行くからね」と約束すると、「うん、楽しみにしてるわ！」とその児童は答えた。

そして、4 色法の色塗りの日を迎えた。4 色を塗る前に、7 月に描いた色絵（3 色法）を子どもたちの手元に返し、「前にはこんな色塗ったよね」と、3 色を塗ったことを思い出すことから始めた。「ぼく、こんな色塗ったんや・・・」「やっぱり黄色かな。」「おー、きれい！」を自分の描いた色絵を見てあらためて心を動かされている様子のわかる言動が多数見られた。

画用紙（A4 判の半分の大きさの画用紙・148 ㎜×210 ㎜）を配って、「きょうは、4 色塗ります。まず、枠を描きましょう」と、枠を描いた見本を見せ、子どもたちは各自油性フェルトペンで枠を描いた。全員が 4 つの部屋を作ったことを確認してから、筆者は「それでは、きょうは自分の好きな色を 4 つ、塗ります。」と子どもたちに教示した。

教示後、「塗ってもいい？」とケントが聞いてきたので、「いいよ、枠描けたから、4 つの部屋に自分の好きな色を、自分の好きなところから塗っていってね」と言うと、「やった！ぼく緑好きなんさ（緑好きなんだよ）！」といって、塗り始めた。リュウが緑を塗っているときに発した「ぼく、緑好き」という言葉に反応して、ケントは、「ぼくも緑好き！」と答えている。ケントは自分が黄色を塗っているときに「黄色塗っている人いますか？」と友だちに聞き、「はーい！」とまわりの友だちが答えると「やっほーっ！」と嬉しそうな声を出した。同じ時間に同じ色を塗っている友だちがいることを確認してとても喜んでいる様子であった。

リュウは、「ぼく、本当は虹色がすきなん。だってきれいやろ」と言って、自分の色絵の 3 つ目の部屋に虹を描いた。その声を聞いてか、リュウの虹を描いた絵を見てか、まわ

りの子どもたちも自分の色絵の中に虹を描いた。虹を描いた子どもは、とてもうれしそうにしている。誇らしげに見せに来る子どもも2～3 人いた。子どもたちが好んで虹を描くということは、1 年生以下の子どもたちによく見られた。虹は、色の仲間が同じ方向を向いて並んでいる。どんな色でも、同じ向きに並べると子どもたちは「虹を描いた」と言う。「虹を描く」ことは、仲間である自分の友だちが並んでいるという姿を想像するのかもしれない。虹を描くことは、仲間であることの確認、「(友だちと) 一緒にがんばって行こうね」という子どもたちの思いを描くことになっているのかもしれない。

また、ヒロヤは、「好きな色 4 色ではたりやん (たりない)」と言って、4 つ目の部屋を2つにわけ、自分の好きな色を 5 色塗った。4 色の枠のなかで、自分で工夫し、いわば“5 色法”を創案していると言うことができる。アサヒは、「4 色法」にもかかわらず、「もっといっぱいの色を使ったら、きれいになるよ。」と言って、4 つ目の部屋を多色で塗った。これも、アサヒが自分で創案したいわば“多色法”と言ってもよいであろう。一人の子どもが創案した“多色法”をまわりの子どもたちも真似している。ただ真似するのではなく、色を塗るときに自分のアイディアを加えて、さらに発展させていく。「色絵四法」を組み合わせ、繰り返し色絵を作ることによって、自分で工夫を加えて自分の色絵の方法を編み出している子どもたちの様子を見ていると、色絵の限りない発展の可能性を感じることができる。何度も色を塗ることで、この世に 2 つとない創造的な色絵が作り出されていくであろう。

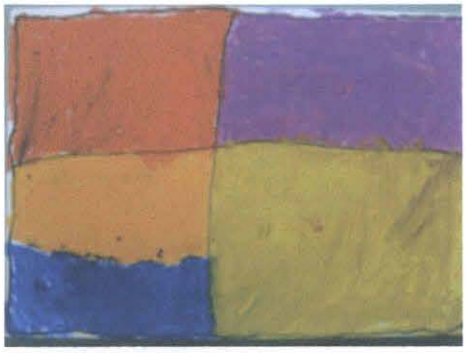


図 3－9 ヒロヤの 4 色法の枠を守りつつも自分で工夫したいわば“5 色法”

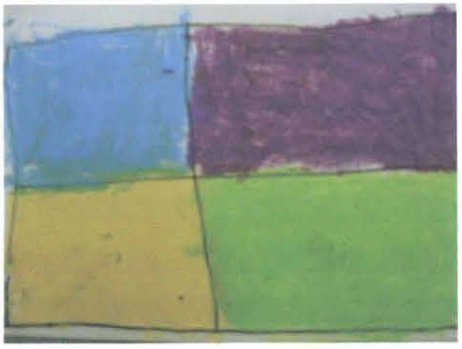


図 3－10 ケントの 4 色法

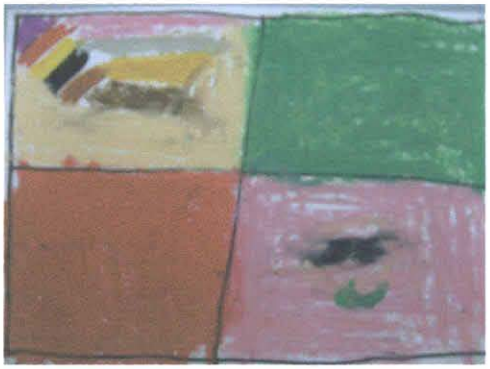


図 3－11 リュウの虹色が参加した 4 色法

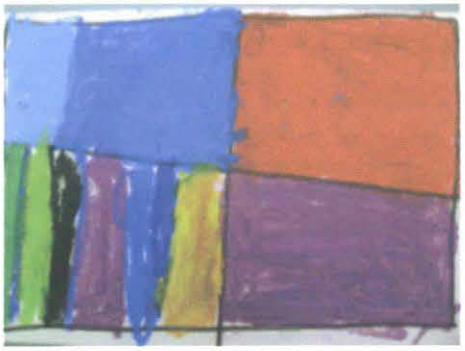


図 3－12 アサヒの「いっぱいの色で塗ったら もっときれいになるよ！」の“多色法”

《特別支援学級》

この 4 色法の試行の日、筆者が特別支援学級の教室に入ると、3 人ともあまり元気のない様子であった。というのも、この日のナミは 3 時間目の社会科の授業中にうまくはさみを使えずに 20 分ほど泣いて過ごしたからである。次の 4 時間目の家庭科の時間も、ナミは家庭科教室には行かず、特別支援学級の教室で担任教師と 2 人でエプロンを作っていた。泣いたナミを見て、マサもコウもナミのことを気にしながらも声をかけることができずにいた。3 人のなかで、1 人でも元気がなくなると、3 人とも元気のない状態になってしまうのである。

給食の時間と昼休みをはさんで 5 時間目に色塗りをした。

元気のない 3 人の様子を見て、筆者は「気分を変えて、色塗りを楽しみましょう。」と声をかけ、B5 判の半分の大きさの画用紙（128 ㎜×182 ㎜）に 4 つの部屋を作った画用紙を渡した。コウとナミは「きょうのは、（前やった 9 色法の画用紙に比べて）ちょっと小さいなあ」と言いながらも、自分でクレヨンの箱を取りに行って、すぐにふたを開け、準備をしていた。マサもコウやナミの行動を見て、遅れながらも自分でクレヨンの箱を取りにいった。この日、筆者は子どもたちに「今の気分を色で表すと、どんな色になるかな？」と教示した。

ナミは、「今の気分は？」と自分自身に向かって何度も繰り返した後、今度はナミの方から介助の先生に「先生の気分は？」と問いかけている。「ナミさんの気分は？って聞いているのだから、ナミさんが色を選んで。」と介助の先生に言われた。今度は「何色？」と自分ではなかなか選べない様子であった。そのときの気分に合った色を選ぶということが理解できなかったので、先生のやることを真似して、自分もやってみようと考えたのであろう。

気分のよいときは自分で色を選んで塗ることができるのだが、この日はクレヨンの箱を眺めてみても自分の気分に合った色を選べなかった。かなりナミの心の中は落ち着かない様子であることが推察される。

コウは、「今の気分なあ・・」と自問自答するような様子で、赤のクレヨンを取り出し、塗りだした。ナミの落ち込んだ様子につられて、コウも落ち込んでいる様子で、だから「先生、一緒にぬって」と、筆者に声をかけてきたのであろう。筆者と一緒に塗っていると少し元気が出てきたのか、2色目は自分で選び、また一人で塗り始めた。

マサは、4色とも自分の好きな色を塗ったのだが、塗りムラができて白いところ（塗り残し）がかなり目立ったので、「もう一度しっかり塗ろうよ」と誘ってみた。しかし、「うわーっっ！！」と拒否する大声を出し、クレヨンの塗色を終えてしまった。色を選ぶことはできても、気分がのらなかったので、色を塗るのに必要な力が十分に出せなかったのであろう。ところが、後日、同じ絵にもう一度しっかり塗色し、色絵を完成させたのである。

ナミは、2色塗ったところで、「もうこれで終わる。もうやりたくない」と言って、クレヨンを片づけてしまった。色を選んで、塗ることに向かういわばエネルギーが十分なかったからだと考えられる。3時間目からのナミの様子を見れば、2色で精一杯だったのであろう。一方、コウは1色目を筆者と塗ることでエネルギーを補給することができ、2色目以降の作業に臨むことができた。

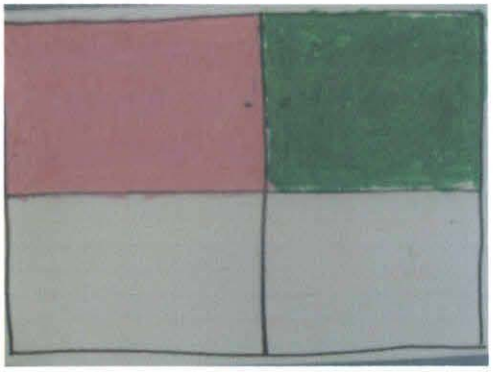


図3－13 ナミの4色法（2色だけ塗ることができた）

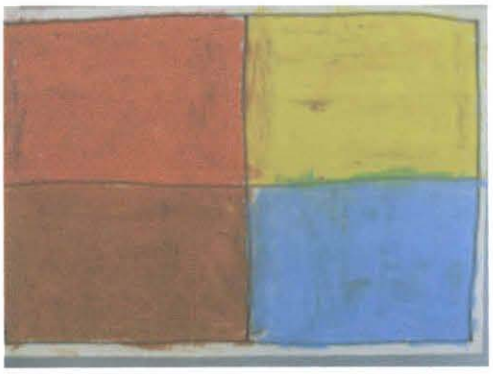


図3－14 コウの4色法

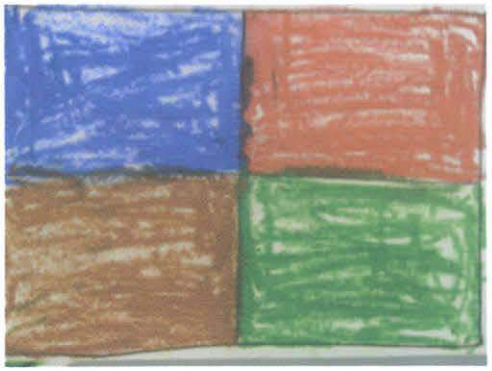


図 3－15 マサの 4 色法（塗り直す前の色絵）

（3）6 色法

6 色法は、1 年生と特別支援学級で試行した。

《B 小学校 1 年生》

この子どもたちは、第 3 章冒頭の試行一覧表にもあるとおり「3 色法」、「4 色法」を経験したうえで「6 色法」の試行となった。

前回の 4 色法の色絵をみせたあと、「2 年生は 9 色塗ったよ。みんなももうちょっとたくさん塗る？」と筆者が問いかけると、「5 色ぬろ！」「6 色ぬろ！」「9 色やってみよ！」とあちらこちらから声が上がる。「きょうはもう少し、お兄さん・お姉さんになって、6 色塗ろうと思うんだけど・・」というと、「やった！塗ろう、塗ろう！」ととても積極的に塗ろうという気持ちが伝わってくる。色ムラがないようにという指示も、白色は使わないという指示も自分たちで確認しながらクレヨンを用意していた。前回、4 色法でも「虹色」や混色、そしてひとつの部屋を 2 つ（あるいは 3 つ以上）に分け、自分の好きな色を塗っている子どももいたが、今回の「6 色法」でもそれぞれの工夫が見られる色絵ができた。「色を塗る」ということに対して自由に考えられるようになってきているようである。色をたくさん塗るだけでなく、装飾物を描き入れている子どももいる。一人がすると、「自分もやってみたいな」と思うようで、自由にできるという雰囲気がクラス全体に伝わっていく。前回と同じように「6 色では足りやん。（足りない）だから、7 色にしたよ。」と塗色後に教えてくれた子どももいる。4 色を塗っているときよりも、確実に「色を塗ること」を楽しみ、元気になっていく様子が筆者にも伝わってくる時間であった。「3 色法」「4 色法」のときには、色を混ぜることや重ねることを楽しんでいた子どもたちが、「クレヨンは色混

ぜると汚くなるん。」「重ねるのがきれいかなと思ったけど、重ねやん（重ねない）ほうがきれいや。」と、自ら学習したのである。そして、色を混ぜたり重ねたりしている友だちに「クレヨンは混ぜやん（混ぜない）ほうがきれいに見えるよ。」と教えてあげている。誰かに教えてもらうより、自分で見つけること確実に子どもたちの力になっていく子どももいるし、友だちにいわれて、自分でもそのことを実感して、自分の力にしていていることもいる。実際に、この後の「9 色法」の試行では、色を重ねたり混ぜたりしている子どもは減ってきている。

全員が塗り終わった後、黒板に全員の色絵を図 3－12 のようにテープでとめて、黒板に並べた。すると、子どもたちは、「きれいやなあ」「なんか色の展覧会みたいや」「楽しい気分になってくる」「今度のときは、水玉模様、塗ってみよう」と、全員の並べた絵を見た感想や塗色後の自分の気持ちを述べ合っている。自分たちで、勝手にシェアリングを始めたのである。普通は、筆者から「感想を言ってみましょう」という教示があるわけだが、子どもたちは感想を言わずにはいられないといった表情であった。そんな子どもたちの傍らで、筆者もとても気持ちのよくなる穏やかな雰囲気であった。「色絵四法」を試行してもらうことで、筆者が常に心がけてきたことは「きれいだね」「うまく塗れたね」という肯定的なメッセージを子どもたちに送ることであった。このような筆者の姿勢が子どもたちに伝わったのか、「色絵四法」の試行を始めたころは、お互いに相手をけなすような言動をしていた子どもも、次第に「○○ちゃんの（色絵）、きれい！」「一生懸命塗ると、△△ちゃんみたいにきれいに塗れるんだね」などとお互いに肯定的なメッセージを送り、コミュニケーションをとっている。普段の生活の中では攻撃的なコミュニケーションになりがちな子どももいるが、お互いに肯定的なメッセージを送ることで、うまく心を通い合わせるコミュニケーションができているように感じられた。

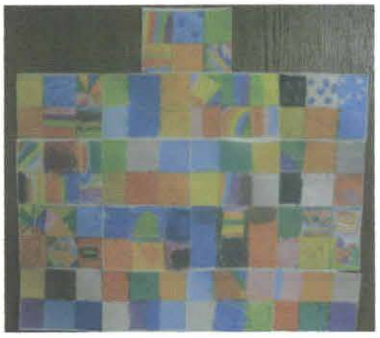


図 3－16　1 年 6 色法

この穏やかな雰囲気が、その後の学校生活においても続いているのである。１年生の担任の教師は、「（色を塗った後）とっても子どもたちが落ち着いて、集中して学習するようになったのでびっくりしました。なにか、魔法でもかかったのかと思うほどでした。」と、筆者に感想を述べた。

図3－17 様々な模様の入った6色法

図3－18 6色法の枠の中での“7色法”？

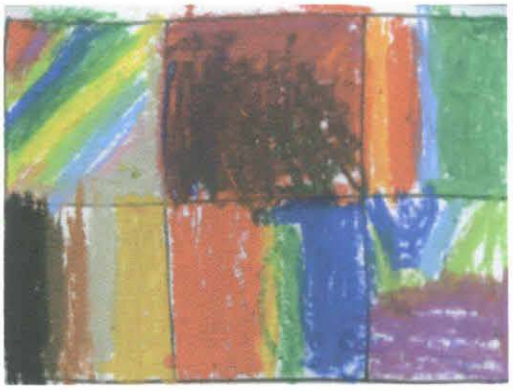


図3－19 リュウの虹色いっぱい「6色法」

《特別支援学級》

子どもたちに、画用紙（A4判の半分の大きさ・148㎜×210㎜）を配って、6つの色を塗ることを筆者が伝えると、「きょうは6色か」「6つやったら、（9色よりも）簡単にぬれるよ」と言いながら、早速クレヨンの箱を覗き込んでいた。子どもたちは自分で枠を描き、6つの部屋を作った。6つの部屋ができたことを確認して、子どもたちは、6つの部屋を6色のクレヨンで塗り始めた。

コウは、「あしたは地震がくるっている予言があるんやろ？ぼく（地震が）怖いからいやや！！」と不安そうである。（テレビで、中国の四川大地震や9.11の同時多発テロを予言したという人が、9月13日に日本に大地震が来ると予言したらしい。そのために、この日は子どもたちの間で、地震が来る！と大騒ぎになっていたのである）「先生はこの話、信じる？」と筆者に聞いてきたので、「そんなの信じてないよ。あしたはどんな楽しいことがあるかな？どんなおいしいものが食べられるかなって考えていたほうが幸せだと思わない？」というと、コウは「でも地震はいややな。一日ずっと机の下に隠れていようかな」

と話をしながら塗っていた。

コウは、「1色目の茶色は『地震の色』、2色目は『地震の後の火事の色』、3色目は『家が壊れた色』」と上の3色に意味をつけた。下の3色には、左から「『(火事を) 水で消す』『暗闇』(黒)、最後は『平和な世界』」と意味をこめて、話してくれた。色を塗って、最後には「平和な世界」を作り上げていったのである。「地震が来るかも」というコウの不安が、色を塗った後にはずいぶん和らいだようであった。

ナミは、自分で塗った色の説明をしているうちに、1年前の5年生のときの話になっていった。自分から5年生のときの話をするのは、特別支援学級のなかでも初めてだったようで、特別支援学級の担任教師も「初めて聞いた。今までは (5年生のときのことを) 聞いても絶対話そうとしなかったのに」とびっくりしていた。図3-20のナミの6色法の右の枠でかこんだのが、ナミの話した内容である。

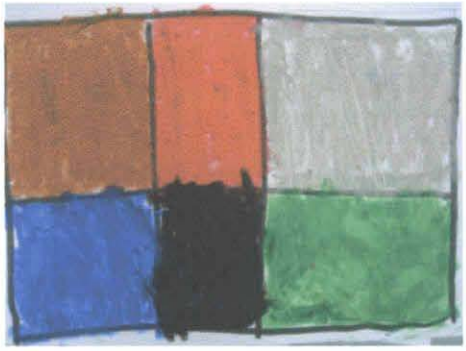


図3−20 コウの「6色法」地震の話

1色目の茶色は「地震の色」2色目の赤は「地震の後の火事の色」3色目の灰色は「家が壊れた色」と上の3色に意味をつけた。下の3色には「(火事を)水で消す」(水色)、「暗闇」(黒)、最後は「平和な世界」(緑)と意味をつけた。色を塗るうちに「平和な世界」を作り上げていった。「地震が来るかも」という不安が、色を塗った後にはだいぶ和らだようであった。

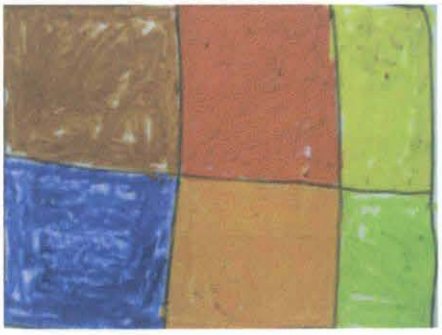


図3−21 ナミの6色法

コウの地震の話に触発されたか、左上から茶色を塗った。そのあとは、ナミ自身の好きな色を選んでいるように思われる。「赤色は炎の色です」「黄色は花の色です」「青は学校に来たくないです」と説明した後、「5 年生のときは、学校に来れんかった(来られなかった)。色々あったから。先生は知らんやろうけど、お母さんが(学校へ)行くなって言って、(私は学校に)来れんかった」と5年生のときの話をしている。青色を塗ったことがきっかけになったようである。

塗り上がった自分の作品を見て、ナミは「これって前よりもきれいに塗れてる！」「すごくきれいに見える！」ととても嬉しそうであった。3色法および4色法を試行したときは、自分の選んだ色から想像して何かに例えたり、そこから今までの自分のことを話したりすることはなかった。今回は、自分の選んだ色が何を意味しているのか、何を表しているのかをしっかり話すことができた。

「自分で好きな色のクレヨンを選んで、色を塗る」だけであるが、その過程の中に子どもたちの物語がたくさんたくさん詰まっていることにあらためて気づかされた。

（4）9色法

B小学校の1年生から6年生までの全学年と、保育園の年長組と年中組で試行した。

《A保育園年長組》

年長組は、乳児（0、1、2歳）から保育園に通っている子どもが多く、クレヨンや油性ペン、水性ペンなど、乳児組のときから使っている子どもが多い。年長組になってからは、係活動や小さい組の友だちの面倒をみる機会も多くなっている。15名のクラスであるが、当日1名欠席、1名は「九色法」の試行が終わってから遅刻して登園してきたため、参加できず、この2名を除いて13名での試行となった。この年長組には、筆者の子どももいる。

保育園の中で、年長組以外の子どもたちは、登園してきてから自分のかばんをロッカーにしまったり、水泳の準備で着替えていたり、ざわざわしている。落ち着いて作業に取り組むという感じではなかったが、年長組の子どもたちは保育室に入ってきたときから、「今から何が始まるのだろう？」「どんな絵を描くのかな？」というわくわくした気持ちをその表情から読み取ることができた。

開始時は、九色法のやり方を知っている筆者の子どもが先生の役目になって「これは先生たちの描いた（9色法の）絵です。今から紙を配ります」と、いつも保育園の先生が子どもたちの前にたって説明するときのように、9色法の説明を始めた。それを聞いて「本当にそんなことすんの（するの）？」という声もあったが、筆者の子どもに代わって、初めから筆者が丁寧に説明し直した。先生方が描いた（9色法の）絵を見せると、それらの絵がどれもとてもきれいなのに心を動かされたような様子を見せた。

このクラスでは、枠を描くところから始めた。「自分の好きな色で枠を描いてみましょ

う」と実際に子どもたちの前でやって見せながら、進めた。できた9つの部屋の大きさにかなりの違いがある。大きな部屋もあれば、小さな部屋もある。どんな大きさの部屋になってもあまり気にしていない様子であった。

全員が 9 つの部屋を作り終えたことを確認してから、「それでは、自分の好きな色を好きなところから塗りましょう。でも白いクレヨンは使わないでね。それから白いところがないようにしっかり塗ってね」と筆者が教示した。保育園の先生方の描いた「9 色法」の色絵を実際に見ているので、塗るときには大体の要領をつかんでいるようにみえた。少し遅れて（4～5分）保育園にきた2人の子どもは、開始は遅かったが、友達のやっているのを見て、見よう見まねで活動のやり方を理解し、他の子どもたちが塗り終わる頃に、遅れてきた2人も他の友だちに追いついて塗り終わっていた。

どの子どもも塗っているときの言葉は少なかった。塗ることに集中していたということも考えられるが、色に心を動かされていて言葉を出す必要がなかったと考えられるであろう。

ヨウスケは、初めいすに5分ほど座って塗っていたが、次第に立ち上がり机に片足をゆっくりとのせて、のせた足を立てひざにし、塗り始めた。自分のやりたくないときや気分が乗らないときには、なかなか集中して取り組めないことが多いのだが、この日はとても楽しそうな表情をしていた。緑を塗っているときに筆者が「好きな色は緑？」と声をかけると、「ううん、全部の色が好き！」とうれしそうに答えてくれた。

「いすから立ってしてんねん（しているんだよ）。」「本気になってるから。」「ぼく、本気になると、いすにすわってられへんねん（すわってられないよ）。」とヨウスケは担任の先生に話しながら、塗っている。塗り終えると、筆者に「ぼく、できた！」と、うれしそうに筆者に教えてくれた。それから「今日はこれやらなくても元気やねん。カブトムシもらいにいくねん。やで元気なん（きょうはこの色塗りをしなくても元気だよ。カブトムシもらいにいくから、元気だよ）。」と、家に帰ってから楽しみにしていることがあることを教えてくれた。

（できた絵を見て）筆者が「どっち向き？」と色絵の上下を確認すると「うーん・・・。どっちのほうが好きかなって」と、迷った後、「どっちも好き！」と答えた。「どっちにも（上にも下にも）名前を書いておいたらいいやん」とまわりから声が上がった。そして「どっちにも名前書いておいて」とうれしそうな表情で言った。その後、内緒の声でもう一度「どっちむきでもいいよ」と筆者の耳元で答えてくれた。

どちらかと言うと、自分が気に入らないと、集団行動がとりにくいヨウスケである。また、ひとつのことに夢中になりすぎて、まわりが見えなくなってしまうこともある。しかし、色塗りをしている最中は、色を塗ることに集中しつつも、まわりの友だちのつぶやきに反応して、うれしそうな表情を見せたり、友だちの持っているクレヨンが小さくなって塗りづらそうにしているのをみて「ぼくの、貸したろか（貸してあげようか）？」と声をかけたりしていた。

図 3－22 ヨウスケの 9 色法

リョウは、途中まで自分の絵に集中していたが、ヨウスケが自分よりたくさんの部屋を塗っているのを見て「ヨウスケくん、はやいな」とヨウスケに伝える。友だちからほめてもらうような言葉かけはうれしい。ヨウスケは、無言でうれしそうな顔をしている。その顔を見て、リョウもうれしそうである。「好きな色が塗れてうれしいね」と、確認しているような笑顔であった。

リョウは最後までクレヨンを持っていた。自分では最後の色を決められず、すでに塗り終えたモモコに「モモちゃん、最後の色決めて」と頼んでいる。モモコは「えー、うちが決めんの（私が決めるの）？」と言っているが、目はすでにクレヨンを見ている。「そんなら・・オレンジ！」と、モモコは決めたのだが、リョウはすでに黄緑を手にしている。「黄緑にするわ」と言って、黄緑で塗った。モモコは「なんや、自分で決めたんや」といいつつも、いやな顔はしていないように感じた。形としては、相手に決めてと頼んだが、しかしその間に自分で決めたようであった。友だちが近くにいて支えになって、最後の色を決めることができたように思われる。

図 3－23 リョウの 9 色法

タイチは、9色全部塗り終えてから色絵を筆者に見せに来た。筆者は、「タイチくんはどの色が一番好き？」と聞くと、「赤が好き」と答えた。しかし9色の中で赤に塗られた部屋はなかった。「どこにある？」ともう一度筆者はタイチに聞いた。すると「ここ」と言って、枠を指差した。枠を自分の一番好きな色で描くことで満足したのか、9 色の中には現れなかった。枠を自分の一番好きな色で描くと、一番好きな色に守られている、一番大好きな人に守られているという感覚になり、安心して色を塗ることができていたように思われる。

《A 保育園年中組》

年長組に続いて、年中組で行った。すでに年中組の子どもたちの中には、塗り終わった年長組から情報を得ていて、「クレヨンで色塗りするんやろ？」と言いながら、筆者のいる保育室に入ってきた子どももいた。年中組は、B5判（182 ㎜×257）の画用紙を使った。枠は筆者が予め描いておいた。

ココロとアイは、普段から一緒に遊んでいる。家が近いこともあってか、保育園でも一緒に過ごすことが多いようである。どちらかというと、アイが主導権を握って遊んでいることが多いようで、保育室に入ってくると、すぐにアイがココロに「ここにすわろ！」と言って、同じ机の隣どうしの席に座った。

アイとココロは、塗る部屋の順番ばかりでなく、内容も同じようなものを描いている。アイが「虹色」を描くと、ココロも「虹色」を描き、ココロがひとつの部屋を細かく分けて塗ると、アイも同じようにしている。しかし、全く同じ色を使っているわけではない。友だちのやり方、塗り方を真似していても、必ずそこに自分のオリジナルなもの（自分らしさ）が入ってくる。筆者はこの事態を「色絵の独自化」ととらえた。

アイとココロが同じような順番で塗っているすぐ横では、「私はまねっこしやん（真似しない）もん！」と、自分の好きな色を塗っているヒサがいた。そうはいっても、ココロやアイが塗っているのは気になるらしく、何度もココロやアイの絵を覗き込んでいたが、完成した色絵を見ると、ココロやアイとは全く違う色絵が完成していた。

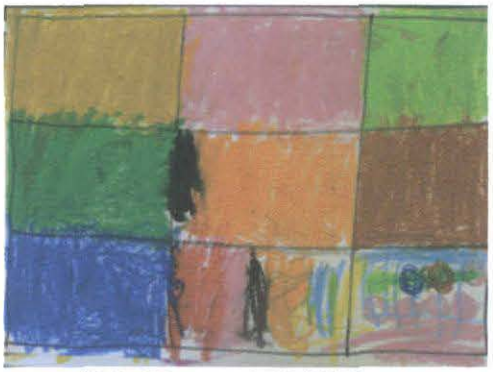


図 3－24　ココロの 9 色法

茶色から塗り始めたが、「一番好きな色はピンク」

図 3－25　アイの 9 色法

「虹色が一番気に入っている！」

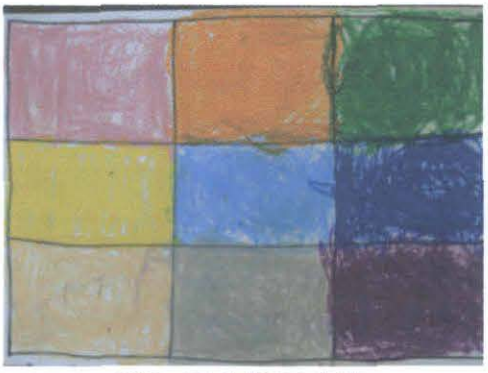


図 3－26 ヒサの 9 色法

「私はまねっこしやんもん」

《B 小学校 1 年生》

1 年生は、第 3 章冒頭の表で確認できるように、それまでの試行で「3 色法」、「4 色法」、「6 色法」と、だんだん塗る部屋の数が増えてきている。3 色法のときは、「色」を十分に使えなかった子どもも、4 色法、6 色法に進むにつれて、「色」を使うことができるようになっていった。また、自分たちで考えた「虹色」の部屋や、「カラフルな部屋」などの工夫も多くの子どもたちに見られるようになってきた。「今度は虹色をもっと派手にする」「次は赤色から塗ろうかな」などと言っているのを聞くと、今回もいろいろな工夫をしたり、あるいは新しいことに段階をあげて挑戦しようとしたりしようとする意気込みがよくわかる。9 色法をする前日、すでに子どもの方から筆者に「先生、明日色塗りしよな。明日は、虹色塗りたいから」とか「色塗りしてな。そんで、絵本も読んでな（色塗りをした後、必

ず絵本の読み聞かせをしていた)。」と声をかけてくれる子どもたちもいる。

当日、筆者が教室に入るか入らないかのうちに、「色ぬろ！！」と子どもたちの方から筆者に声がかかった。この日は「クレヨンの用意をしてください」という教示をする前に、自分たちで「クレヨン用意して！はやく箱あけて！」と声をかけ合い、クレヨンを机の上に用意していた。

筆者「きょうは一気に9色です。」
子どもたち「えー、9色？ほんとに？」
筆者「大きな画用紙（A4判・210㎜×256㎜）を配ります。」
子どもたち「わっ、おっきっ！」「うれしい！」

画用紙が大きくなったことが、子どもたちはとてもうれしいようである。以前に2年生や3年生の9色法の色絵を見せたこともあるので、1年生の子どもたちも『お兄ちゃん』『お姉ちゃん』になっていく実感がわいてきたとも思われる。

今回も自分で枠を描き、9つの部屋を作るところから始めた。フェルトペンを持っていない友だちには「貸したろ」「描けたら貸したろな（自分が描いてしまったら貸してあげるよ)」とやさしい声も聞かれる。3，4，6色法の「色塗り」の経験で、「とてもスッキリする」「気持ちが穏やかになる」という経験をしているからか、始まりもとても穏やかな雰囲気で始まった。

以下に実際の何人かの子どもたちの塗色中の様子を記す。

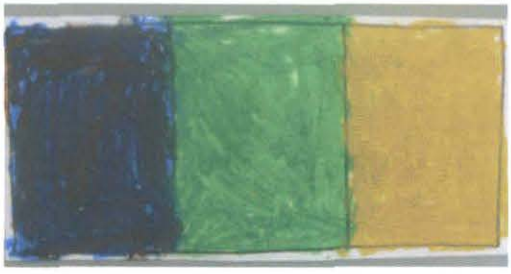


図3−27 ショウタの3色法

ショウタは3色法の試行のとき、「元気な色だけど、ちょっと暗いほうがいい」と、図3−26のような3色を塗った。緊張しているようで、顔も少し下向き加減で、表情も乏しかった。しかし、4色、6色と塗る部屋の数が増えると、とても明るい表情を見せた。

1色法（第4章で詳しく述べる）のとき欠席していたショウタは、3色法が初めての色塗りであった。筆者に対して「(担任ではないので) この先生は、信頼できる先生かどうか」わからない状態から始めた。ショウタは9色法で色塗りをしている時、初めのうちは筆者が声をかけても「別に・・」と答えるにとどまっていたが、次第に「先生、あのな、きょうな、お兄ちゃんな・・」と色を塗りながら筆者に話をするようになった。3色法や4色

法のときは、黒色、茶色、青色が中心で、他の色を使おうとしなかったのだが、9 色になって明るい赤色や橙色も使えるようになってきた。先ほどまでの無表情が、一転して豊かな表情に変わっていった。そして、完成したときの「色（を）いっぱい使った。よかったよ。」と、筆者のところに色絵を持ってきたショウタの顔はとても嬉しい顔をしていた。何度か筆者と一緒に色絵を描いていくうちに、自分の気持ちを受け入れてもらえるという気持ちになったのであろう。その後、学校の中で筆者と会うと、「また、色塗ろ！めんどくさいけど・・」と、次に色塗りをするのを楽しみにしている様子が伝わってきた。

図 3－28 ショウタの 9 色法

図 3－29 アサヒの 9 色法

もえる心、あつい心、心があつくなるきもち

次に述べるアサヒは、朝から友だちと口げんかをし、最後には手や足が出るほどの大けんかをしていた。しかし、アサヒは色を塗るのはとても楽しみにしていたようで、画用紙を配られるとすぐに、クレヨンの箱を覗き込んだ。そして、「好きな色いっぱい塗りたいから、（部屋の）大きさ変える！」と言って、9 つの部屋を作るときに、好きな色を塗る（であろう）部屋を大きくした（図 3-28 の黒色で塗ってある部屋）。

図 3－28 の右の灰色の丸に黒い線が描いてあるのは、アサヒの話によると「グーの形（こぶし）」だそうである。だんだん（色塗りが始まるまでけんかをしていた相手を）殴りたい気持ちになったので、「グーの形（こぶし）を描いた」のだそうだ。そして、「燃える気持ち」になってきたので、そのこぶしを炎で包んだそうである。アサヒは、「みんなをたおしたくなってきたーっ！」と叫んでいたが、まわりの友だちはアサヒのこの言葉には反応しなかった。最後の部屋を塗るころになると、それまでに塗った部屋や描いた装飾物を使い、お話を作っている。「もえる気持ちになって、グー（こぶしのこと）も燃えてきたけど、水色で消したん。水色で消したら、お話は終わり！」と、アサヒは自分で描いた色絵の中でお話を終わらせた。塗った後は「元気になっているよ！」とうれしそうである。色絵の上で、ものすごいけんかをして、色絵の中で収めたのである。まわりから「やめようね」と

言われるのではなく、殴りたい気持ちや相手をやっつけたい気持ちを自分で収められるということからも、教育的な効果があるということは明らかなことであろう。

担任の先生によると、最近アサヒは落ち着かない様子であったが、色を塗ってからだいぶ落ち着いたように感じるとのことであった。学習への取り組みがよくなり、自分の意見を言うだけでなく、友だちの意見もよく聞くことができるようになってきたという。「みんなを倒したくなる」アサヒの気持ちは、色絵で自分の気持ちを表現することによって、次第に消化されていったものと思われる。

《B 小学校 2 年生》

筆者は 2 年生の授業を受け持っていない。掃除のときや全校での行事のときなどに顔を合わせる程度である。9 色法を始める前に、顔と名前を一致させるため、子どもたちに自己紹介してもらった。

ユイナが自己紹介しようといすから立ち上がったとき、まわりの子どもたちから「その子、しゃべらんよ」と筆者に声がかかった。全く話さないわけでなく、初めての場面や何を言っていいのかわからなくなると、話せなくなるようである。「その子、しゃべらんよ」の声に、ユイナは何も言わずに座ってしまった。しかし、自己紹介が終わってから行う九色法は、友だちの色絵の美しさを通して、友だちのよいところを見つけられる方法であることから、ユイナのよいところをまわりの子どもたちにも見つけられるだろうと思い、筆者は名前の確認をするだけにした。

2 年生では、「ムラなく塗る」ということがわかりにくい子どもたちがいて、白く塗り残している子どもが何人かいた。「クレヨンを持つ手に力を入れて、白いところがないように塗ろう」と筆者が教示すると、子どもたちは力を入れて、クレヨンをしっかり動かしていた。その様子を「ぐるぐる」「ぎゅるぎゅる」「ぎりぎり」など、子どもたち自身が擬態語で表現した。擬態語は他の子どもたちの中にすっと入っていったようで、(これは、絵本の読み聞かせをしたときに、筆者が実感したことでもある。)「ぐるぐる」「ぎゅるぎゅる」などと言いながら、クレヨンを動かす子どもたちは、とても楽しそうであった。

ある子どもは、この色絵を「絵が虹色になって、とてもきれいです」と書いている。1 年生や保育園の子どもたちのように、ひとつの部屋に虹色を描いているわけではない。2 年生は、色絵全体を見て、「虹色になった」と表現しているのである。子どもたちは、同じ「虹色」という言葉で表現しているが、子どもたちの心に浮かんでいる「虹」は、子ども

によって随分違いがあることがわかる。

全員が塗り終わって、右の図3－29のように黒板に色絵をテープでとめて並べて貼った。すると、教室の後ろのほうから、前の黒板をながめ、「めっちゃきれい！」「近くではわからんかった！」と、鮮やかできれいな色絵を見て驚きの声を何度も上げていた。「(色絵が)黒板いっぱいになったらもっときれいやろな」と9色法の色絵で黒板をいっぱいにしてみたいという気持ちも見られた。「しゃべらない」ユイナも、塗り終わってから、筆者のところに急いでやって来て、「楽しかった。みんなの（色絵を）並べたら、きれいだね。」と、話しかけてくれた！普段の学校生活においてほとんど関わりのない筆者が自分の教室に来て、ユイナは自分の教室にいながら、かなり緊張してしまったようである。

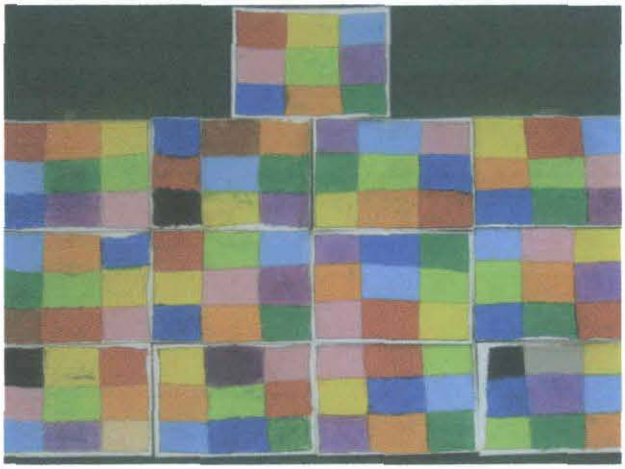


図3－30 2年生の色絵「みんなきれい！」

ところが、今述べたように色絵を描いて、ユイナの緊張がほぐれるばかりか、元気になって、「しゃべらない」ユイナが話すことができたのである。緊張しやすい子どもたちの緊張をほぐして、どんどん元気にもなる方法だと思われる。

年齢の小さい子どもたちについては、まわりの友達の真似からはじまることが多いのが実情である。保育園での試行でも確認されたことであるが、この2年生も“真似”からはじまる子どもがいた。自分の意志でクレヨンの色を選ぶことができればそれに越したことはないが、できない子どもたちにとっては「まねてもよい。でも真似をする中で自分らしさを加えて塗って欲しい」(参考にしてもよい) ということを指導者が言うことも必要であろう。初めは友だちの真似をしていた子どもたちでも、2色目、3色目と塗り進んでいくと、次第に自分の好むクレヨンを選ぶことができるようになっていくのが確実に観察されたのである。

《B小学校3年生》

3年生の試行は、図工の時間であった。全員で9人のクラスであるが、この日は男子1人が欠席していて、8名での試行であった。3年生では、9つの部屋全部を塗り終わってから、「なんかしらんけど、ほっとした感じがする」と柔らかな表情をしている子どもや「こ

んな色塗っている！」と塗っているときに気がつかなかった自分の色絵の美しさに気づくことができた子どもがいた。普段の学校生活の中でも、自分の気持ちを表現することが苦手な3年生の子どもたちが、素直に自分の気持ちを表現できている。かつ、自分の塗った色で自分の気持ちを確認している。ということは、この9色法は、癒しにもなっていることを物語っている。また、自分が好きな色を選んでから、友だちに「○○ちゃんもこの色塗る（“同じ色塗ろうよ”のサインを送っている）？」と確認する子どももいた。塗り進んでいくうちにそれもなくなり、一人ひとりが黙々と塗っていた。

筆者は、「真ん中（中心）」を意識した言葉かけはしていなかったが、「この真ん中には茶色がいい」と言って、塗る順番も考えながら、9つの配色を考えている子どもがいた。無意識の行動であろうが、真ん中に「この色がいい」と持ってくる子どもは初めてであった。筆者は子どもたちの美的感覚の鋭さに驚いてしまった。

この学年は、塗色後の感想を述べてもらった。「ほっとした」「なんかしらんけど、楽しい感じがする」「自分って、こんな色塗ってたんや。びっくりした」「9色も選べないと思っていたけど、選べるもんやな」「はじめはこの色って思っていたけど、塗ってたらぜんぜんちがうやん（違う感じがする）」と、感想を述べている。

図工の時間を担当してきて筆者が感じたことであるが、この3年生の子どもたちは、自分の作った作品に対して“上手・下手”を気にして、自信が持てないことが多い。しかしこの日はどの子どもも、生き生きとして自信にあふれていた。塗りあがったものをながめているうちに、「自分もやれば、こんなに素敵なものができるんだ」という自信が増していったように感じられた。これは、9色法が自尊感情の育成にもつながる方法であることをはっきりと物語っているのではないだろうか。

また、友だちの色絵を見て、「この青、いいねえ！」「この塗り方おもしろい！」などとお互いの色絵を見て感想を話し合っていた。自分の色絵に対する友だちの感想を聞いて、友だちとの信頼関係をより深めた時間になっていた。友だちの色絵のいいところを見つけ、それを伝え合うことで、友だちと心を通わせるコミュニケーションをとることができているのである。

《小学校4年生》

4年生の試行は、道徳の時間に行った。活発な子どもが多く、どんなことでも一生懸命取り組む子どもが多い。試行したのはちょうど運動会が終わってから間もなくであった。

運動会の表現種目の練習では、もっと踊るのがうまくなりたいと、クラスで自主的に練習したりお互いに踊っているのを見合ったりして、「いい演技をしよう」とクラス全体で高まっていこうという意欲が見られた。男女の仲もよく、いっしょに遊ぶ姿がよく見られる。しかし、友だち付き合いの中で、本来の自分を出せずに机に落書きをしたり、友だちに自分の思っていることを言えなくてすねたりするということもある。筆者は、この4年生の書写の時間を週に1時間担当している。なかには、委員会活動や休み時間などによく話をしてくれる子どもたちもいる。

筆者は、「今から、気持ちがすっきりする方法をやってみます。」と言って始めた。子どもたちは、「そんなん、どうやって（すっきりするなんてどうやってやるの）？」「本当にすっきりするん（するの）？」などと口々に言っていた。学年の異なる子どもたちが描いた色絵を見せると「きれい！」「こんなんで（このような絵で）スッキリする？」と感想を言っていたが、その顔は期待に満ちていた。子どもたちはA4判の画用紙を配られると、筆者の見本を見ながら、枠を描き、9つの部屋を作った。ナツキは9つの部屋の大きさを均等に描けなかったので、「こんなに大きさ違うようになった！」とみんなに見せていた。「それでいいよ。大丈夫！」と筆者はナツキに声をかけた。すると、ナツキはほっとした表情を見せて、次の作業に移った。

リュウヤは、初めの枠がうまく描けなかったが、画用紙を折ってまっすぐな線を描こうとしたり、ゆがんだ線を太くしたりして、なんとか折り合いをつけようとした。しかし、それもうまくできなかった。まわりの友だちが色を塗りだしてからも、リュウヤは気持ちの切り替えをすることはできなかった。筆者が画用紙を代えることを提案しても、リュウヤは「いい」と言って、自分が初めにもらった画用紙にこだわった。この9色法をする前に担任教師は、「リュウヤは、普段から『失敗してはいけない』と思って緊張しているので、その緊張を少しでも緩められたらいいのだが」と話していた。しかし、リュウヤは枠を描く段階で自分の思うようにできず、またその後の気持ちの切り替えがうまくできなかった。「上手に描きたい」という気持ちが大きすぎたようである。「上手・下手」の評価はないということをもっと明確にリュウヤに伝えるべきであったと、筆者は反省した。

塗っている最中は、日常生活の話（例えば昨日友だちとした野球の話）や色に関係する話などが飛び交っている。また、ほとんど口をきかないで、色を塗ることに集中していた子どももいた。

普段、緊張が強く、まわりとうまくコミュニケーションが取れなくて、孤立しがちなア

サキは鼻歌を歌いながら塗っていたのである！その声はまわりの友だちにも聞こえていて、「アサキちゃん、めっちゃ楽しそうに塗っている！私も楽しいけど・・」と、色塗りをみんなで楽しんでいる様子が伝わってきた。塗り終わってからは、「楽しかった！」「なんか元気になった！」「不思議や、気持ちがいい」などと言いながら、色絵を筆者に渡してくれた。9 つの部屋を均等に分けられるように区切り線を引けなかったナツキは、「(9 つの部屋の) 大きさ違っても、全然気にならんやん (気にならないよ)。」「きれいやろ。きれいやろ。大きさ違うけど、いいやろ。いいやろ？スッキリィ！わっはっはっ！」と大きな声で笑いながら、足早に運動場に遊びに行った。

塗色後に裏に書かれた感想を見ると、「カラフルになったので、とても気持ちよかった」「白いところ (色ムラ) なしにするとすごいです」と書かれていた。自分が思っていた以上にスッキリした気分を味わったので、子どもたちは塗色後、一様に「すごい！」と連発していた。カンナは、「好きな色から順々に塗っていったので、最後は9位の色でした。9位の色も1位の色も関係なく好きな色なので、あまり順位は関係ありませんでした。塗った前と塗った後を比べると紙が大変身したと思います！」と感想を書いている。「大変身」させたのは、もちろん子どもたちである。

《B 小学校 5 年生》

筆者はこのクラスの家庭科と図工の時間を担当してきた。図工の時間を使って試行した。

最初、クレヨンで 9 色塗ることを伝えると、「めんどう！」「やりたくなーい！」「手が汚れる！」と言っていた子どもたちだったが、決してやる気がないわけではなかった。やったことのないことを始めるには、大人でも尻込みしがちである。クレヨンを使うことにも抵抗があった。クレヨンを持っていない子どもがほとんどであった。「クレヨンなんて幼稚」と大きな声で言う子どももいた。しかし、久しぶりにクレヨンを持ち、1つめの部屋を塗って、「面白い」「楽しい」事が実感されると、夢中になってクレヨンを動かしていた。これは、クレヨンの持つ魅力のひとつでもあることは間違いないであろう。

このクラスでは、まわりの友だちがどんな色を選んでいるかかなり気になり (特に高学年はそうであるが)、自分が「この色」と選んだとしても、それでいいのか不安にもなるようである。はじめの教示のなかで「九色法には、正しい色や間違った色などはないこと」「どんな色を選んでもよい」ということを、しっかり理解させておくことが必要である。9色を選ぶ際に、自分でテーマを決めて色選びをしている子どもが多かった。例えば、「野

球のユニフォームの色にしよう」「サッカーのチームカラーがいいな」など、自分でテーマを決めていた。しかし、実際塗り始めて4色目、5色目になってくると、「もうどうでもいいや」「自分の好きな色にしよ」という声が聞かれた。塗りあがった自分の色絵を見て、「野球の色って始めたけれど、どうでもよくなってきれいなのができた！」と感想を述べている子どももいた。

《B小学校6年生》

6年生の子どもたちは、3年生のときに筆者が担任をした子どもたちである。このクラスの16名以外に、特別支援学級の子どもたちも同じ6年生にいる。この試行では、特別支援学級の子どもたち3人も含めて、19名で行った。

作業のはじめ、クレヨンで色を塗ることを伝えると、「色鉛筆で描かせて」と言っていた子どもたちがいた。クレヨンを持っていない子どもも多い。クレヨンを持っているのは3分の1程度であった。クレヨンを目の前にしてもまだ、クレヨンを使うことをためらっていた。それは、高学年になると、クレヨンを使う機会は圧倒的に少なくなり、子どもたちは「クレヨンなんか幼稚だ」「クレヨンよりも絵の具」という「もうクレヨンを使う年齢にはない」という意識を持っているからだと思われる。しかし、実際使ってみると、手がかなり汚れてきてもそれを気にせずに、一生懸命塗っていた。

クレヨンを使って色を塗っている子どもたちが「久しぶりにクレヨン使って、小さかったときのことを思い出した」と言ってきた。話を聞いてみると「クレヨンでよく絵を描いた。なんにでも描いていた。描いたらあかんとこ（いけないところ）に描いてよく怒られたよなあ」と、小さいころの話をした。それを聞いていた子どもは、「小さい時って、色を塗った覚えがあまりない。好きな色っていうのもあまり考えたことがない。」「小さい時にやったら、めっちゃ楽しかったやろな（だろうな）」と、自分があまり絵を描いていなかったことを思い出したようである。小さい時のことを思い出すことで、自分への振り返りになったり、自分の気がつかなかったかつての「幼い自分」に気がついたりできる。「小さい時にやったら楽しかっただろう」と言っていた子どもが多かったが、6年生になった今でも「楽しい」ことが実感できたような感想が聞かれた。「丁寧に塗ってたら、夢中になって。夢中になってるのに、気持ちよかった！」と塗色後の感想を述べている。その後、図工の時間に、絵を描いていると「クレヨンで塗ってもいいですか？」と尋ねてくる子どもがいた。クレヨンを使う心地よさを忘れられないようでもあった。

特別支援学級のコウとナミとマサは、2度目の9色法であった。コウは、「前に選んだ色覚えてない！」と頭を抱えていたが、「同じ色でなくてもいいよ。それが今のコウさんの気持ちだから」と声をかけた。同じ自分が選んでいるにも関わらず、選ぶ色が同じでないこと、同じように塗っているようにみえるが、塗り方も少しずつ違ってくることなど、特別支援学級の教室で塗った色絵と比べてみて、発見することも多くあったようである。

自分が思っている以上にきれいに塗ることができていることを発見して、「自分もやればできるんだ」という自己肯定感を育んだり、まわりの友だちの色絵の美しさに気づいてお互いに認め合うことでより深い信頼関係を構築することができたりする。その結果、クラス全体が温かい雰囲気になっていくのであろう。

こうしてみると、どの学年でも、9つのコマをすべて違う色で塗ることによって、どの色もよい色、それぞれの色がみんないい、そして集まってくるともっといいという、集団で色を塗るよさを気づかせてくれる。そして、友達の色絵と自分の色絵を比べること、つまり友だちの色と自分の色を比べてみて、自分のよさを発見し、同時に友だちのよさも発見できる。同じ色を選んでも、「あ、同じだ」と感じることもあるし、違う色のように感じることもある。しかし、同じ「色の仲間」なのである。色絵において「違う色」「でも同じ色の仲間」ということが、自分たちに置き換えて「違っても友だち」「でも同じ仲間同士である」という気持ちを育てることにつながっていくのではないだろうか。

自分の身の回りのものにはすべて色がついている。しかし、どんな色か、何色なのか、色を並べるとどんな感じの絵が生まれるか、色を混ぜるとどんな色が生まれるのかなど、意識して、生活していることはほとんどない。自分の好きな色を選ぶということにしても、塗ってしまってから「(自分は知らず知らずのうちに) こんな色を選んでいた！」という新たな発見もできる。選ぶときには意識していなかったものが、塗ることによって意識化されたのだと考えられる。自分を確認する作業のきっかけにもなる。

9つの部屋を作ったところに、ただ色を塗るだけなので、その絵の中には「うまい・うまくない」「上手・下手」という評価は入ってこない。それが、子どもたちに絶対の安心感をもたらすようである。はじめは絵を描いた後の評価を気にして、緊張したり自信がなさそうにしたりしていた子どもたちも、色絵が評価されるものではないと繰り返し伝える(一度伝えただけでは、子どもたちは“本当に評価されるものではない”とは理解しない) と、楽しそうにクレヨンを動かしている。ただ、ポジティブな声かけは常に必要であると考え

る。「この部屋、うまく塗っているね」「この色、きれいな色だね」「楽しそうに塗っているね」といった声をかけることによって、そのときの気持ちを表現してくれたり、選んだ色についての説明をしてくれたりすることもある。塗っている本人が「うまく描けない」「きれいに塗れない」「こんな色いやや！」とネガティブな自己評価をすることもある。そのときは子どもの考え方を「そんなことはないよ。キレイな色だよ。」「その塗り方でいいんだよ」「きれいにぬれているよ」など、ポジティブに考えられるように方向転換していくことも、もちろん指導者の大切な役割であろう。色絵を完成させた後の「自分もやればできる」という気持ちは、子どもたちに“達成感”をもたらし、”自尊感情“を育てることにもつながっているのではないだろうか。

（5）親子９色法

次に自分の子どもたちと色塗りをした筆者の体験を述べる。

１回目は、親子３人で同じ画用紙を使い、子どもと相談しながら色を決め、交代しながら９つの部屋を塗っていった。そのときは、保育園年長の子どもはすぐに「お母さん塗って！」とクレヨンを預けてきた。小学２年の子どもは、「自分で塗る」と言って、自分で塗り始めた部屋は、最後まで自分で塗った。自分が小学生の姉のようにうまく塗れないことがわかると、保育園児の子どもは「もういい。やらん（やらない）」と言って、見ているだけになった。

２回目も、親子で同じ画用紙を使った。このときは、ゲーム的な要素を取り入れ、「じゃんけんして、勝ったら好きなところに好きな色を塗れるようにしよう」と小学生の子どもが言ったので、「じゃんけんして、勝ったら好きなところに塗っていいよ。でも同じ色を選ばないようにね」とルールを決め、やった。年長児は、じゃんけんで負けて自分の好きな色を塗れなかったり他人に選ばれたりすると、すぐに「お母さん、(私も) 塗りたいのに・・」と親に助けを求めてきた。「同じ色を塗りたい」という気持ちが小学生の子どもも強くなってきたためか、途中から「同じ色を選んでもいいから、重ならないようにしよう（となり同士の部屋には塗らないようにしよう)」と小学生がルールの変更をした。そうすると、同じ色を選べる、そして、重ならないように工夫もできるというので、年長児も楽しく色を塗ることができた。９つの部屋を全部塗り終わった後で、「きれいに塗れたよね」というと、小学生は「(今度は) もっとうまく塗れる！」と言って、次に九色法をするのを楽しみにしている様子が伺えた。

筆者が保育園の先生方に九色法を試行しているときに（「色絵四法」を試行した保育園に筆者の子どもは通っている）、筆者の年長児の子どもが筆者や色を塗っている先生がいる保育室に入ってきて、「先生、あんな、どこから塗ってもいいねんで（いいんだよ）。そんでな、同じ色使ったらあかんねん（だめだよ）。そんでな、白も使ったらあかんねん（だめだよ）。そんでな、白いとこないようにきれいにぬんねん（ぬるんだよ）。」と、先生に一通り説明した。その後、「私もやりたい！」と言って画用紙を出してきた。「枠は自分で描けるけど、きょうはお母さん描いて」と、筆者に画用紙を渡した。筆者が枠を描いた画用紙をわたすと、筆者の子どもは色を塗り始めた。前回、保育園の友だちと一緒に９色法を試行したときに、きれいに塗れたので自信があるように見えた。そして、前回は友だちがいる前でも「お母さん、一緒に塗ってよ」と言っていたが、今回は「自分で上手に塗れるよ」と言って、自信をもって、ひとりで塗り進めていた。年長組での試行の時には、みんなの前で失敗したくないという気持ちからか、「お母さん、（自分ひとりでも塗れるけど）一緒に塗ってよ」と筆者に言っていた。今回の「自分で上手に塗れるよ」の子どもの言葉の裏には「ちゃんと見ててね」のサインがあったように思われる。家で初めて９色法をやったときには、うまく塗ることができずに、途中で投げ出していたのが、何度も色塗りを経験することによって、「自分もできるようになってきた」「うまく塗れるよ」と、「できるようになってきた自分」に自信を持つことができたように思われた。

時々、年長児の筆者の子どもは「お母さんの好きな色、何？塗ってあげる。」と言って、クレヨンの箱を見せてくれる。子ども自身が元気になりたいときに多いように感じる。「いっしょに塗ろうよ」は「いっしょに元気になろうよ」のサインであると思っている。またあるときには「おかあさんの好きな色、知ってるもん。私と一緒やんな（一緒だよね）」と、お母さんの大好きな色が、自分も大好きな色であることを確認して、とてもうれしそうである。また、子どもが以前自分の塗った９色法の色絵を出してきて、「これ、きれい！」「何回見てもいいなあ」と、塗ったことを思い出しながら、姉や母親である筆者に話している。「これは、私が塗ったん（塗ったんだよ）。」と誇らしげに言っている。子どもが自分の色絵を見ているだけで元気になっていくことがわかっているような行動である。

筆者が保育園の先生方に試行したときの色絵を見て、筆者の小学生の子どもが「私もやる」と言って、自分で枠を描き、色を塗り始めた。「何色から塗るのかなあ？」と筆者が小学生の子どもに言うと、「それじゃ、何色から塗ったか、おぼえていくわ」と言って、

自分で画用紙の裏に塗った順番を記録していった。塗り終わった後、「どんな気持ちになった？」と聞いてみると、そのときは「わからん」と言っていたが、そのうち、「絵が生きているみたいな気がした。色がお話してくるみたいで、元気になったような気がする。色塗っただけやのに（絵が動き出す感じがするなんて）ちょっとびっくりした。」と自分の気持ちを表現した。「絵が生きてるってなあ・・」と説明しかかったが、うまく言葉にできなかったのか、それとも自分の胸に納めたかったのか、やめてしまった。少し時間がたってからあらためて聞くと、「色が、レンガみたいにもみえるし、ブロックみたいにも見えるし、なんか不思議やった」「でも元気になったような感じや」とも言っていた。

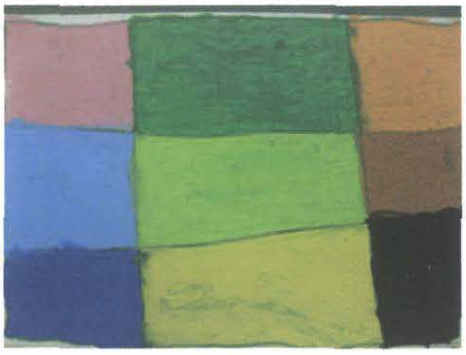


図 3－31　小学 2 年の娘の 9 色法

また、「9 色法の真ん中（中心）は5やな。5 番目に塗るといい感じかも」と、特に真ん中の部屋を意識させるようなことを筆者は口にしていないのにも関わらず、“真ん中”発言をした。第 2 章の図 2 － 4 を見ていただくとわかりやすい。真ん中の部屋が⑤である。真ん中の部屋を 5 番目に塗ると、とても「いい感じ」がするのだそうである。左上、すなわち①の部屋から縦方向に順に塗っていっても、横方向に順に塗っていっても、真ん中の部屋は 5 番目に塗ることになる。真ん中の部屋を 5 番目に塗る傾向は、保育園の年長組、年中組にも見られた。友だちと一緒に色塗りをしているので、友だちが塗るのを真似しているとも考えられる。色だけでなく、塗る順番も真似をしている子どもも少なからずいるのである。

しかし、筆者の子どもや 3 年生の子どもが 9 色法において「真ん中だから 5 番目」「真ん中は一番好きな色」と言ったのは、偶然ではないと思われる。 9 色法の試行の際も、真ん中以外の部屋を塗っていても、真ん中が気になっているような発言が聞かれた。9 色法の真ん中の部屋は、まわりのどの部屋の色とも仲のよい色なのである。色を塗ることはおもしろくて、とてもよい気持ちになる。真ん中に自分の好きな色を塗ると、もっと気持ちよくなることをわかっているようである。ということは、子どもたちは無意識のうちに、真ん中は一番大事なところを表しているとわかっているのではないだろうか。一番好きな色を真ん中において、まわりに 2 番目に好きな色をちりばめる。自分の一番好きな色が真ん中にあると、安定し、自分にとって気持ちのよい色絵になるのであろう。あるいは、真

ん中の部屋を 5 番目に塗ることで、一度そこで気持ちを整理したり落ち着かせたりして、後半の色塗りに臨むのかもしれない。

子どもたちだけでなく、保育園の先生に試行したときも、「真ん中に自分の好きな色を塗ると気持ちいい」と感想を述べた先生がいた。子どもだけでなく、大人もまた「自分にとって気持ちのよくなる色絵」を作っているのであろう。

A 保育園の M 先生は、保育園の先生方への試行で、自分が「9 色法」で塗色した後、「とても気持ちよかった」「すっきりした気分になった」と感想を述べている。試行が終わった後、「家でやってみてもいいですか？」と筆者に声をかけてきた。その頃、M 先生は、最近自分の娘が何をするにも自暴自棄になっている様子が気になっていたようである。

1 週間後、M 先生からこのことについての報告を受けた。

家では、小学 6 年生の娘と小学 3 年生の息子と、3 人で 9 色法をやったそうである。画用紙の大きさは B5 判の画用紙で、3 人がそれぞれの画用紙を持って、それぞれが色を塗った。夏休み中で、家族がゆったりとした時間が取れる時期であった。

M 先生の小 6 の娘は、夏休み前に陸上クラブで腰を痛め、プールも禁止、友だちと遊ぶのも外あそびは禁止、腰に負担のかかることはやってはいけないという主治医の指示で、3 ヶ月の安静を告げられていた。この九色法を行う前には、さらに 3 ヶ月の安静続行と、運動会の練習をも制限するように医師に言われた直後であった。

M 先生は、「保育園で、こんな色あそびをしてきたけど、一緒にする？」と誘って、始めた。色を塗っている最中は、それぞれが夢中になっていたらしく、特に話をするということもなかったくらいだという。

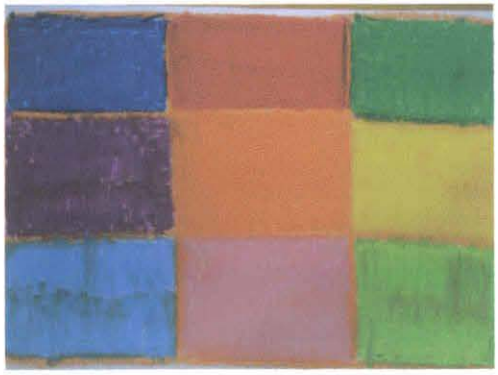


図 3－32、3－33、3－34 を見ていただきたい。

図 3－32 母親の M 先生の 9 色法

図 3－33 M 先生の娘の 9 色法

塗り終わってから、母親の絵と見比べ、娘は「お母さんと同じ色を選んでるーっ！」と嬉しそうであったと M 先生から報告を受けた。真似したわけでもないが、気がついたら同じ色を選んでいたらしい。クレヨンのやわらかい感触も楽しんでいる言葉もあったという。

注：印刷された色は違う色のように見えるが、全く同じ色を使っていたということは M 先生に確認済みである。

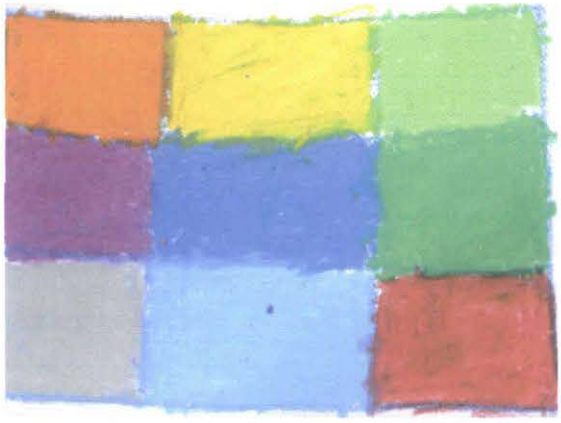


図 3－34 M 先生の息子の 9 色法

本人自身が「涼しい感じの色を選んでいる！」と感想を言った後、笑顔で元気に友だちの家に遊びに出掛けたそうである。軽い心で出かけたようである。

この九色法をしたあと、M 先生が筆者に語ってくれた小 6 の娘のことを記す。M 先生によると、それまでは、家で母親のそばにいてもくっつくということもなかった。また、自分の腰のけがについても自分から母親に相談するということはあまりなかった。しかし、9 色法をしたあと、母親の膝の上に乗ってきて一緒にテレビを見たり、母親の座っているそばで膝をくっつけてきたり、母親とのスキンシップをするようになった。また、自分のけがのことで、しっかり動けないことや友達とも遊べないこと、悩んでいることを話すようになってきたそうである。親子で 9 色法をすることによって、より親子関係が親密になった例である。

一般的に親子が一緒にその時間を過ごすだけでも、十分意義があるものだと思われるが、どの色法であっても一緒に色を塗るということ、すなわち一緒のことをするということで、

親子関係が見直されたり、密接になったりするきっかけになると考えられる。

（6）親子４色法

９色法をやるほどの時間の余裕がなかったので見合わせ、４色法を筆者と筆者の子ども２人、筆者の姪の４人でやった。

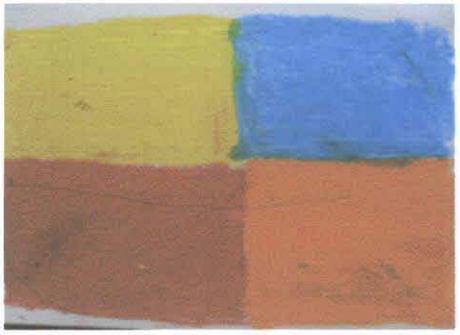


図３－35　小学2年の子どもの４色法（1回目）

はじめは、それぞれの画用紙に４つの部屋を、４色塗っていた子どもたちであった。小２の娘は「好きな色は水色、やで（だから）、筆箱も水色やろ。ランドセルも水色ってあるよなあ。」と言いながら、水色を塗っていた。完成したときには、「きれいに塗れた！」とうれしそうな顔をしてもってきた。

妹の保育園年長組の子どもは、初めは姉と同じように水色で塗っていたが、そのうち、「虹がいいなあ」と言って、色々な色を使った。虹の形も変化させて、自分の好きな色を使った虹が出来上がった。「きれいやろ？」ととてもうれしそうに見せてくれた。また、隣で塗るのを見ていた筆者の小６の姪も、「きれい！」「上手！」とほめてくれたので、余計にうれしくなって、塗り進めていったようである。

図3-36　保育園年長組の子どもの4色法

「虹がいっぱいできれい！」

図３－37　小学2年の娘の４色法　２回目

その様子を見ていた、小２の子どもは、「もう一枚描く」と言って、１つの部屋だけを虹色で塗った。（図３－３５）自分の大好きな色を含んでいる。何回も色塗りを経験しているからか、塗り方もとても丁寧で「ムラなく塗る」ということにかなりの自信を持っているようである。

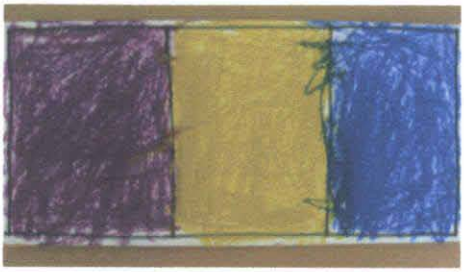
この２人のやり取りを聞いてわかったことは、初めのうちは競争心に燃えて、お互いにほめるなどということはなかったが、塗色している間、「わあ、きれい！」「白いとこないようになってる！」などと、お互いに絵を認め合う言葉になってきているのに気がついた。横で母親である筆者が見ていて、どんな塗り方をしていても、母親からは「ほめる」言葉しか出てこない。そんな雰囲気を察したのか、初めはお互いに「相手よりもきれいに塗りたい」「うまく描きたい」という気持ちが勝っていたのが、色を塗り進めていくうちに気持ちが落ち着き、素直に相手の絵のよさを感じ取る余裕が出てきた。いつもは「どちらがうまいか」「どちらが勝っているか」「どちらがたくさんほめてもらえるか」と、競争心が強くなる一方の子どもたちであるが、穏やかな雰囲気でその日は過ごした。勝ち負けの評価を気にして競い合っていたのが、全く気にしなくなる方法であるということを筆者は確認したのである。

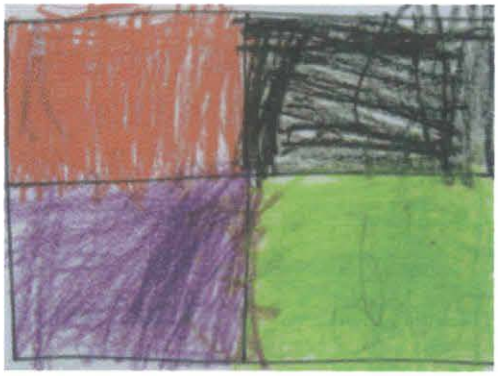
どんな色を塗っても、どんな虹を描いても、部屋は壊していない。枠と区切り線が守りの壁になっているからであろう。守られている中で、子どもたちは虹や装飾物を描き、冒険しているのである。味方がいるといろいろなことに挑戦できる。その味方が「枠」なのである。横に母親である筆者がいることは二重の壁になっていて、より頑丈になる。だから、それまで単色しか塗ることができなかった筆者の子どももいろいろな冒険ができるようになったのかもしれない。親子で各色法をする意義をここにも見出せる。

（7）子どもたちの色絵

○A保育園年少組　3色法・4色法の試行結果

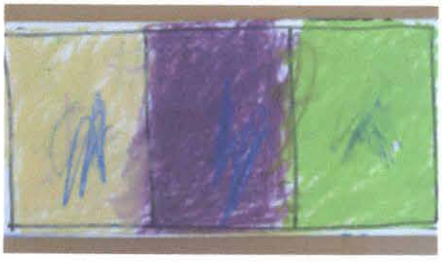
以下の絵は左が3色法、右に4色法の絵を示した。第3章の冒頭の表にあるように、3色法は7月29日、4色法はほぼ1ヵ月後の8月27日に試行した。この1ヶ月の間に、その成長ぶりがみてとれるはずである。





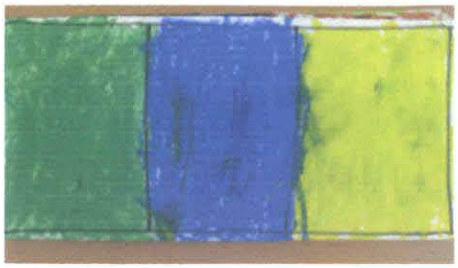
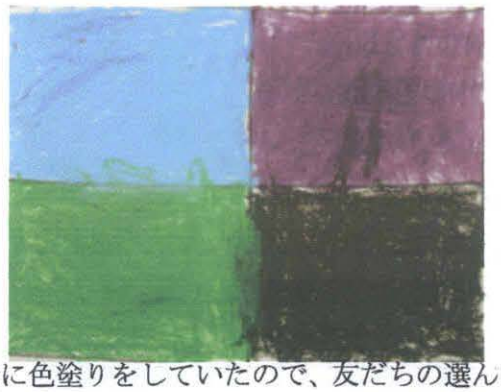
年少1

4色法の試行のとき、「ぼく、赤が好きやねん。やでな（だから）、赤が一番なん」と、自分の好きな色について教えてくれた。かなり速く4色の色塗りを終えた。友だちの塗っている姿もじっと見てはいるが、真似をするのではなく自分の好きな色を選んでいるように感じた。



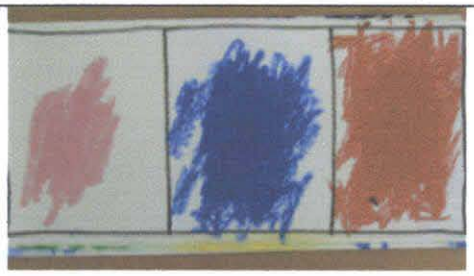
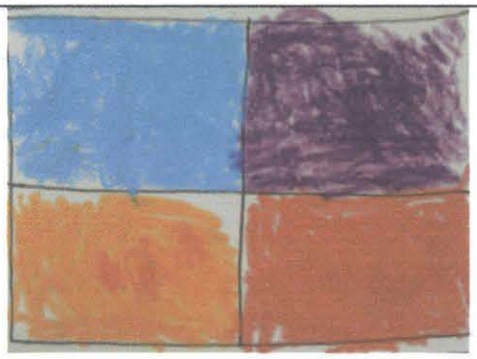
年少2

3色法のときは、3色塗ってから、「ぼくの好きな色。」と言って、それぞれの色の上に青色のクレヨンで塗り始めた。4色法のときも3つ目の部屋を塗るまで色を重ねること（左下）と混色（右下）を楽しんでいるようであったが、4つ目の水色のみ単色で塗った。「ひとつの色で塗ると、きれいやな。混ぜると汚くなるわ。」と言って、4色目（水色）を単色で塗っていた。クレヨンの色は混ぜるより単色のほうがきれいだということを経験しているうちに、自ら学習したようである。（混色の汚さ、単色の美しさを子ども自身が発見！）終わってからも「また一緒に色塗りしよな！」と筆者に声をかけてくれた。

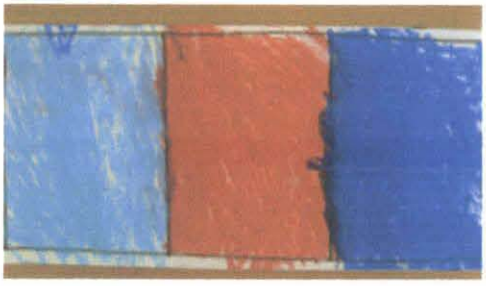
年少３　サクラ

３色法のときは、仲のよい友だちと一緒に色塗りをしていたので、友だちの選んだ色を見ているが、「自分は自分」とでもいうように、自分の好きな色を塗っていた。４色法のときは、第２グループに入って色塗りをしたが、塗り方が気に入らなかったのか、第３グループが終わる頃に一緒に終わった。はみ出たところを上から塗ってわからないようにしたり、「まだ白いとこ、あるなあ」と言って、ムラなく塗ろうとしていたりした。塗り終わってから自分の生活している場面を思い出しながら、「ここ（水色）が私で、紫はお母さん、黒がお父さん、緑はお兄ちゃん」と、自分の家族に当てはめて、話してくれた。「お兄ちゃん、大好き。いっぱい遊んでくれるもん。きょうはお父さんが（保育園の）お迎えやねん。お母さん仕事で遅くなるんやって」ということも、塗りながら話してくれた。

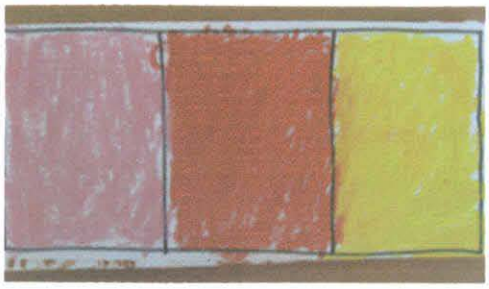
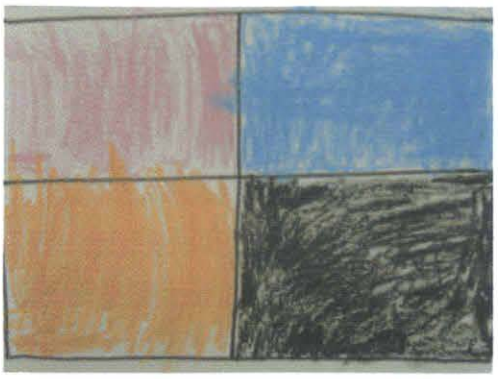
年少４　ライ

次の５フウと双子である。３色法では、枠の近辺は塗ることができなかった。しかし、４色法では、枠の中をしっかり塗ることができた。周りにいる友だちと、今子どもたちに人気の「ゴーオンジャー」の話をしながら塗っていた。



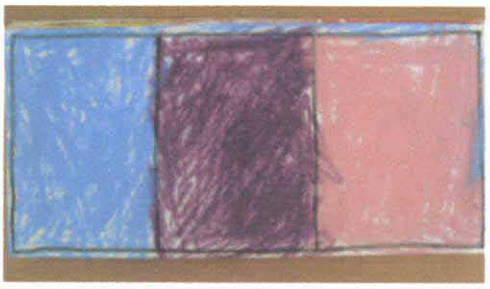
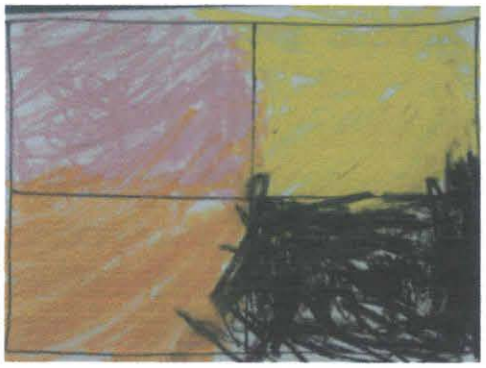
年少５　フウ

３色法のときは、黙々と色を塗っていた。しかし、４色法のときは、「赤はママとマナ（姉・小１）、黒はじいちゃんとばあちゃん、黄色はライ、青はぼくとパパ」と、まわりが色を（部屋を）家族に見立てているのを聞いて、自分の家族の成員と色をつなげて話をしていた。「赤は、ゴーオンレッドな。かっこいいねん」と人気キャラクターの話もしていたが、「いくぞ！ブルー！」と、キャラクターそのものになりきって塗っている姿も見られた。

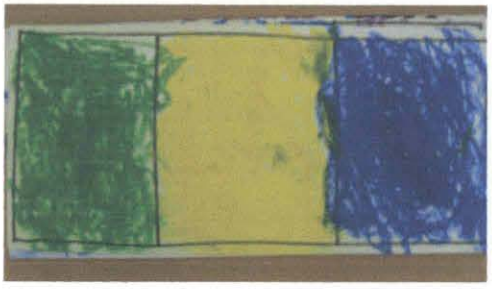
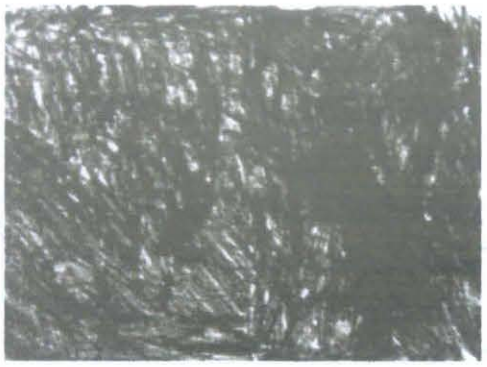
年少 6

3 色法のときに比べて、4 色法ではクレヨンの使い方も慣れてきて、サーっと塗っていた。まわりの友だちが黒を使っているのを見て、黒のクレヨンを手に取った。ほとんど話はしなかった。

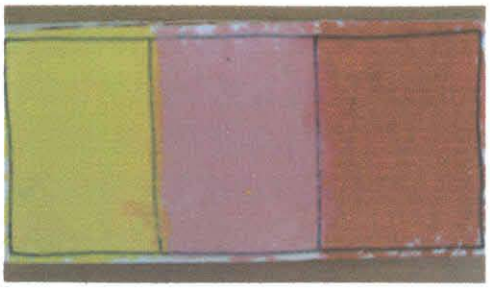
年少 7

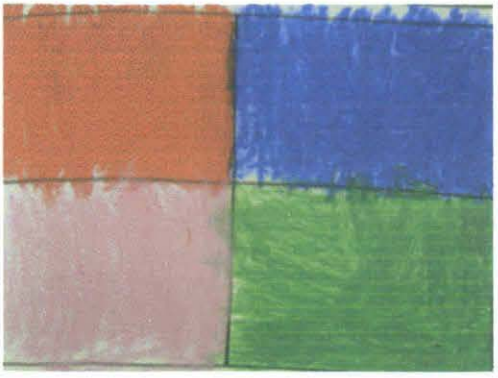
3 色法のときは、枠の外まできれいに塗っていた。4 色法では、まわりの様子をよく見て色を塗っていた。まわりで黒を使う友だちが多かったからか、黒のクレヨンを手に取った。色についての話も家族についての話もほとんどしなかった。

年少 8　カイト

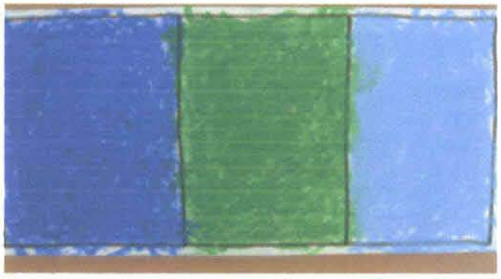
4 色法では、はじめに黒を選んだ。2 つ目の部屋を塗るときも「黒がいいん」と言って、黒に塗った。3 つ目の部屋も「黒にする」と言って黒に塗った。4 つ目の部屋を塗るときは、どうしようか１０秒ほど迷っていたが、結局黒になった。理由として「ゴーオンブラックは、黒いんやで」と教えてくれた。自分の塗っている黒の中に「ゴーオンジャー」を描き、自分も「ゴーオンジャー」になりきっていた。

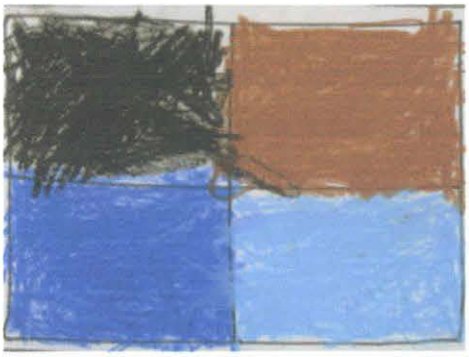




年少 9

保育園で会うと、以前から筆者に声をかけてくれて、筆者とよく話をする子どもである。3 色法のときは、「塗れた！」と 1 色ずつ報告してくれていた。4 色法のときも要領を得ていて、すぐに赤のクレヨンを手にとって塗り始めた。1 色塗るたびに筆者の顔を見て「自分の絵を見て」とアピールしていた。とても丁寧に塗っていた。はみ出たところも上からクレヨンを塗って直そうとしていた。



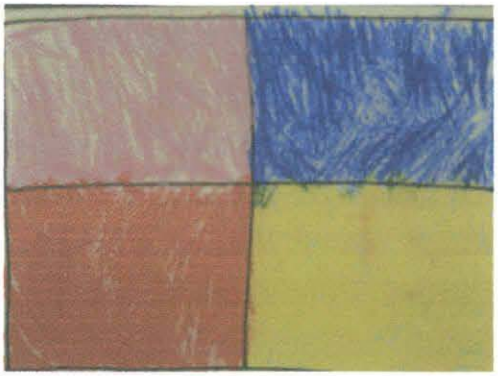


年少 10

3 色法のときは丁寧に一色ずつ塗っていた。4 色法のときは、「また色ぬんの？」と声をかけてくれた。筆者が完成した絵の裏に名前を書こうとすると、苗字が違って同じ名前の友だちがいるので、「名前だけじゃあかんよ。（年少組には）同じ名前が二人いるから、全部名前書いてね（名前も苗字も）」と注意してくれた。色がはみ出たときには困った顔をしていたが、「大丈夫だよ」と声をかけると安心したように再び色を塗り続けた。

年少 11

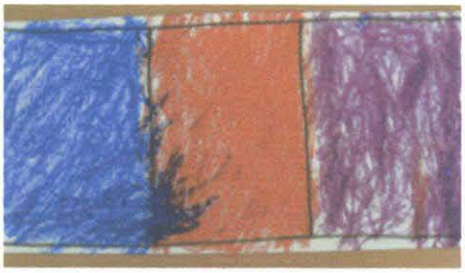
3 色法のときは、自分の好きな色を塗りつつも不安な様子が伺えた。4 色法のときは、3 色法のときよりも不安そうな様子は少なくなっていたように思われた。「もうじき赤ちゃん生まれるね、おかあさん、しんどそうにしていない？」と声をかけると、「しんどそうじゃないよ」と答えた。「楽しみだね」というと、「うん」とうなずいてにこっと笑った。

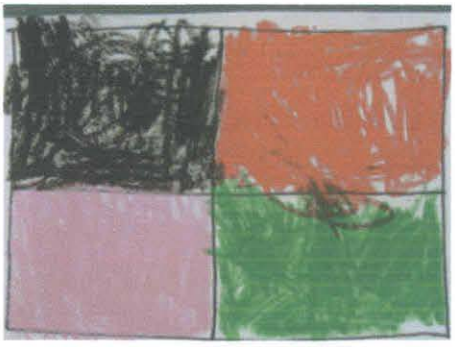


年少 12

3 色法のときは欠席していたので、

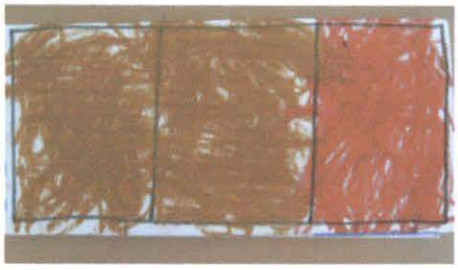
4 色法が初めてであった。しかし、まわりの様子をよく見ていて、どうやって塗ったらいいのか理解したようであった。とても丁寧に塗っているので「きれいにぬれてるね」というと「うん」とうなずいた。クレヨンの持ち方もしっかりしていて、きれいに塗ろうという気持ちが伝わってきた。

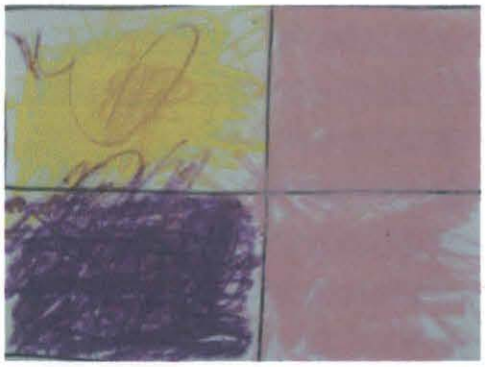




年少 13

3 色法のときは、初めきょろきょろして落ちつかない様子であったが、1 色塗るごとに落ち着きを取り戻していったようだ。3 色塗り終わる頃には、とても落ち着いた顔をしていた。3 色法のときに自信をつけたためか、4 色法のときは、説明する前に「ぼくはこれ！」と言って、すぐにピンクのクレヨンを持って塗り始めた。





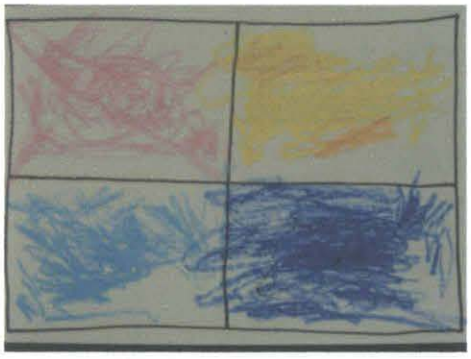
年少 14　ユメト

3 色法のときは、「あー」「うー」と声を出しながら塗っていた。普段、ひとつのことに集中できないことが多く、「多動」傾向がある。しかし、色を塗ることに集中し、ニコニコしながら塗ることができた。4 色法のときもなかなか集中できなかったが、ピンクで 2 つの部屋を塗った段階で、何も言わずに見せにきた。「きれいに塗れたね、後二つきれいに塗れるかな？」というと、うれしそうな表情になった。黄色の上に紫でぐるぐるがきをし、「黄色の上にへびがいんねん。そんで、紫食べたん。」とお話を作っている。「へび、怖くないん？」と聞くと、「こわくないよ」と答えた。ピンクのところは、再度筆者と二人で、「こんこんこん、いますか？いますよー」とドアをノックするような感じでクレヨンを動かし

た。きゃっきゃっと笑っている。「もっとして、もっとして」と筆者に要求したので、一緒に「こんこんこん・・・」と何回もやった。終わってから「また一緒にいろぬりしような」と言っていた。

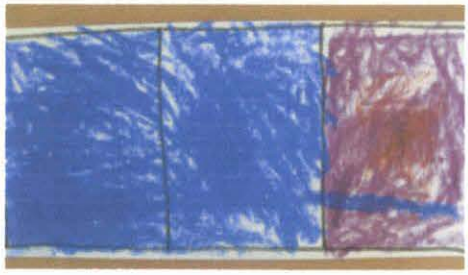
年少 15　フユキ

3 色法のときは「黄色ぬってな、ピンクぬって、紫ぬって、黄土色塗って、また黄色ぬってん。」と教えてくれた。みんな好きな色か聞くと、うなずいた。4 色になると、ほとんど色を混ぜるということがなかった。ピンクの上に線を描き、「これへびやねん。へびこわいやろ？やでな（だから）、へびはな、赤色を食べに行くねん」とお話を作ってくれた。大人にとってはなんでもないような線や形がこのこどもにとってはお話を作っていくきっかけになっていた。



年少 16

3 色法のときは、はじめは単色で塗っていたが、周りの様子をみて、色を重ねることと混色を楽しんだ。4 色法では、混色は見られなかった。年少 2 の子どものように混色は汚くなることを体験したからであろうか。「もっと塗ろうか」というと首を横にふり、「これでいい」と言った。



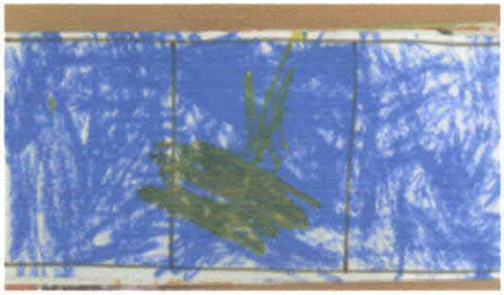
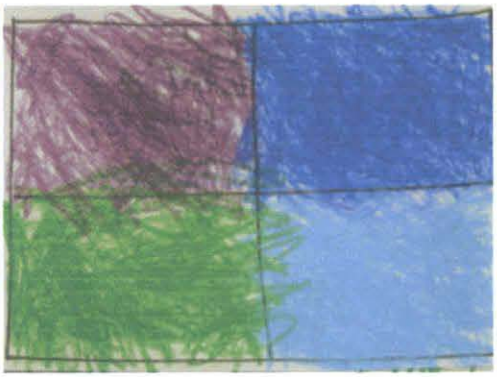
年少 17

3 色法のときは「青がすき」なので、2 つの部屋に青色のクレヨンで塗ったと担任の先生から聞いた。4 色法のときは、黄緑で 3 つの部屋を塗った。クレヨンをトントンしたりぐいぐい押し付けたりして、新しいクレヨンの感触を楽しんでいるようであった。2 色目にオレンジ色を手にとり、塗り始めたが、少

しだけでやめてしまい、もう一度黄緑で塗った。

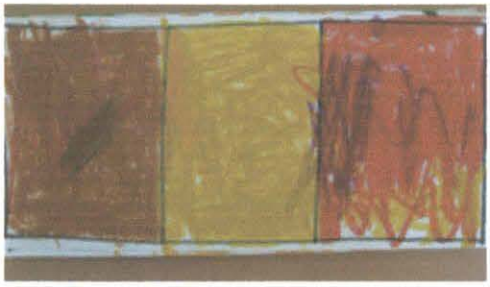
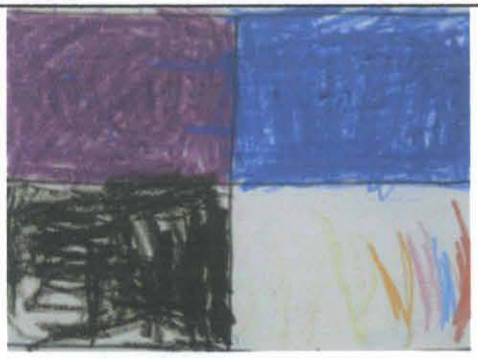
年少 18

3 色法のときは、自分の席を離れたり、うろうろしたりして集中できにくかった。4 色法では、しっかり一つ一つの色を塗っていた。4 色にしたことで、安定感を得られたのか、席を離れることもなく、1 つ 1 つの色を丁寧に塗ることができた。

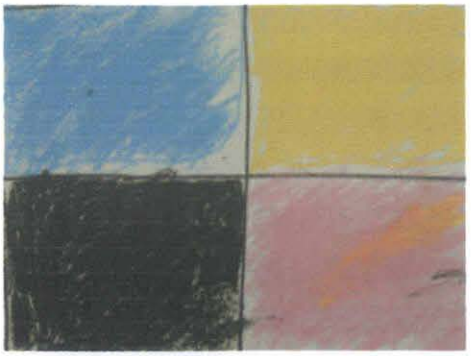
年少 19

3 色法のときは「青が好きなん。やで（だから）青にぬった」と一色で塗ったことから、話をすることができた。4 色法のときは、「これがぼくで（青）、ここがママ（緑）」と話をしてくれた。4 色塗り終わってから、うれしそうに自分の塗った絵を持ってきた。

年少 20

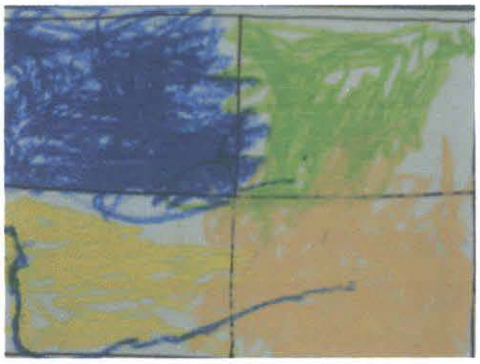
ブラジル国籍の子どもで、家では、ポルトガル語、保育園では日本語で話をしている。4 色目を右下の部屋に塗った。6 色のクレヨンを使って、「虹」を描いたそうだ。「きれいな虹だね」というと、嬉しそうにしていた。この絵を描き終わった後、まだ描いている友だちの頭をこついていった。友だちは本児に「やめてよ！」と注意していたが、やめようとしなかった。そして、最後に筆者の背中に回り、抱きついてきた。「虹色」の部屋をほめて欲しかったようだ。筆者のほめ方が足りなかったようだ。色使いや塗り方に日本国籍の子どもとブラジル国籍の子どもたちと大きな差は見られない。



年少 21

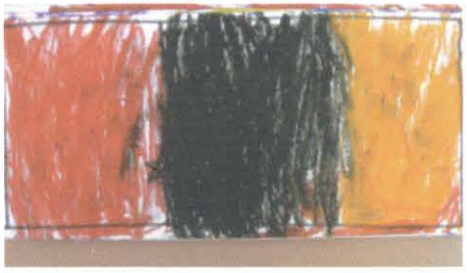
3 色法のときは、クレヨンを持つ手に力が入らず、1 色塗るのも苦労をしていた。3 色のうち 3 つ目の部屋を塗るときに、「混ぜん（混ぜない）ほうがきれいやな」と発見した。

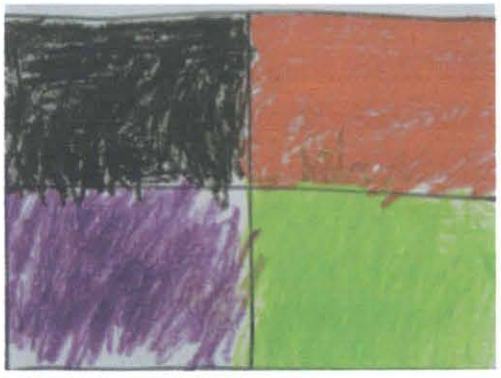
4 色法のときには、その学習が生きていて、混ぜることはしなかった。クレヨンを持つ手にも力が入り、とても一生懸命に塗っていた。塗っている途中でも「これ見て」と絵を見せに来た。



年少 22

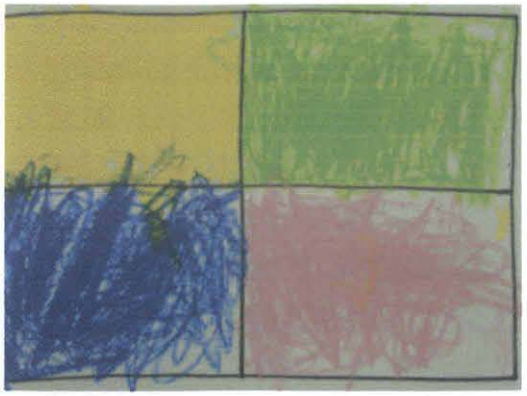
3 色法のときは、混色を楽しんでいたようであった。4 色法では、一つ一つの部屋にしっかり塗ることができた。また青色の線を延ばして、「へびが来た」とお話を作っていた。まわりの子どもたちがお話をつくっていたからであろう。同じようにクレヨンの線を「へび」に見立て、まわりの友だちと話をしていた。





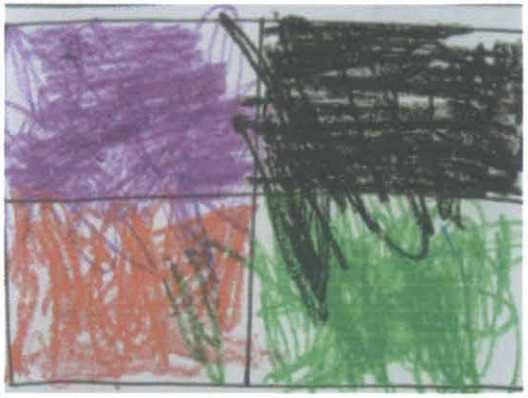
年少 23

3 色法のときも 4 色法のときも「赤が好き」と言って、赤のクレヨンを手に取った。ひとつひとつの部屋を丁寧に塗っていた。



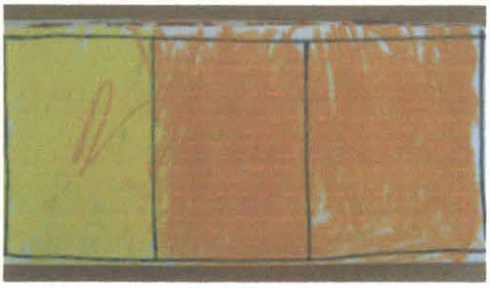
年少 24

「好きな色はピンク」なので、2 回とも初めにピンクで塗っていた。塗っている途中もほとんど話をしなかった。しかし、少し塗っては「見て」というしぐさで、筆者のほうを見ていた。「いいよ。上手だね」というと、また塗り始めた。



年少 25　ユウキ

3 色法のときは「炎が燃えている」と言って、燃えている様子を描いたそうだ。4 色法のときは、しっかり色を塗っていた。「紫はトシ（姉・小 1）で、緑がママ、黒がパパ」と話をしてくれた。そして、「赤はユウキ」で、とても好きな色だそうだ。赤のクレヨンを手にしたときに、自分の座っているいすを赤く塗りだした。自分の座っているいすは「自分のものなので、赤く塗りたかった」そうだ。とてもうれしそうな顔をしていた。

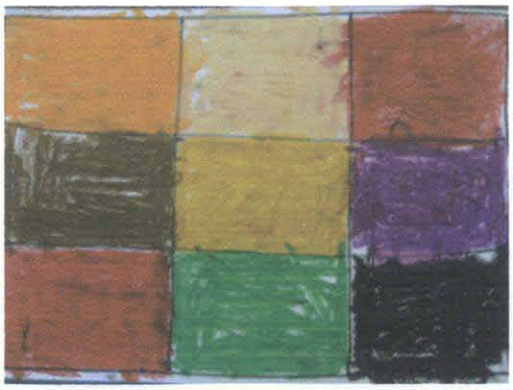


年少 26

3 色法のときは、「オレンジが好きなの？」と聞くと、「うん」とうなずいた。オレンジが好きだから 2 つの部屋をオレンジに塗ったそうだ。4 色法のときもオレンジを塗っていた。黒はまわりの友だちの様子を見て、黒のクレヨンを手に取ったようだ。新しい太いクレヨンに少し戸惑っているように思われた。

○A保育園年中組　9色法　試行結果

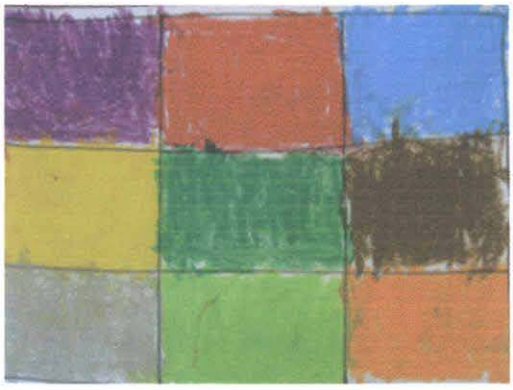
なお、表中の数字は、塗った部屋の順番を示している。（年長組も同じ）



年中1

5	6	7
2	1	8
4	3	9

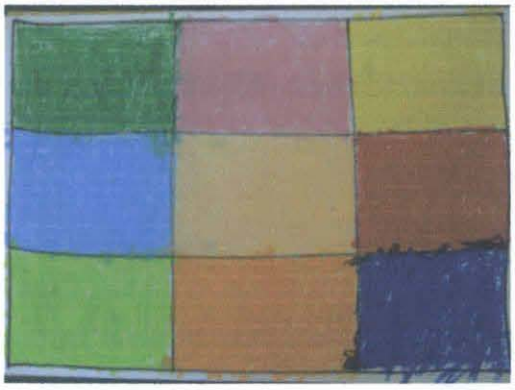
友だちの様子をよくみていた。自分の前に座っている年中15と年中2と色についての話（「この色はゴーオンレッドの色や」「赤がすきなんや」など）や順番について話をしていた。



年中2

1	2	3
4	7	9
5	6	8

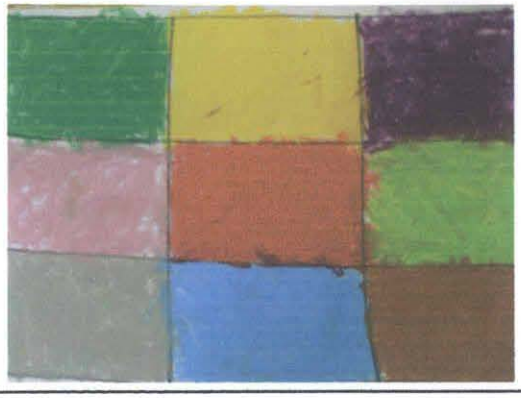
隣どうしの席に座っていた年中15と話をしながら塗っていた。一つ塗り終えるたびに「もうこんなにぬれたで」と教えて合っていた。



年中3

1	2	3
4	5	6
7	8	9

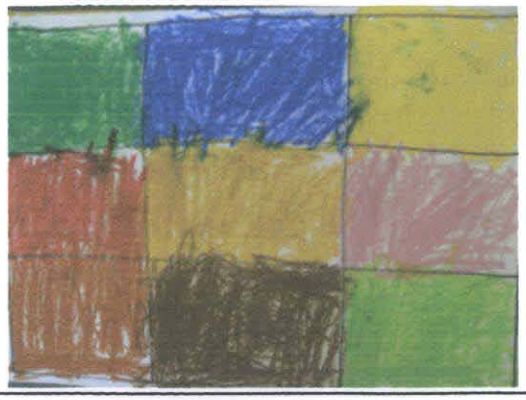
一番時間をかけて塗っていた。周りの様子も見ていたが、ほとんど発言もつぶやきもなく、一生懸命に塗っていた。



年中4

3	2	1
4	7	8
5	6	9

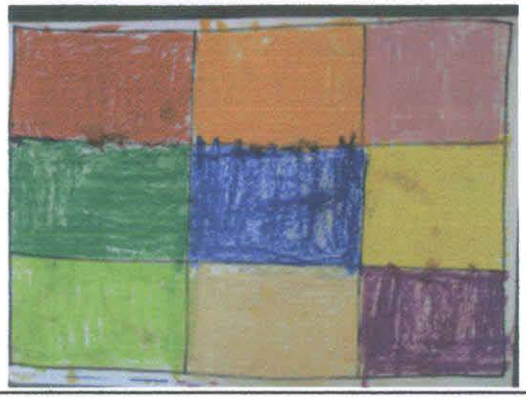
1色ずつ丁寧に塗っていた。1つの部屋が塗れると筆者の顔を見て、「これでいい？」というような顔をしていた。



年中５

1	2	3
4	5	6
7	8	9

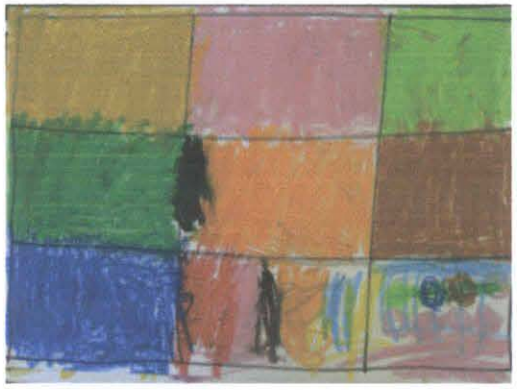
「はみ出している、はみ出している」「どうしよう」と困った様子を見せていた。「少しくらい気にしないよ」と言うと、ほっとしたような表情を見せた。もうじき弟が生まれるという話をした。弟が生まれてくるのがとても楽しみなようであった。



年中６

1	2	3
4	5	6
7	8	9

教示の段階でとても楽しみにしている様子が伺えた。筆者の顔を見ると、とてもうれしそうな顔をしてくれた。



年中７　　ココロ

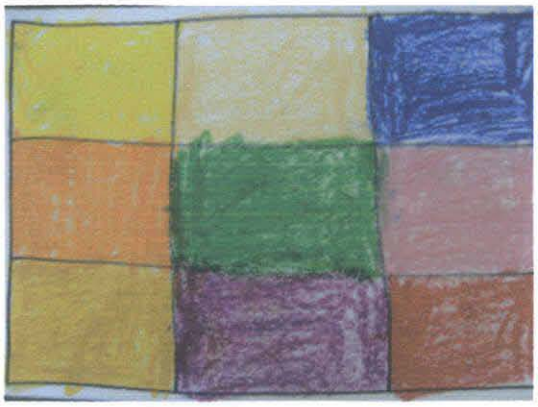
7	6	2
8	5	1
9	4	3

アイと同じ机に座って、アイの色絵をみて同じように描いていた。４番目に描いた絵は「虹色にしたかった」そうだ。一番に茶色を塗っているが、一番好きな色はピンクなのだそうだ。

年中８　　アイ

7	6	2
8	5	1
9	4	3

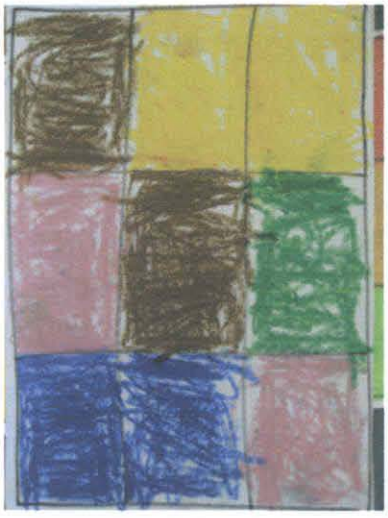
ココロと塗る順番まで同じであった。真ん中は「虹色にしたかった」色々な色を塗ってある部屋は「もっとこうして（力を入れて）ぬらなあかん」と言いながら塗っていた。



年中９

1	2	3
4	5	6
7	8	9

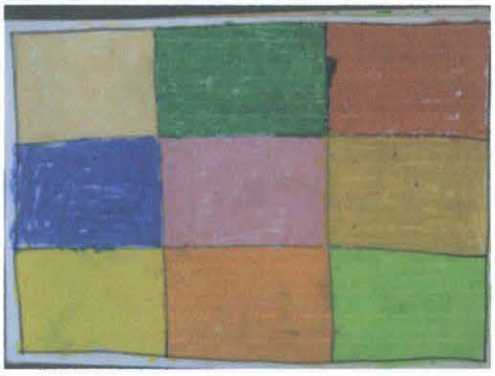
クレヨンの使い方が慣れていて、弱い力でさーっと塗っていた。



年中 10

4	5	6
2	3	7
1	8	9

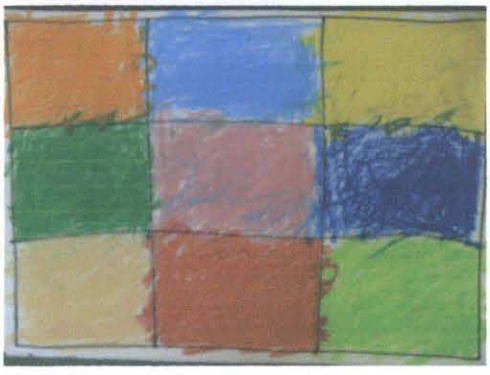
はじめは、紙を横にして青から塗り始めたが、塗り終わってから「縦のほうがいい」と言って、縦向きにした。
年中５の子どもと年中１０の子どもの会話
　年中 10「はやくぬれるでー」
　年中５「はみだしてる」
　年中 10「ええでー」
好きな色だから、「青色と黄色を２つの部屋に塗った！」と教えてくれた。



年中 11

1	7	5
9	2	8
4	6	3

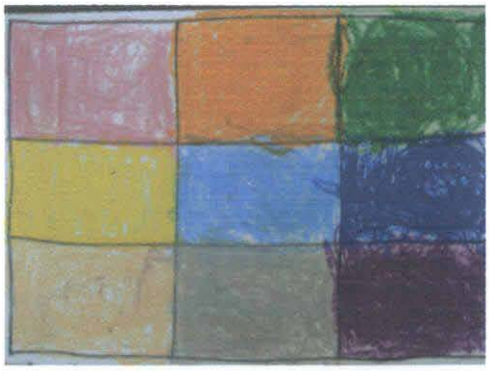
年中９といっしょに一生懸命塗っていた。年中９の色絵をみていたが、参考にする程度で同じ色を塗っているわけではなかった。



年中 12

9	7	3
2	4	1
8	6	5

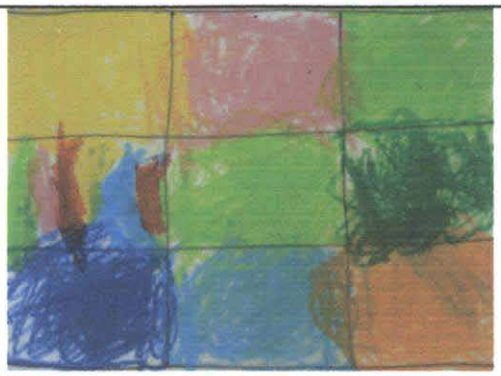
塗っている順番に規則性が見られず、なかなかおもしろい塗り方をしていた。



年中 13　　ヒサ

1	4	5
2	3	6
9	8	7

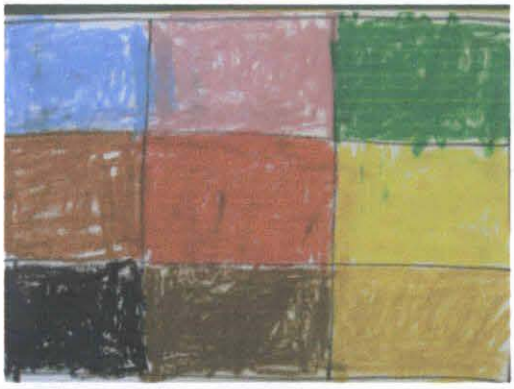
ココロとアイと一緒に座っていて、いつも同じような行動をとっているが、このときは「まねっこしやへん」と言って、自分の好きな色で、好きな順番で描いていった。ココロやアイの絵は見ていたが、自分の気持ちに沿って描いていったようであった。



年中 14

1	2	8
9	3	6
7	4	5

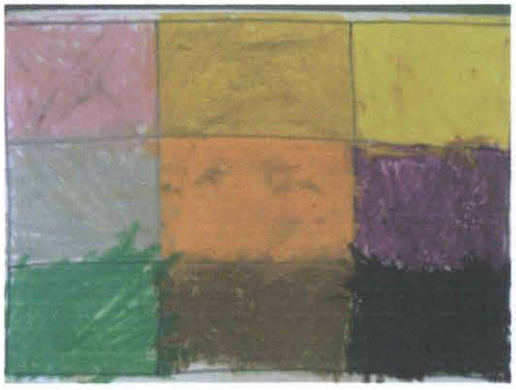
アイやココロの「虹色」をみて、本児も「虹色」に塗った。友だちの色をよく見ていた。



年中 15

5	6	7
3	4	8
1	2	9

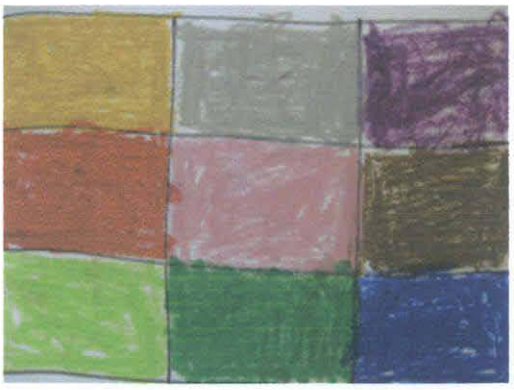
年中１や年中２、年中 16 と色々な話をしながら塗っていた。塗りながら、「どわー」「そりゃっ」などの声も出ていた。とても楽しそうであった。



年中 16

1	2	9
3	4	8
5	6	7

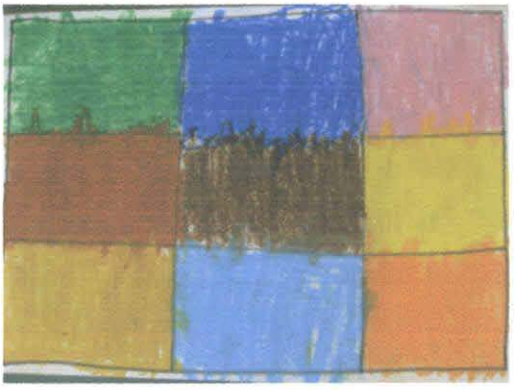
カブトムシなどの昆虫に夢中らしく、塗っているときも、カブトムシの話をしながら塗っていた。担任の先生が「もしかしてこの黒や茶色（6 番目、7 番目）は、かぶとやくわがたの色？」と聞くと、「うん」とうなずいた。



年中 17

1	6	7
2	5	8
3	4	9

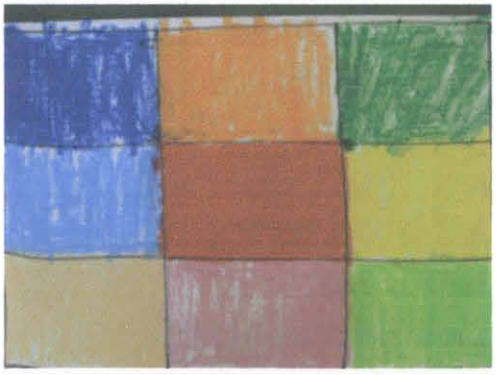
まわりで友だちが話をしているのをじっと聞いていた。じっと聞いていて、友だちの話に時々うなずいていた。



年中 18

3	1	2
4	5	6
7	8	9

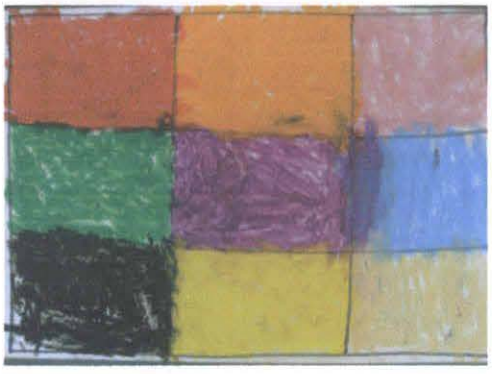
1 色塗るたびに、先生を探して先生の顔を見ていた。先生に声をかけるというほどではなく、先生と目が合うと、ほっとした表情になって、次の色を塗り始めた。



年中 19

3	2	1
4	5	8
9	7	6

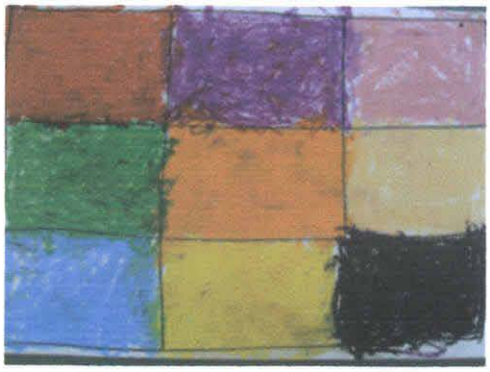
黙々と塗っていた。時々顔を上げて筆者のほうを見て「みて」というしぐさを見せた。



年中 20

4	3	1
5	2	6
7	8	9

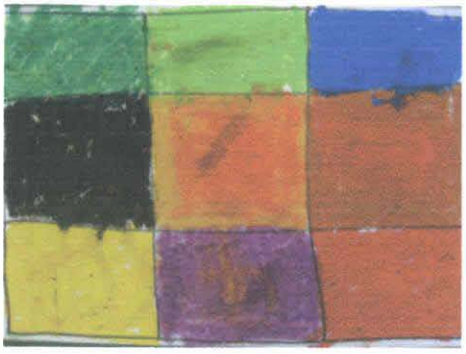
はみ出してしまったところを何とかしようとして、上から水色を塗っていた。はみ出したところを気にしていたが、上から塗って少し安心したようであった。



年中２１

9	7	8
2	1	6
3	4	5

9色法の試行が終わってから登園してきたため、みんなと一緒に色塗りはできなかった。他の子どもたちがお昼寝をしているときに、園長先生と一緒に事務室で塗った。年中22と双子。
はじめは「きれいに塗れない」と言っていたが、園長先生が塗り方を示すと、要領をつかんで塗った。黒のところは思い入れがあるのか、何度も塗りなおしていた。

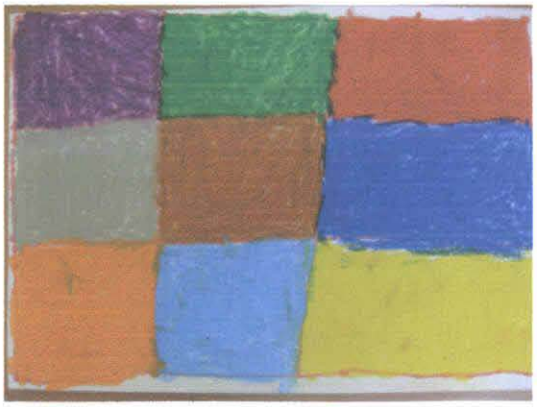


年中２２

7	8	9
5	4	2
6	3	1

年中21と一緒に他の子どもたちがお昼寝をしているときに園長先生と一緒に塗った。
はじめは、混色を楽しんでいたが、最後のほうになると単色で丁寧に塗っていた。

○A保育園年長組　9色法　試行結果



年長1

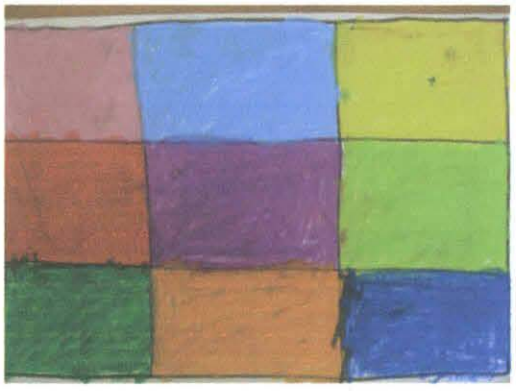
7	4	1
8	5	2
9	6	3

「次に塗る色、決まってんの」の発言で、ひとつの色を塗っている途中で、すでに次の色を選んでいる様子がよくわかった。
　並べているときに「うわーっ！きれい！」と何度も言っているのが印象的であった。

年長2

1	6	7
2	5	8
3	4	9

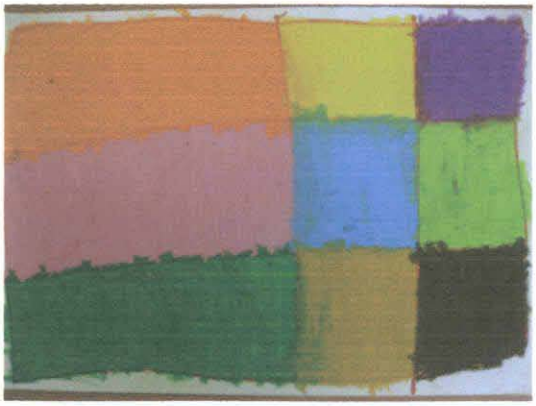
もともと口数の少ない子どもである。塗っている最中も一生懸命に塗っているので、ほとんど話をしなかった。塗り終わってから、友だちの絵を見て歩いていたが、何もいわずに見ているだけであった。しかし、表情は穏やかな表情であった。



年長3　モモコ

1	2	3
4	5	6
7	8	9

遅れてきて時間がなかったので、枠は自分では描けなかった。枠は筆者が描いた。すぐに他の友だちに追いつき、色塗りを楽しんでいた。「できた！」と大きな声で言ったので、まわりの子も大きな声で「できた！」と言っていた。「速くぬれたね、きれいだね」と声をかけられると、とてもうれしそうな表情を見せた。リョウに「最後の色を選んで」といわれて、「えー・・」といいながらも「それじゃ、この色にしたら？」とリョウに色を選んであげたが、結局リョウはその色は使わなかった。しかし、いやな顔をするわけでもなく、とてもいい表情のままであった。



年長４

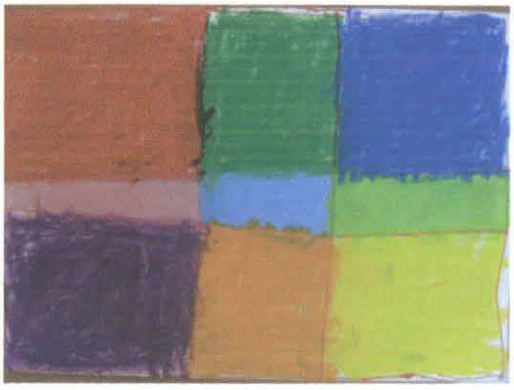
2	3	4
1	5	6
7	8	9

最後の２色（８番・９番）は筆者の子どもと相談しながら決めていた。とてもきれいに力強くぬれていた。筆者の子どもと同じ色が使われているので、筆者の子どもといっしょに「一緒やね」とうれしそうに確認していた。塗る順番は違っても、同じ色が塗ってあるのを見て、「友だちであること」の確認をしているように見えた。

年長５　リョウ

1	2	3
4	5	6
7	8	9

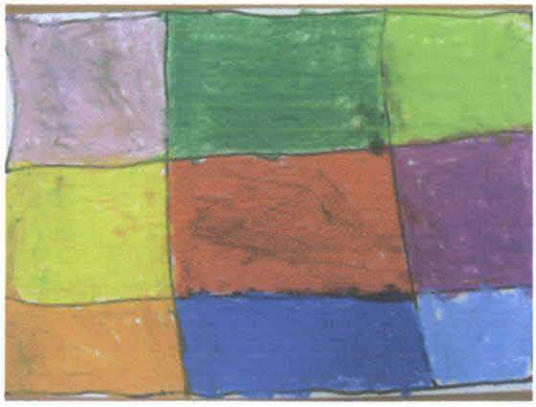
途中で年長12タイチの絵をみて「タイチくん、はやいな」とタイチに伝える。タイチは、うれしそうな顔をしていた。その顔を見て、リョウもうれしそうであった。
クラスの中で最後まで塗っていた。最後の色を決められず、③モモコに「モモちゃん、最後の色決めて」と頼んでいる。モモコは「えー、うちが決めんの？」と言っているが、目はすでにクレヨンを見ていた。「そんなら・・オレンジ！」と、決めたのだが、リョウはすでに黄緑を手にしていた。「黄緑にするわ」と言って、黄緑で塗った。モモコは「なんや自分で決めたんや」といいつつも、いやな顔はしていないように感じた。



年長６

8	4	5
1	2	3
7	6	9

周りの友だちの様子を見て、ピンクで描き出した。女の子はほとんどがピンクで塗り始めた。様子を見ながら色を選んでいるようであった。自分の色絵をとても大切に扱っていた。



年長７

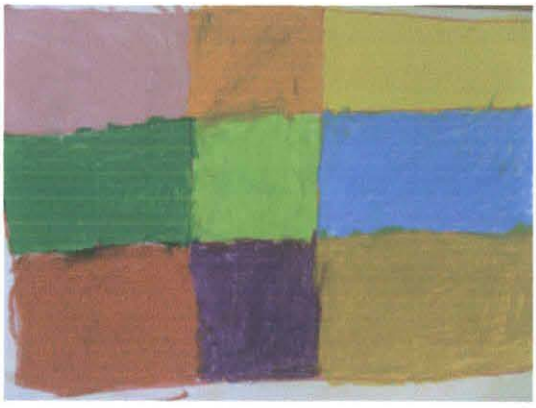
9	1	6
4	2	5
8	3	7

周りにあまり影響されることなく、自分で色を選んでいるように見えた。
「手がしびれる」といって、何度が手を振っていたが、集中して描き出すと、ほとんど何も言わずに描いていた。モモコが「できた！」と大きな声で言ったので、本児も大きな声で「ぼくもできた！」と教えてくれた。

年長８

1	3	7
2	4	8
6	5	9

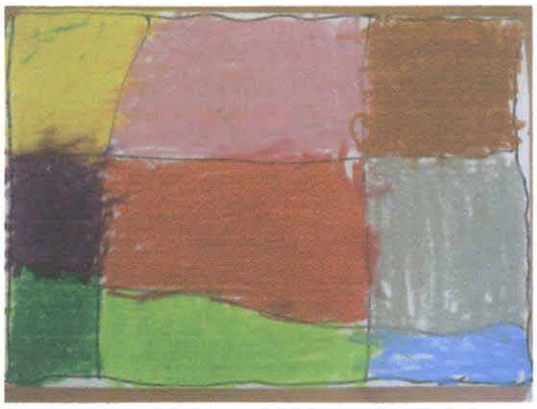
はじめは、周りの様子を見ているようであったが、そのうち周りの様子を気にすることなく、自分の好きな色を塗っているようであった。とても力強く塗っていた。１つの色を塗り上げるたびに、筆者の顔を見て「これでいい？」という顔をしていた。「きれいだね」「いいよ、この調子」と声をかけると、また自分の塗色の作業にもどった。



年長９

1	2	3
7	4	5
8	6	9

ひとつ塗り終わると「できた！」と担任の先生に知らせていた。その他はほとんど発言は見られなかった。一生懸命に塗っていた。



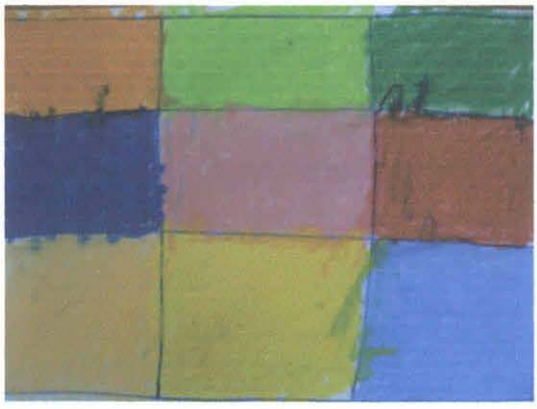
年長 10　ヨウスケ

3	6	9
2	5	8
1	4	7

いすに 5 分ほど座っていたが、次第に立ち上がり机に足をゆっくりとのせて、塗り始めた。自分のやりたくないときや気分が乗らないときには、なかなか集中して取り組めないことが多いが、この日はとても楽しいそうな表情をしていた。「好きな色は緑なんだね」と問いかけると、「ううん、全部の色が好き」と楽しそうに答えた。

「いすから立ってしてんねん（しているんだよ)」「本気になってるから」「ぼく、本気になると、いすにすわってられへんねん（すわってられないよ)」と担任の先生に話しながら、塗っていた。

「ぼくできた！」「今日はこれやらなくても元気やねん。カブトムシもらいにいくねん。やで元気なん」



年長 11

7	4	1
8	5	2
9	6	3

遅れてきたが、追いついて、終わる頃にはみんなと同じペースになっていた。枠は遅れてきて時間がなかったので、筆者が描いた。筆者が塗り方を説明しなくても、友だちが塗っているのを見て、要領を得て塗り始める。

年長 12　タイチ

1	2	3
4	5	6
7	8	9

塗り終わってから、「一番好きな色って何？」と聞くと、「赤色」と答えた。一番好きな色が塗られていないので、「どこ？」と聞くと「ここ」と言って、枠を指差した。一番好きな色を枠にしたことは、枠の意義

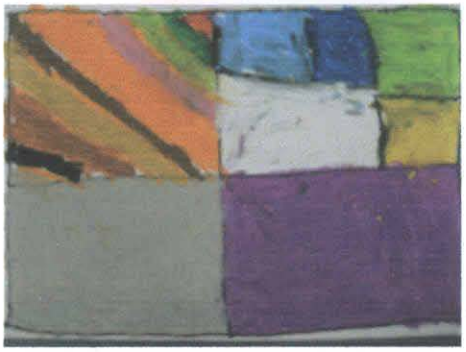
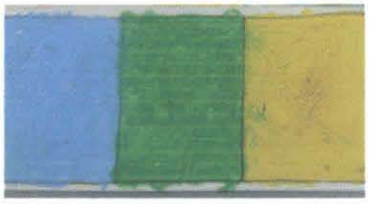
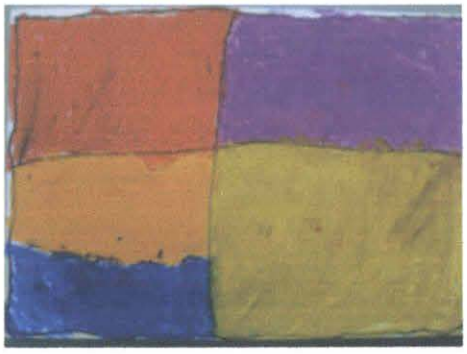
を考えると、自分を保護してくれる、お母さんが子どもを守るということと同じ現象であろう。もう自分の好きな色はこの絵の中に存在するからいいと思ったのであろうか。年長 10 ヨウスケが「全部の色が好き」と言っているのを聞いて、「タイチも全部の色が好き！」と大きな声で言っていた。

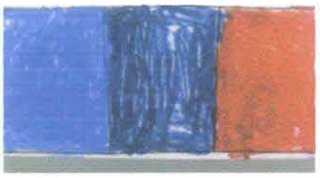
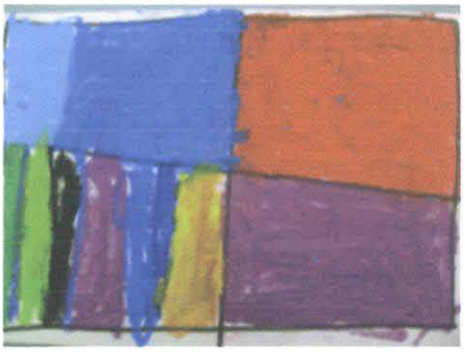
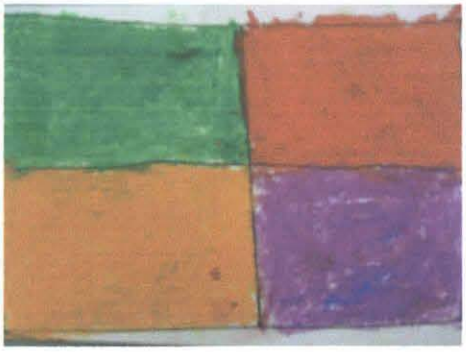
年長 13　筆者の子ども

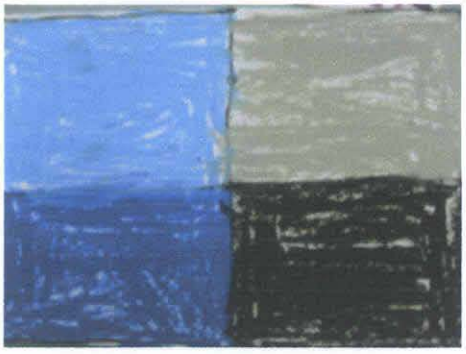
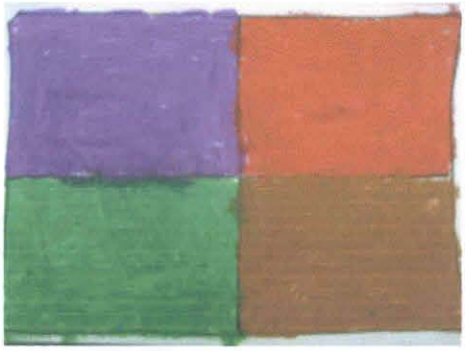
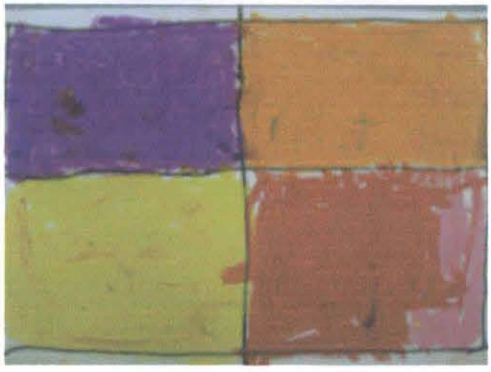
1	4	9
2	5	8
3	6	7

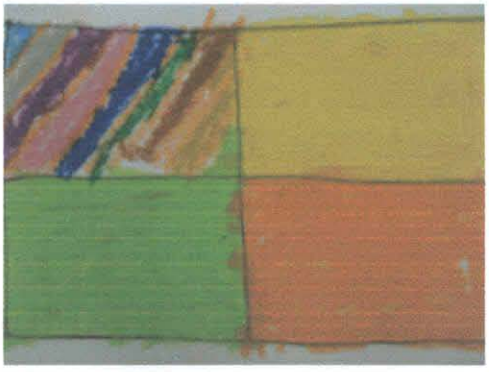
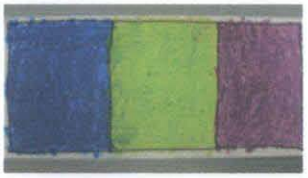
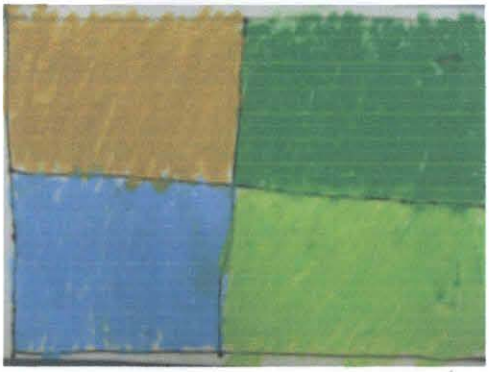
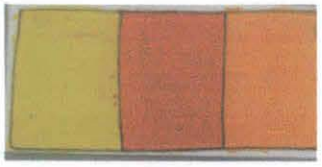
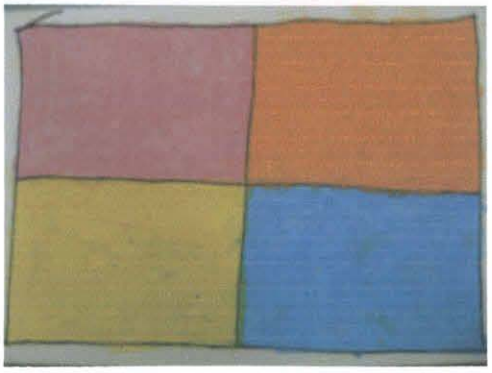
はじめのピンクのところで「お母さん塗って。」「大丈夫やで、手伝ってって言ったら手伝ってもらってもいいねんで」と、友だちにも手伝ってもらうことを勧めていた。途中、家ではムラなく塗ることができなかったのに、周りの友だちがムラなく塗っているのを見て、「お母さん、みて」と、がんばってムラのないように塗っていた。その途中の発言。「一番上手なのはだれ？」周りの評価も気になるようだ。「みんなきれいだし、上手に塗れているよ」というと、「そうか・・みんなか・・」とつぶやいた。最後の 2 色は向かいに座っている年長 4 と相談しながら色を決めていた。「この色にする？」「これは使ってあるやんな」「こっちの色のほうがいいよ」と、とても楽しそうであった。

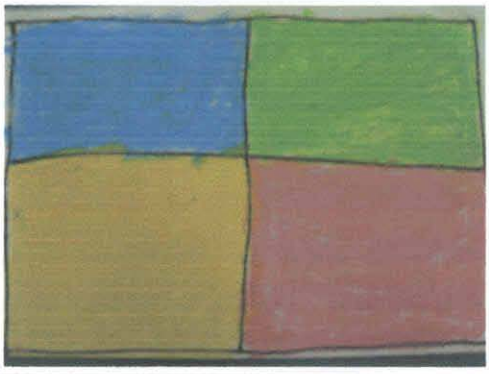
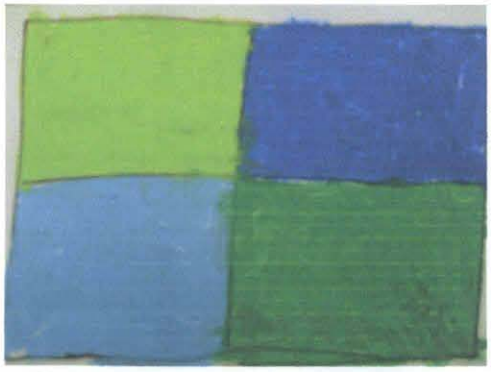
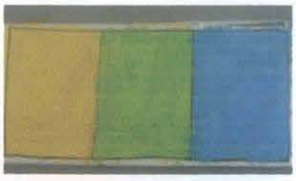
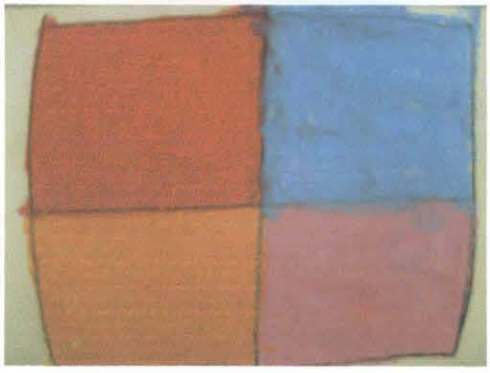
○B小学校1年生　3色法・4色法　試行結果

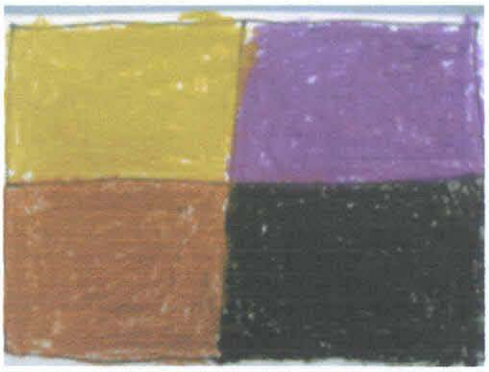
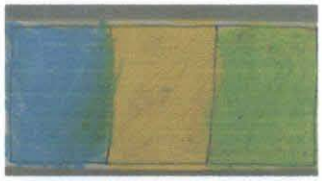
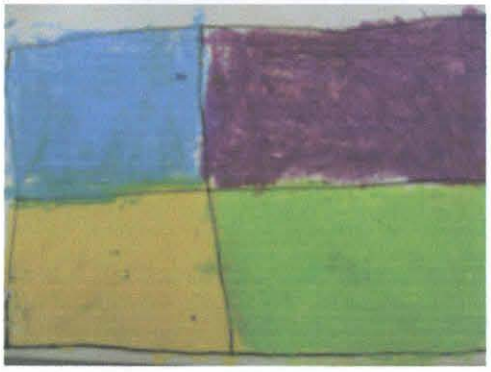
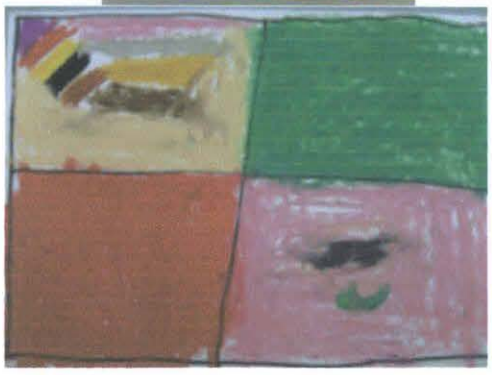
  	1－1 時間をかけてじっくり色塗りをしていた。(4色法の試行時に) 虹色を塗るのに時間がかかっていたが (左上)、右上の5色に塗り分けているのも時間をかけて塗っていた。右上の 5 色は、その中にさらに「4色法」を描いたものか。とても満足げな顔をしていた。 最後のひとつの部屋が残ったときに「あとひとつ！」と言って、さらに気合を入れているような言葉を発し、塗った。自分で気合を入れて、さらに元気になっているような感じがした。
 	1－2　ヒロヤ 4色法のとき「好きな色が4色ではたりやん」と言って、4つ目に塗った左下の部屋に5色目が塗れるように2つに分けた。

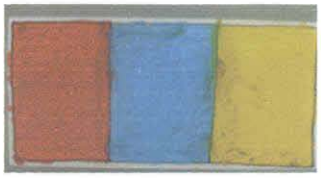
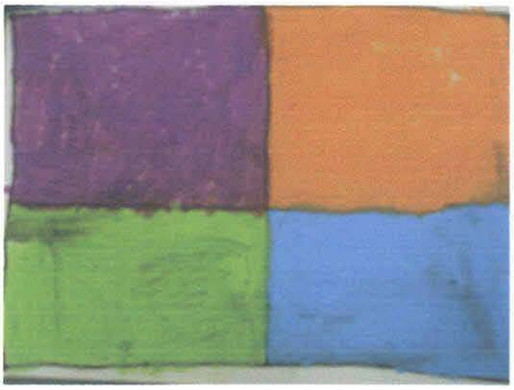
 	１－３　アサヒ 初め、担任の先生と朝からのトラブルの話し合いをしていたので、みんなより遅れて始めた。左下は、「いっぱいの色で塗ったらもっときれいになるよ」と言って、自分の好きな色を塗った。
  	１－４　コウキ 「早く塗ろうさ！」と言って、塗りたくて塗りたくてしょうがない様子が伺えた。3色法のときに比べて、4色法のときは集中して色を塗っていた。

  	１－５　ケイスケ 朝からのトラブルで、担任の先生に指導してもらっていたので、みんなより遅く始めたが、塗り終わるのはほとんどまわりの子どもたちと変わりなかった。
  	１－６ 3 色法でも 4 色法でも、とても丁寧に塗っていた。色を塗りながら、自分が見たテレビ番組の話やゲームの話をしていた。
  	１－７ 4 色法のとき、「ここはどうしたん？（右下の 2 色塗ったところを指差して）」と筆者が聞いたら、「好きな色を塗っていたら足りなくなったから、最後に赤とピンクを塗った」と教えてくれた。これも、4 色法を工夫した“5 色法”になっている。

  	1－8 リュウの「虹色好き」という声をきいて、リュウの絵を見にリュウの席まで行き、それを見て、虹を描いた。はじめに橙色で線を描き、その間を自分の好きな色で塗っていった。虹が描けると、すぐに「見て！」と言って、筆者に見せてくれた。とてもうれしそうな誇らしげな顔をしていた。
 	1－9　ユウタ となりの席のコウキ同様、色塗りが楽しくて、早く塗りたくてしょうがない様子であった。 色を塗り始めると、とても集中して塗っていた。となりのコウキが話しかけても、ほとんど答えずに、一生懸命塗っていた。
 	1－10 4 色法のとき、「塗れた！」と言って、とてもうれしそうな表情で、筆者のところに持ってきた。7 月の 3 色法の色絵と並べたときに、「なんかよく似てる」といって、自分の色絵を見比べていた。そして、ほとんど同時に出してきた 1－11 ともよく似た色を選んでいたので、「なんかいっしょみたい」と言って、うれしそうにしていた。

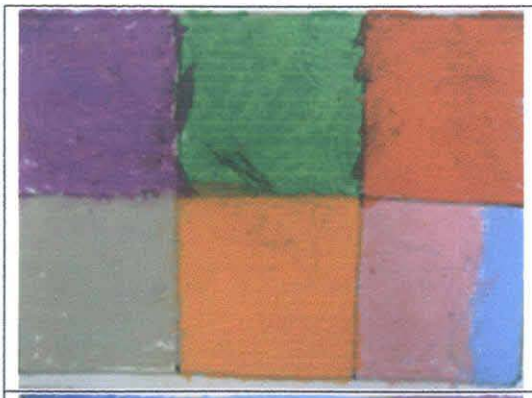
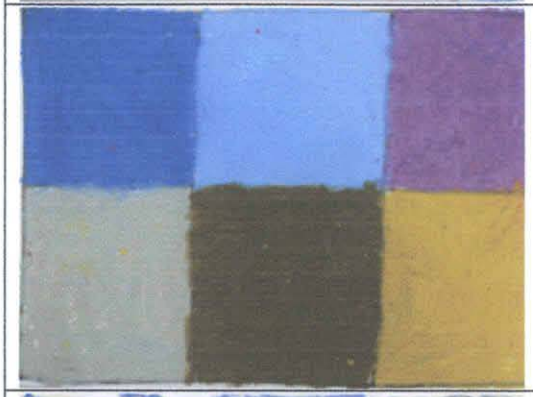
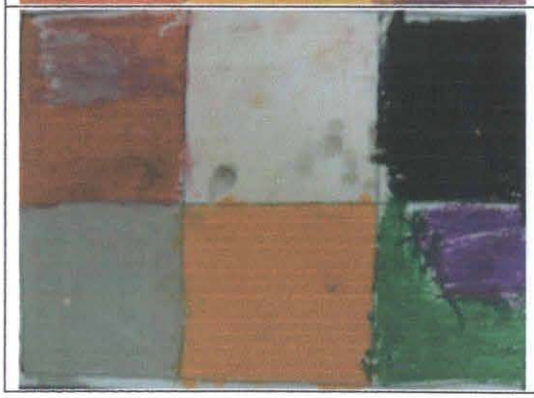
  	1－11 1－10 とよく似た色を選んでいたので、1－10 に「よく似ている感じがする」と言われて、いっしょに 2 人の絵を見比べていた。
  	1－12 「緑がすきなん」と言って、出来上がった色絵を持ってきた。4 色法の試行のときは、「ちょっと涼しい感じがいいかなぁと思って・・」ニコニコした顔で、筆者のところに持ってきた。
 	1－13 色塗りと絵本の読み聞かせを楽しみにしていた様子がよく伝わってきた。塗色中、「はみ出た！どうしよう？」と困った様子であったが、「大丈夫。ちょっとくらいはみ出てもいいよ」というと、ほっとしたような顔を見せていた。

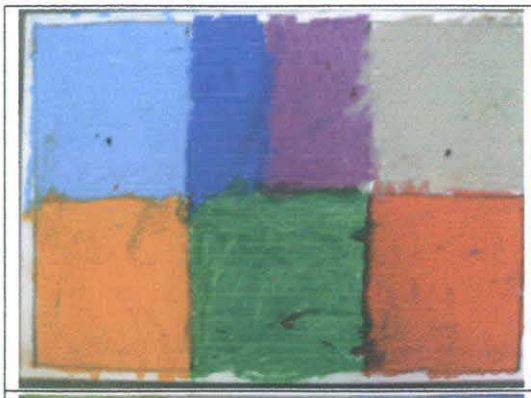
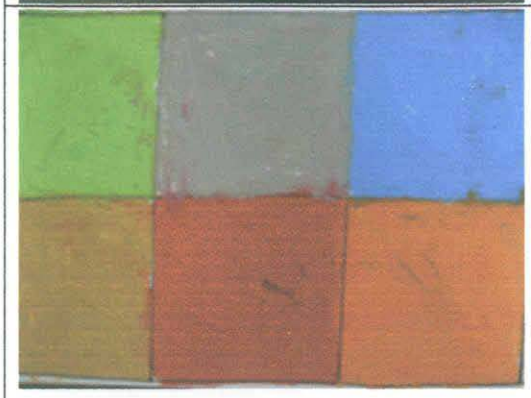
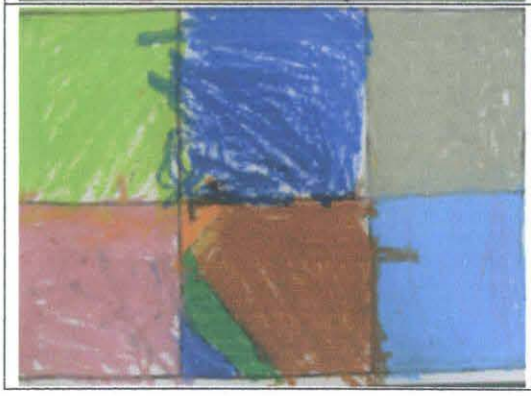
  	1－14　　ショウタ 3色法のときは、初めての色塗りだったので、(1色法のときに欠席していた) 緊張しているような様子であった。表情もほとんどなかった。4色法の色絵を塗っているとき、「一番初めに塗ったのはどこ？」と筆者が聞くと、「黒」と答えた。「そうか、かっこいいもんね。黒の服たくさん持っている？」と聞くと、「うん、かっこいい」と「かっこいい」ということばにとてもうれしそうな表情を見せた。
 	1－15　ケンタ 「ぼくは緑が好き」と言って、はじめに黄緑のクレヨンを手に取った。リュウが緑を塗っているときに「ぼく緑好き」という言葉に反応して「ぼくも緑すき！」と答えている。また黄色を塗っているときに「黄色塗っている人いますか？」と呼びかけて、「はーい」とまわりの友だちが答えると「やっほー！」と同じ時間に同じ色を塗っていることを確認してとても嬉しそうであった。 4色塗り終わった後に、「やっと描けた。きれいにかけた！」とほっとした表情をした。
  	1－16　リュウ 「ぼく緑好き」と言いながら、緑を塗っていた。1－15ケンタが「ぼくも」というと、ケンタのそばに行って確認している。そのあと、「ぼく、本当は虹色がすきなん。そうや！虹色かこ！」と言って、左上の虹を描いた。「ぼく、虹色すき！」というと、まわりの2～3人の友だちが反応して、同じように虹を描いた。

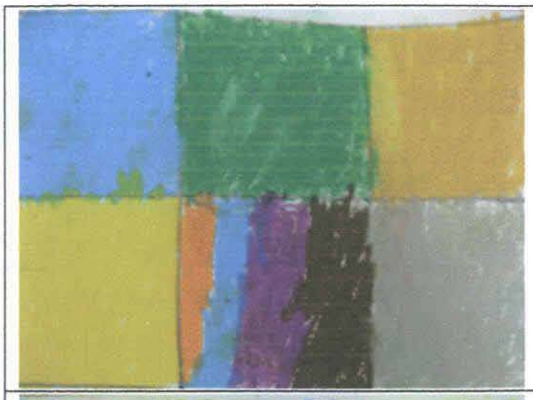
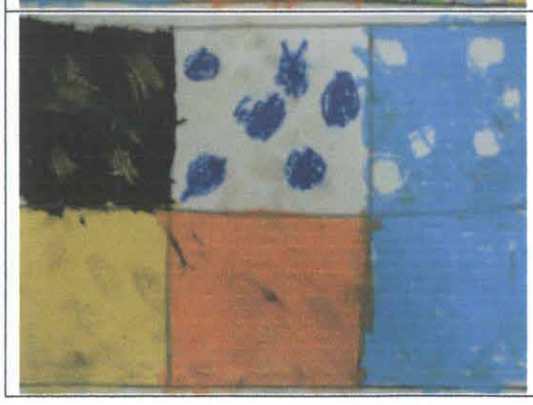
 	1－17 1 番初めに紫のクレヨンを手にとって、筆者に（私は紫が好きなん！）とでも言いたそうに見せてくれた。他の色もとても一生懸命に塗っていた。塗りおわってから、ほっとした表情を見せた。

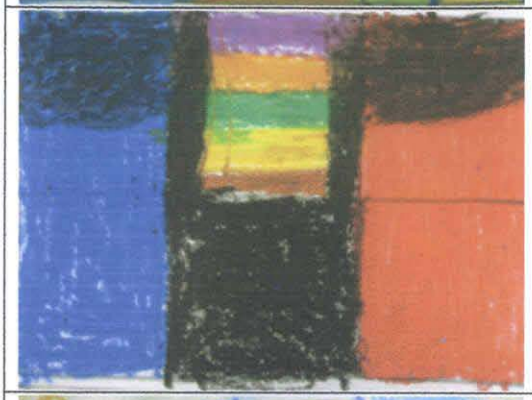
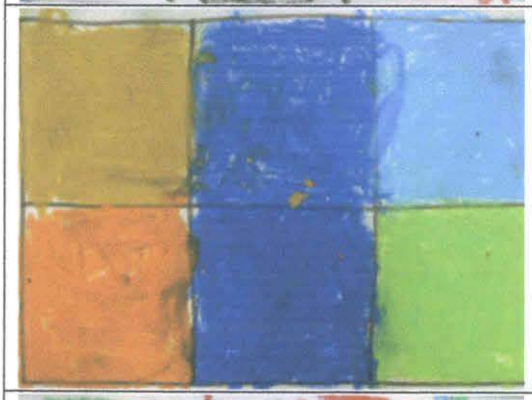
○B小学校1年6色法　試行結果

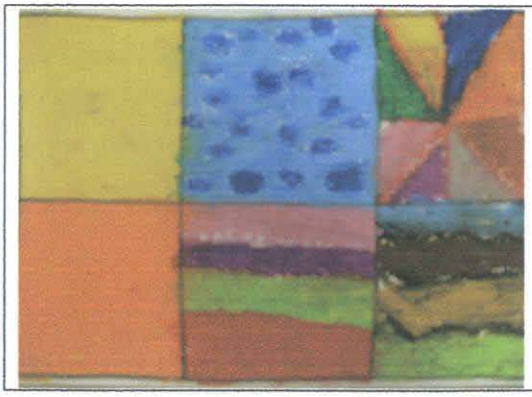
（1−1、1−2などの番号は3色法・4色法の試行結果と同じ子どもを表す）

	1－1 「6色ではたりない」と言って、7色目がかけるように6つ目の部屋を2つに区切った。7色目を塗っているときはとてもうれしそうな表情であった。
	1－2　ヒロヤ きれいな塗り方をしていた。朝の学習で一緒に学習するときだけでなく、ふだん学校ですれ違うとヒロヤのほうから声をかけてくれることが多い。
	1－3　アサヒ 色に関係する話だけでなく、普段の生活の中で起こった出来事や家でのことを話しながら塗っていた。「青が好きやから、青の仲間を集めよう」と言って、青、水色、藍色を塗った。その後に、物足りなかったのか、上に色を重ねた。
	1－4　コウキ 「どうしても白を塗りたい」と言って、白を使った。しかし、自分が思っているような白色にならなかったようで、「白ってあかんわ（だめだな）」と、まわりの友だちに言っていた。

	１－５　ケイスケ 「６色では、自分の好きな色が入らん！（入らない）」と言って、１つの部屋を２つにわけ、７色目を塗っていた。
	１－６ きれいに塗ることができた。自分も「塗り方に自信がある」とでも言いたそうに、塗っているときの自分を見て欲しそうにしていることが多かった。
	１－７ いつもマイペースで塗っていた。クレヨンでの模様作りを楽しんでいた。発言は少ないが、とても楽しそうな表情をしているのが印象的であった。
	１－８ まわりの様子をじっくり観察してから取り掛かっていた。虹色にしようとしたが、途中でやめてしまった。しかし、塗り方はとてもきれいである。

	１－９　ユウタ 「虹色」というまわりの声を聞いて、ユウタも虹色に挑戦した。1つの部屋を塗った後、「やっぱやめた！」と言って、それ以後は単色で色塗りをした。
	1－10 塗り方もとてもきれいでしっかりしていた。「きょうも虹色塗っていい？」と一番に聞いたのは本児であった。とても楽しそうに色選びをしていた。
	1－11 1－17 の子どもとよく似ている絵を描いていた。はじめに描き出すのはいつも 1－11 の子どもであったが、真似されていやだ、見られていやだという思いはないようであった。1－17 の子どもとお互いに色絵を見合っていた。
	1－12 黒く塗ったところは、下に色々なクレヨンで下描きがしてあり、その上を黒く塗り、引っかき絵を描いた。引っかくものがなかったので、鉛筆で引っかいていた。みんなに「すごい！」と言われて、ちょっと照れていた。

	1－13 リュウが虹色を塗っているのを見て、本児も虹色を塗った。１つの部屋の中に色々な色を使って絵を描いて楽しんでいるようであった。
	1－14　ショウタ 青・黒・水色という３色から、赤などの暖色が出てきた。「今日はいろいろな色を使っているね」と声をかけると「わるい？」と言って照れ隠しをして言ったようであった。しかし、色を塗っているショウタの表情は確実に明るくなってきていた。
	1－15　ケンタ 「ぼくは緑が好き」と言って、やはり黄緑のクレヨンから手に取った。今回は「青もいいなあ」と言って、２つの部屋を青に塗った。
	1－16　リュウ 「ぼくはやっぱり虹色が好き」と言って、虹色を描いた。前回よりもたくさんの色を使って虹色を描いた。リュウが混ぜるのをみてアサヒに「まぜたら汚い」と教えてもらっていた。

	1－17 1－11 の水玉や虹色を参考にしているが、全部真似をしているというわけではなかった。塗っているときはとても楽しそうであった。1－11 の子どもとお互いに色絵を見合っていた。何も言わないが、楽しい雰囲気が伝わってきた。

○B小学校1年生　9色法　試行結果

（1−1，1−2などの番号は3・4色法、6色法の試行結果と同じ子どもが描いたことを示す）

6	3	4
9	1	8
7	2	5

（この表は、色塗りをした順番を表す。以下同じ）

1−1

（感想）あたたかいきもちになりました。

塗り始めるときに「白は使わん（使わない）って約束やったよ」とみんなに確認してくれた。「きょうは、おばあちゃんちに行くの、おばあちゃんちは8時間くらいかかる。だからあまりおばあちゃんに会えない。だから、お手紙書くの」と次の日から会いに行くおばあちゃんの話をしていた。塗っている最中に「クレヨン折れた！どうしよう・・」と初めは言っていたのだが、2回目に折れたときには「いいの、おばあちゃんちいけるから」クレヨンが折れたことを気にしていない様子であった。

1	4	9
2	5	7
3	6	8

1−2　ヒロヤ

（感想）もえる、いいきもちでぬりました。

楽しそうに塗っていた。左の真ん中の部屋は、虹を描いたそうだ。虹色に塗ってから、フェルトペンで上弧を描いていた。虹がかけたので、「うれしい！」と明るい顔で話をしていた。

1	3	4
7	9	8
2	5	6

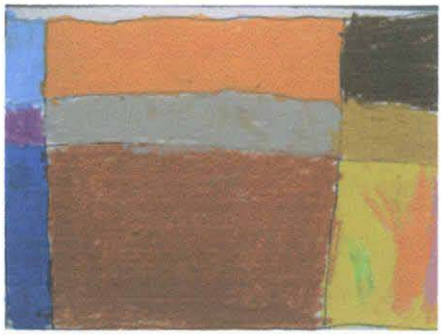
1−3　アサヒ

（感想）もえる心、あつい心、心があつくなるきもち

「好きな色いっぱい塗りたいから、大きさかえる」と言って、9つの部屋を作るときに、好きな色を塗る（であろう）場所を大きくとった。

右の灰色の丸に黒い線が描いてあるのは、「グーの形（こぶし）」だそうである。殴りたい気持ちになったので、「グーの形（こぶし）をかいた」のだそうだ。そして、もえる気持ちになってきたので、こぶしを炎に包んだそうだ。「みんなをたおしたくなるーっ！」

と叫んでいた。そして、最後は自分だけで、この色絵を塗りながら話を作っていた。塗った後は「元気になっているよ！」とうれしそうであった。



1	7	8
2	6	9
3	5	4

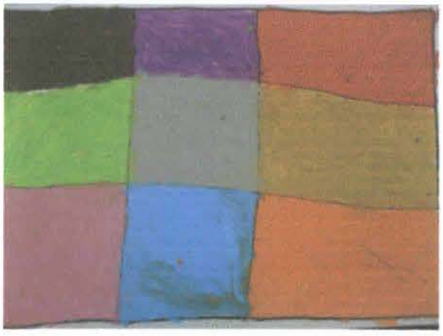
1－4　コウキ
（感想）つかれた

この日のコウキにとってA4判の画用紙は大きすぎたのか、茶色を塗っているときに「もういやや、疲れた！」と投げ出しそうになってしまった。筆者が「一緒に塗ろうか」と誘い、一緒にクレヨンを持って塗り始めると「後もうちょっとや」とつぶやいた。そして最後まで塗ることができたが、終わってからも「疲れた」「もういいわ」と、言っていた。

6	1	3
4	2	9
8	5	7

1－5　ケイスケ
（感想）ばくれつのきもち

色を塗っているときも、アサヒと話をしていた。そのなかにコウキもはいろうとするのだが、ケイスケはアサヒだけと話をしたいらしく「うるさいなー」と言って、コウキと言い合いになった。朝とても寒かったので、「さむけパンチ！」の色を塗ったのだそうだ。寒い感じの色を塗ったら、すっきりするのだそうだ。



7	2	1
8	4	3
9	6	5

1－6
（感想）もえピー！

塗り終わってから、「もえピー」が気に入ったのか、何度も「もえぴー！」と大きな声で言っていた。塗り方も丁寧で、しっかり塗ることができた。アサヒとケイスケの話の輪の中に入りたかったのだが、ケイスケに「うるさい！」と言われて、コウキと話をしている。しかし、アサヒはしきりに本児にも話しかけていた。本児はそれに答えようとしているが、ケイスケには拒否されてしまった。自分の完成した色絵をみて、とてもうれしそうな表情を見せた。

1	2	3
6	5	8
4	7	9

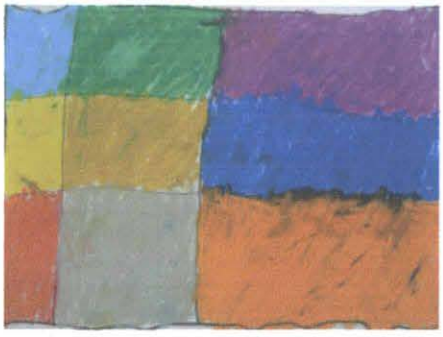
１－７
（感想）にゃごろんー。・・・・はっぱと木がもえて、水をジャーっとしてもえたきもち。

独特の世界を持っている子どもである。塗り終わった後、「猫のきもち」になってしまったそうだ。猫のきもちと、空手の気持ちになったので（空手は習っている）、とてもいい気持ちになったそうだ。そして、この日は朝がとても寒かったので、「水をかけられた気持ち」になってしまったそうだ。そして、「きょうは目がいたいからね、冷たい感じがする」と言っていた。

2	1	5
4	3	6
9	8	7

１－８
（感想）たのしい！

周りが様々な工夫をしているので、自分のまわりの友だちの絵を見て、描き始めた。いつもなら、自分が描き終わるのを待ってもらっているが、この日は時間をあまりかけずに塗った。色々な動物が出てきて、とても楽しい気分になったそうだ。



1	4	7
2	5	8
3	6	9

１－９　ユウタ
（感想）いいきもち

隣に座っている友だちと『色』の相談をしながら塗っていた。となりの友だちはユウタが話しかけると、それに丁寧に答えていた。
「次何色塗る？」と１－６に相談しながら決めているように見えるが、必ずしも１－６の言った色を使っているわけではなかった。

7	4	2
8	5	1
9	6	3

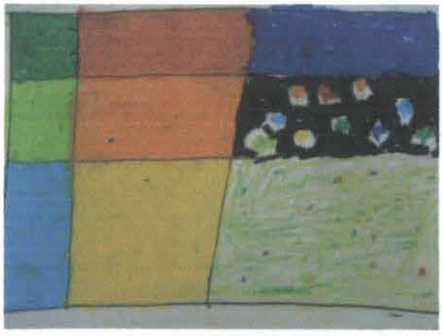
1－10
（感想）たのしいきもちになりました

「虹色描いていい？」と 3 色法のときも 4 色法のときも聞いてきた。今回も「虹色描いていい？」と筆者に聞いてきた。塗っているときはとても楽しそうである。塗り終わってからも、その明るい表情は変わらなかった。

1	4	7
2	5	8
3	6	9

1－11
（感想）たのしいいろをぬりました。

部屋のなかに学校を描いたり、おひさまを描いたりしていた。聞くと「学校大好き」なのだそうだ。



1	6	7
4	8	9
2	5	3

1－12
（感想）いいきもち

本児なりの工夫が見られた。いつもとなりの 1－11 の色絵を見ていたが、決して真似はしなかった。
この日は、初めに 9 色のクレヨンを机に並べてから塗り始めた。「9 色やから、9 つクレヨン出しといた」のだそうだ。その 9 つの色を使って、描いた。

3	2	1
4	6	8
5	7	9

1－13

（感想）たのしいきもちになりました。

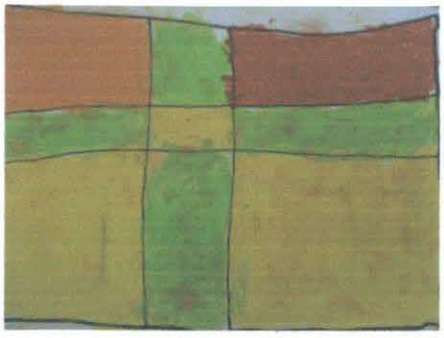
学校の中で筆者を見かけると、「今度はどんな絵本読んでくれる？」「色塗り、またしたいな」と声をかけてくれる。手をつないだり、体の一部を触ったりしながら話をしている。3色法のときも4色法のときも、もちろん6色法のときも、1つの部屋が塗れると、「どう？」と筆者に見て欲しいと声をかけるのだが、今回は「最後まで、できるまで見ないで」「最後に見せてあげる」と言って、最後まで見せてくれなかった。

7	8	9
5	2	3
1	4	6

1－14　ショウタ

（感想）べつに・・（と言いつつも、とても明るい顔をしている。表情が豊かになってきたように感じる）

3色法や4色法のときは、黒色、茶色、青色が中心で、他の色を使えなかったのが、9色になって明るい暖色系の色も使えるようになってきた。それに伴い、表情もとても明るくなってきた。そして、今まであまり自分の気持ちを話そうとしなかったのだが、「色をいっぱい使った」と完成した色絵を筆者のところに持ってきてくれた。



7	4	1
8	5	2
9	6	3

1－15　ケンタ

（感想）ぬれたからうれしい。

「ぼくの好きな色は黄緑か緑」と言って、いつも緑か黄緑のクレヨンを使っている。9つの部屋のうち、4つも黄緑に塗っているところを見ると、本当に緑や黄緑が好きな様である。随分早くぬれるようになってきたので、周りを見て歩く余裕も生まれてきた。塗っている最中も「先生、見てみて」「みてよ、ぼくの」とうれしそうに声をかけた。

「黄色塗るときは、星型作ってぬればいいんや」と星型を初めに描いてからその中を塗り、星が塗れると、周りを塗り始めた。同じ色で塗っているので、左の色絵には星型を確認できないが、ケンタ自身はどこに星があるのかわかっている。

1	2	3
4	5	6
7	8	9

1－16　リュウ

（感想）心があたたかくなってきた

「ぼく虹色大好きなん」「虹色描くとうれしくなってくる」と言って、今回も虹色を描いた。今までのように混色や重色は少なくなってきたので、とてもきれいに見えるらしく、（実際とてもきれいな絵になっている）とてもうれしそうであった。今回はあまりとなりの友だちとも話をしなくて集中して塗っていた。

1	4	7
2	5	8
3	6	9

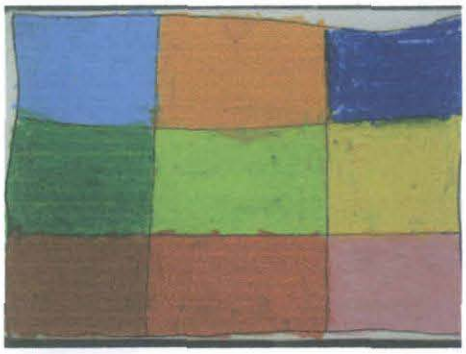
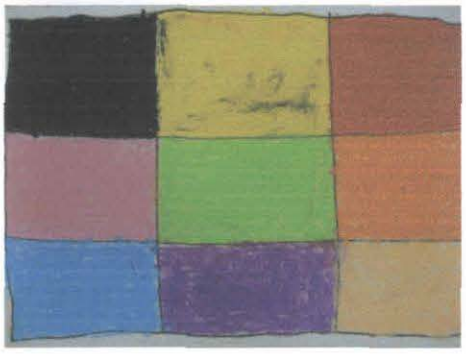
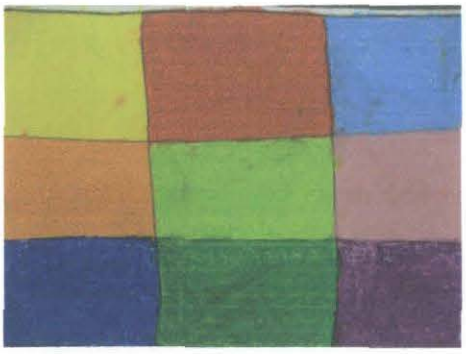
1－17

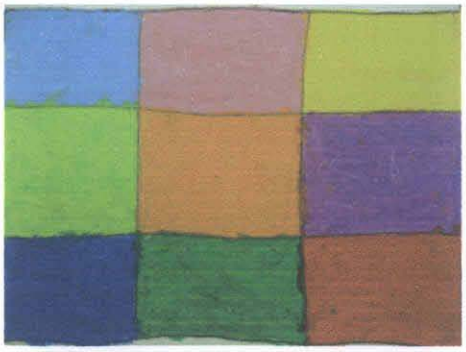
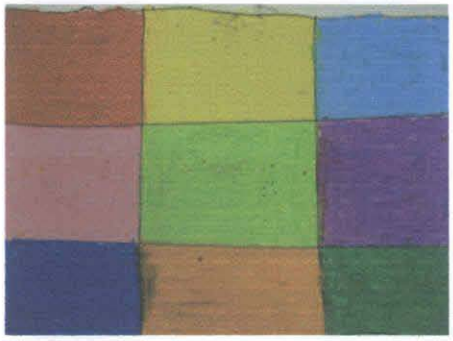
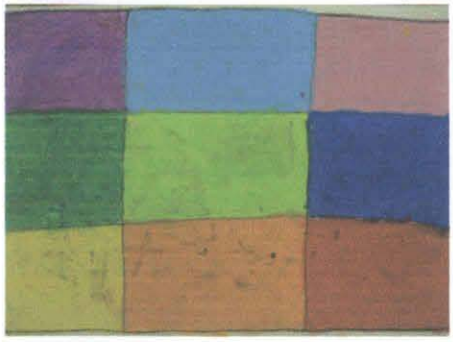
（感想）たのしいきもち

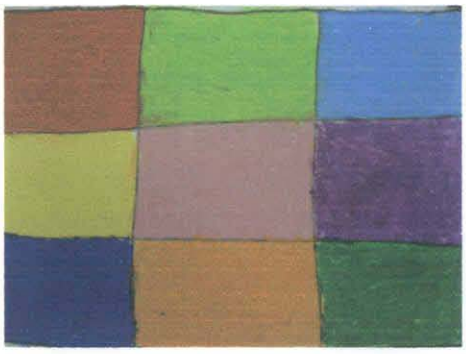
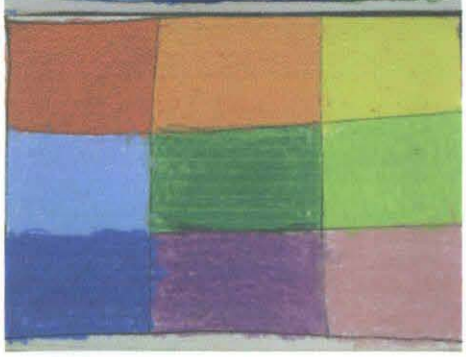
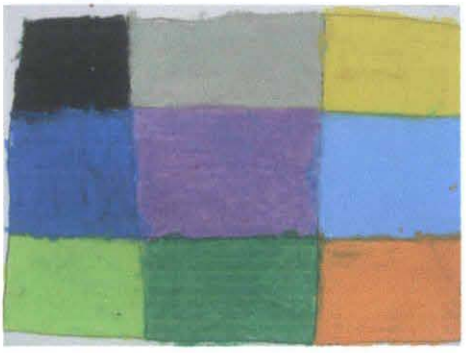
となりの 1－11 の様子をしきりに気にしていた。学校も 1－11 が描いたので本児も描いたようであった。よく似た絵を描いているが、決して同じではなかった。1－11 とお互いに色絵を見せ合っていた。

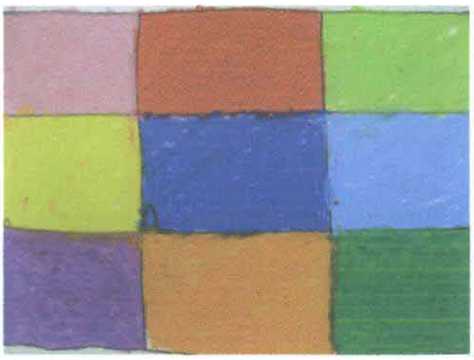
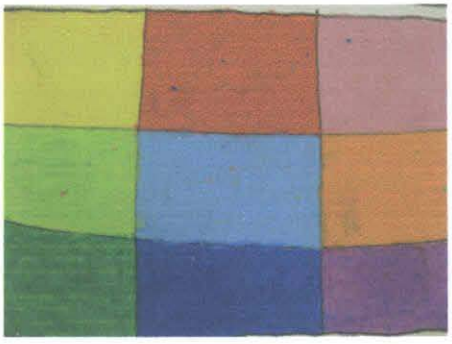
○B小学校2年生の9色法

2年生から6年生までの9色法の試行結果には、色を塗った順番の表が記載されていない。試行の初めの段階であったので、筆者に塗る順番に関して問題意識がなかった。よって、子どもたちの塗る順番を記録していない。

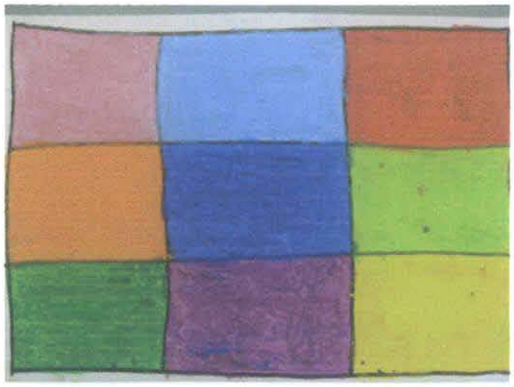
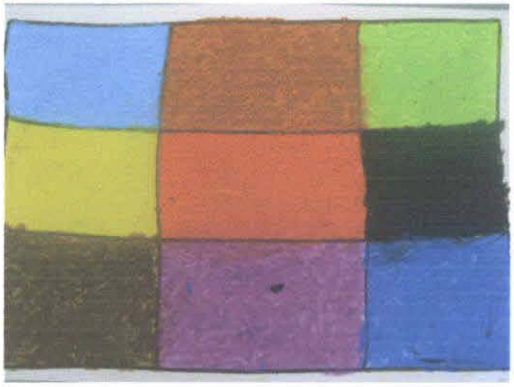
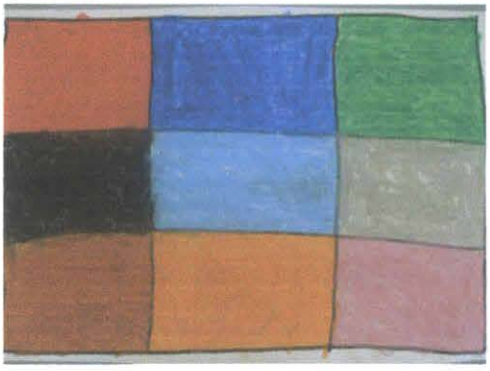
	2－1 （感想）とてもきれいだなと思いました。 塗り終わってからも、自分の席から離れずに、「塗り終えた！」という達成感に浸っているようにみえた。
	2－2 （感想）にじいろですごくきれいです。 一番初めに「先生、手伝って！」と声をかけてきた。しかし、「自分ひとりで」「ずるーっ！」という声に、「やっぱりいいわ」と言って、その後は一緒に塗ろうとは言わなくなってしまった。朝から腹痛を訴え、家の人に送ってもらってきていた。腹痛は訴えなかったが、教師とのかかわりを求めているように感じた。出来上がったものを見て、とてもうれしそうな顔を見せた。
	2－3 （感想）友だちと2ついっしょだったけど、好きな色がぬれてよかったです。 ピンクと緑を筆者と一緒に塗った。名前を書くときになって、友だちの名前を書いたり、自分のニックネームを書いたりしていた。筆者を自分の席の近くに引き止めたかったようであった。

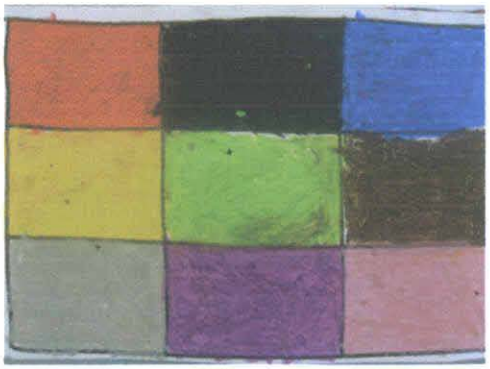
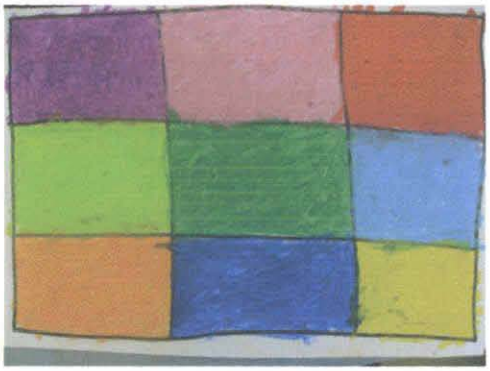
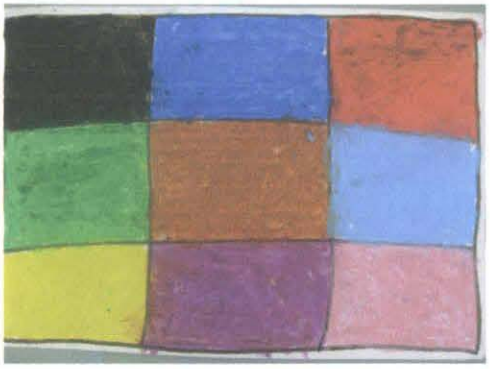
	２－４ （感想）じょうずにかけたなあと思いました。 時間はかかったが自分ひとりの力で塗った。 途中でまわりの様子を伺っているようなところもあったが、７色目から自分の絵に集中して色を塗っていた。全部の部屋を塗り終えると、「やった！」というような表情であった。
	２－５ （感想）きれいにかけてうれしい。よかったよ！！ １人でやると言って最後までがんばって塗った。自分の絵が完成して、ニコニコ顔を見せた。とても満足な顔をしていた。
	２－６ （感想）きれいにできたとおもいました。 一生懸命に塗っている。途中、「手伝って」と言った２－２に「ずるい！」と言った。「一人の力でないと、きっと後悔するよ」という友だちの言葉に、「後悔したくないもん！」と言って、最後まで自分ひとりの力で塗った。
	２－７ （感想）きれいだなとおもった。 クレヨンで、手が汚れるのが気になったようで、塗る前から手の汚れを気にしていた。はじめるまではトイレに行ったり教室からふらっと出て行ったり、集中できない様子であったが、塗り始めると一生懸命で集中していた。何も言わずに集中して塗っていた。友だちより随分早く、塗り上げてしまい、満足な様子が伺えた。達成感に浸っているような表情であった。

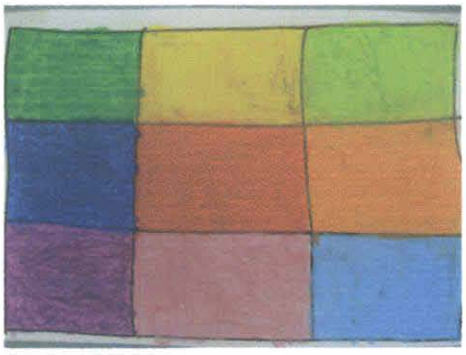
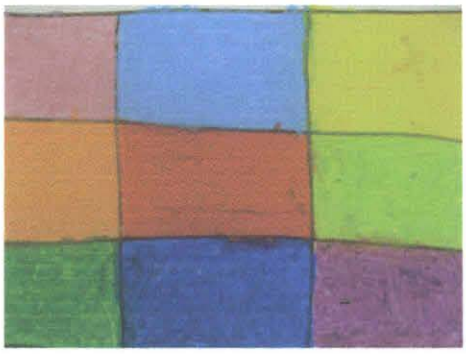
	２－８ （感想）きれいだなと思いました。すごい！！！ まわりの「手伝ってよ！」という声に対して、「自分ひとりで塗らないと後悔する！」「自分の力で描かないと自分の絵ではなくなる」と言っていた。だから手伝ってとは言わないし、手伝ってもらっているのを見ても、羨ましいとは思わないそうだ。
	２－９ （感想）とてもとてもきれいと思った。 まわりの様子も伺っているが、「自分はこの色」という気持ちで色を選んでいるように感じられた。
	2－10 （感想）色が上手にぬれてうれしかったです。 時間をかけてしっかり塗っていた。「手伝おうか？」と声をかけても「自分でやる」と言って、最後まで自分の一人の力で塗った。 クレヨンを動かしているときはとても楽しい表情をしていた。「どれにしようかな」と口に出してクレヨンを選んでいた。
	2－11 （感想）虹色（にみえて）がきれいに思った。 きれいに塗ることができた。とても楽しそうに塗っている。鼻歌が聞こえてきた。

	2−12　ユイナ （感想）とてもきれいだなと思った。 「この子、しゃべらないよ」と言われて、すぐに座ってしまった子どもである。ほとんど話もせずに黙黙と塗っていた。 「手伝ってよ」と言いたそうな表情を見せたが、筆者に声をかけられなかった。最後のオレンジ色は「一緒に塗ろうか」と筆者から声をかけ、一緒に塗った。初めのうちはまわりの友だちが言うことが気になって、集中できなかった。
	2−13 （感想）いろいろないろなのでおもしろいと思いました。 どの色も一生懸命塗っていた。色ムラがないように、気をつけていたらしく、次の色を塗り始めても、白いところを見つけると、クレヨンを代えて色むらがないようにしていた。

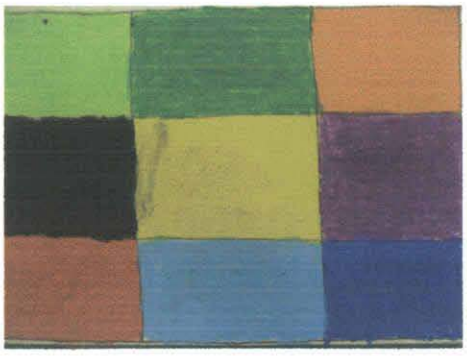
○B小学校３年生の９色法

	３－１ （感想）色をぬっていたら、てがいたくなりました。手がよごれてたいへんでした。上手にぬれてよかったです。もっとぬりたかったです。 友だちとやり取りしながら色を選んでいた。色を塗っているときは楽しそうであった。
	３－２ （感想）きれいにぬれたと思います。塗るのがたのしかったです。暗い色ばかり塗っていました。手がよごれてしまいました。 クレヨンを選ぶのにとても楽しそうな表情で選んでいた。「暗い色ばかり塗ってしまった」と言っていたが、表情は明るかった。
	３－３ （感想）きれいにぬれました。手がよごれました。 初めは、友だちの色絵を見ながら塗っていた。２色目からも友だちが塗り始めたのを見て、塗りだした。

	３－４ （感想）手がいたい 手がよごれた ほっとした。きれいだなと思った。 「なんかしらんけどさ、ほっとした気分になってた。なんかわからんけど」自分がそういう気分になるとは想像もしていなかったようで、ほっとした自分にびっくりしているようであった。
	３－５ （感想）ぬったときはほっとしました。 「ねえ、何色塗っている？」という友だちへの確認の言葉かけが多かった。クレヨンを選ぶたびに「これでいい？」と筆者に確認していた。「いいよ」と筆者が言うと安心したようにまた塗りだした。
	３－６ （感想）１ばんめの色は何色を塗るのか、まよわなかったけど、2，３，４，５，６，７，８，９番目は、ちょっとまよった。楽しかった。ぼくってこんな色が好きなんだなと思った。 塗色後「なんかしらんけどほっとした」と言っていた。さらに続けて、「真ん中（中心）に好きな色塗ったら、いい感じになるよな」と言っていた。真ん中を意識させる発言を筆者はしていないのだが、“中心”を意識した発言をしていた。

	３－７ 感想を書くことができなかったので、筆者が感想を聞いた。すると「きれいやな・・・」とつぶやき、その後しばらく自分の描いた色絵に見入っていた。 やり方がよくわからなくて、まわりにいる友だちに教えてもらったり、友だちの塗っているのを見たりして理解していったようだ。 友だちが色の話をしているのを聞いて、「きれいなピンクがすきなん」と自分のことを少しずつ話し出した。
	３－８ （感想）いろんな色で気持ちが落ち着いてほっとしました。上手にぬれてよかったです。 私ってこんな色が好きだったんだと思いました。 ほっとした自分にびっくりしているようであった。全体を眺めながら、「こんな色選んだんや。びっくりやなあ。私が選んだんじゃないみたい」と選んだ色にもびっくりした様子を見せていた。ほっとしたと同時に「楽しかった！」とニコニコした顔を見せた。

○4年生の9色法



4－1

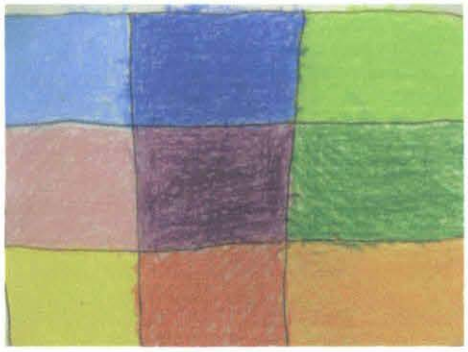
2	9	5
7	1	6
4	8	3

この表の数字は塗った順番を表す。以下同じ。

（感想）

真っ白からカラフルになった。おもしろい。

手の汚れも気になるところであるが、一生懸命に塗っている。1色ずつぬれる度に「これでいい？」「きれい？」と聞いてくる。「いいよ。」「きれいだね」と返すと、とてもうれしそうである。緊張が次第にとれていくのがよくわかる。



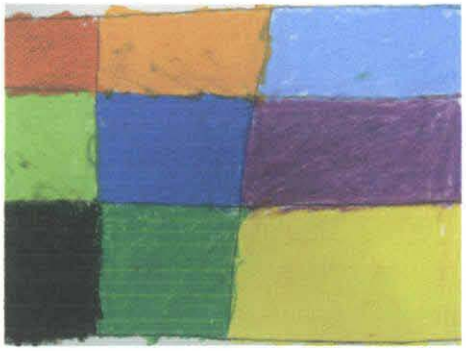
4－2

1	2	3
7	4	8
5	9	6

（感想）

始めはあまりこくぬりたくなかったけど、今はおもしろい。

力をいれずにサーっと塗っている感じ。もっと色ムラがないように塗ってみようと声をかけると、「濃く塗りたくない。」「好きな色（のクレヨン）やで、折れたらいややもん。」仲のよい友だちの「ピンク入れる？」の声に、「入れるよ。赤も入れるよ」「先生、何色好き？」と筆者に聞く。「青」と答えると、「青、入っている」と確認。筆者の「青」という声を聞いて、まわりの子どもたちも自分の色絵に青が入っているか確認している。

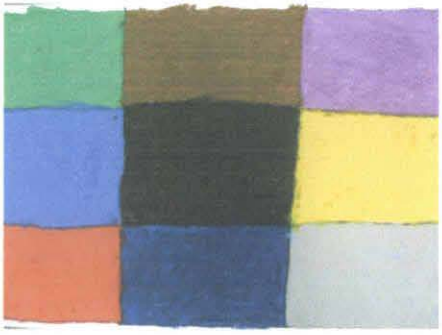


4－3

9	8	7
6	1	2
5	4	3

（感想）塗りつぶすのはいややったけど、塗りつぶすのも意外におもしろい。

「どんな色塗っている？」とまわりの友だちのことが気になる。しかし、塗りすすめていくと、友だちに声をかけることも少なくなり、自分の色絵に集中しているようであった。



4－4

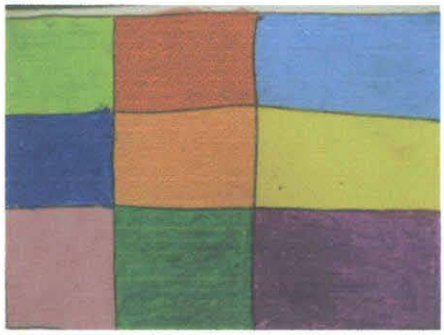
5	9	6
8	1	7
4	2	3

（感想）最初は白だったけど、自分の好きな色を集めて塗ると、なにか楽しい気分

「みせあいっこしよう。」と、まわりの友だちに声をかけているが、まわりの友だちは色塗りに集中していたので、相手にされなかった。しかし、ふてくされるわけでもなく、次第に自分の絵に集中していった。

「明るい色きらいやもん。」「おれさま、うまい！図工の神さま、おれ。」と言いながら、自分の好きな色を塗っている。「青シリーズ、男色や。」と青系統の色を中心に塗っている。でも「1年のとき S 先生と男色とか女色ってないって勉強したやん」と周りから言われて、「そうやった！」と小さくつぶやく。「クレヨンの色は重ねると、汚くなるんやで。だからおれは重ねやん（かさ

ねない)。」普段から言葉遣いが荒く、話だけを聞いていると、4年生とは思えないような言動が見られるが、塗り終わってから手を洗いに行くときに「おてて洗ってくるわ」と言って教室を出て行った。自分でも気がつかないうちに幼い頃にもどっているようである。

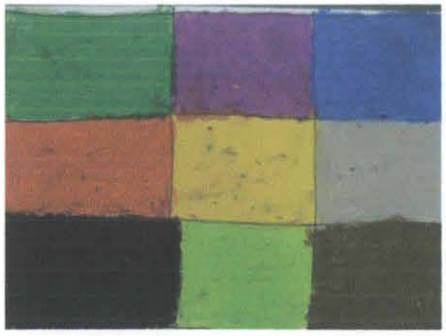


4－5

1	8	2
7	5	3
4	9	6

（感想）久しぶりにクレヨンを使って色を塗って楽しかった。塗る前は白い、線しかない紙だったけど、色を塗ってすごいカラフルになったと思う。

一心に色を塗っている。ほとんどしゃべらない。塗り終わった後、自分の色絵を眺めてうれしそうな表情である。「なんでいい気分になるの？」と明るい表情で聞く。



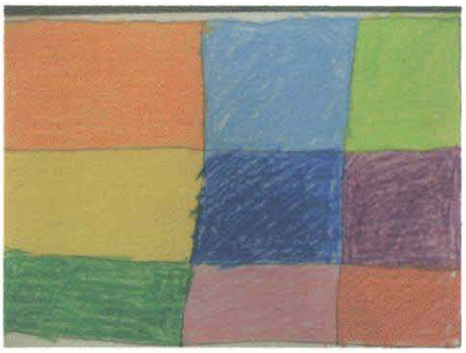
4－6

6	4	2
5	3	7
1	8	9

（感想）手がすごい色になった。気持ち悪い。
変な色になった。
（提出時に言葉として述べた感想）なんかすっきりしたような感じがする

「かすだらけになった！」と気になるようである。「黄色を選んだら明るくなった。」「紫は、青と赤を混ぜたらいい。」色に関係する話をし

ている。クレヨンの塗りかすが気になって最後はなかなか色を塗ることに集中できなかったようであるが、塗り終わった後、明るい表情で「なんかスッキリした」と言っている

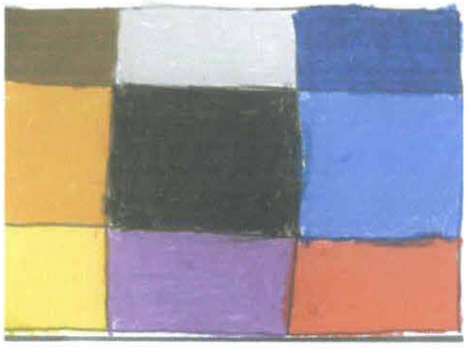


4－7

1	3	4
2	6	5
7	8	9

（感想）色はこくぬれなかったけど、楽しかった。

「ある色全部一緒」「赤残っている。ピンクも入れる？」と仲のよい友だちに聞いている。
普段から一緒にいる友だちと同じ色を選んだことにうれしく思っている様子がよくわかる。あまり強く塗ろうとしなかったけれど、自分なりに強く力を入れて塗ったようである。



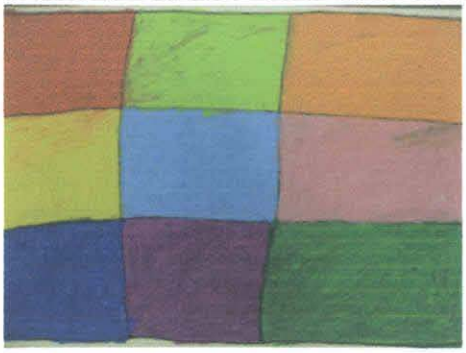
4－8

4	2	3
6	1	5
9	7	8

（感想）闇の中に入っている気持ち。すごく暗い感じがする。（提出時に言葉として述べた）でも赤と黄色とオレンジが入ってぱっと明るくなった感じがする。闇からはでになったわ。闇みたいで怖い感じがする。明るい色は好きじゃない。闇みたい、いつまでも。情熱の色、赤。闇から派手になった。あ、またやみ復活。変身した。

「最後に侵略して終わった」と、最後は明るい色を選んでいる。明るい色を選んだので、「闇」から「派手」になっていったようである。紫を

塗る前に、「次（の色）きめとこ」と言って、クレヨンの箱を覗き込んでいた。

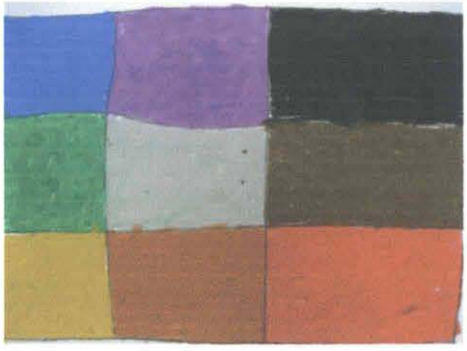


４－９

4	5	3
6	1	8
9	2	7

（感想）はじめは真っ白だったけど、ぬったあとはきれいになった。

「最後のバッターは」とつぶやく。そしてやっぱり青にしておくわ」と９色目は青色で塗った。出来上がった自分の色絵を、ジーっとみている。そして、高く掲げてまたジーっとみている。自分の塗った絵に酔いしれている感じがする。そのあと、「みてみてみて」とうれしそうに絵をみせにきた。とてもきれいに塗ることができて自信を取り戻したように見える。

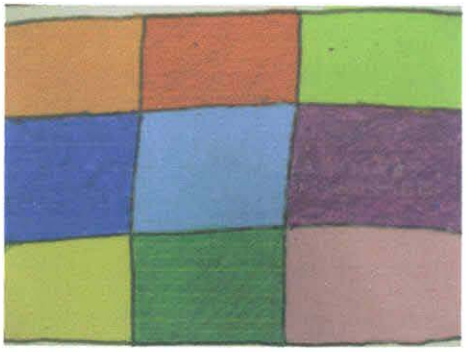


４－１０

1	2	3
4	5	6
9	7	8

（感想）きれいな色ですごかったです。きれいですごかったです。

部屋を作るときに、線がゆがんでしまったのを気にしていたようだが、「大丈夫、これもおもしろいよ」というと、ほっとしたように自分の席にもどっていった。

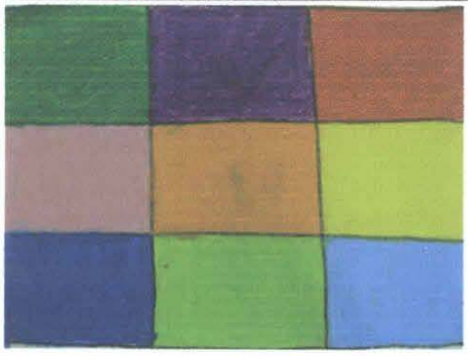


4－11

5	6	2
9	1	8
3	7	4

（感想）一番最初に色を塗るときはどこにしようか迷ったけど、2回目からはどんどんすぐに決まった。カラフルになったからうれしかった。

黙々と一生懸命に塗っている。ほとんど話をしない。小さい頃にもどっているような様子も伺える。

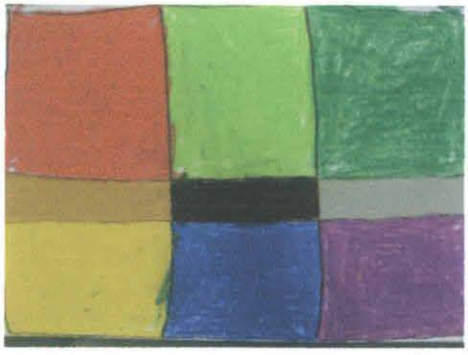


4－12

1	2	3
4	5	6
7	8	9

（感想）白いところなしにぬると、とっても楽しかったです。またやってみたいです。

色ムラのないように塗るのが楽しくなってきたようである。出来上がってからも、塗りたりないところを塗りなおしている。

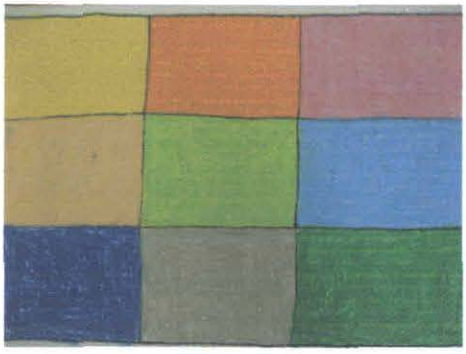


4－13

8	7	6
1	4	2
9	5	3

（感想）楽しい気分。ぬっていると楽しくなる気分。

枠を描いて、9つの部屋を作ったときに、9つの部屋の大きさにかなりの違いがあったので、「こんなになった」とみんなに見せていた。しかし、塗りだしてからは、大きさに関する発言はなく、気にならないようである。

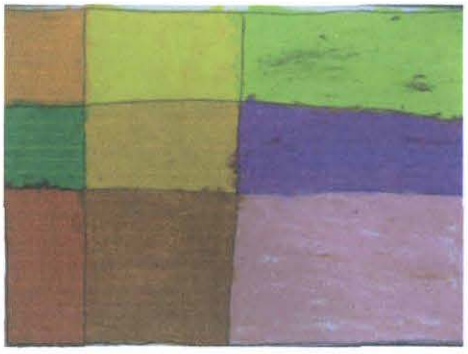


4－14　カンナ

1	2	3
4	5	6
7	8	9

（感想）好きな色からじゅんじゅんに塗っていったので、最後は9位の色でした。9位の色も1位の色も関係なく好きな色なので、あまり順位は関係ありませんでした。塗った前と塗った後を比べると紙が大変身したと思います！

「もう7色目ぬれた、だって好きな色やもん」。普段、よほどのことがない限り、話しかけてこないが、この日はだんだん表情が明るくなり、「好きな色だから（早く）塗れる」と、うれしそうに話しかけてくる。

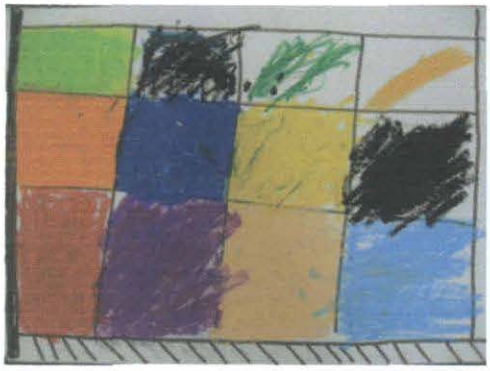


4－15　アサキ

3	4	6
2	1	8
5	7	9

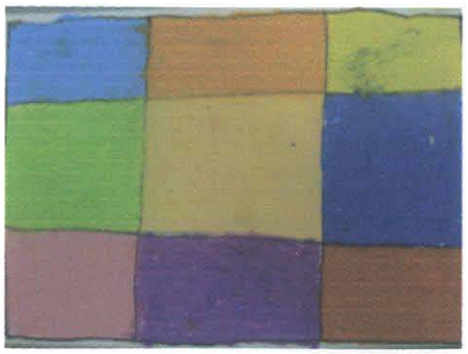
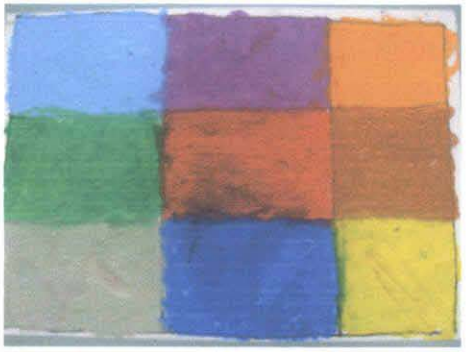
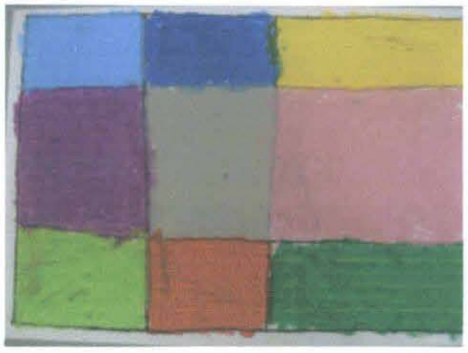
（感想）色塗りして楽しかったです。白かったのに、色塗りしてみて気持ちいいです。

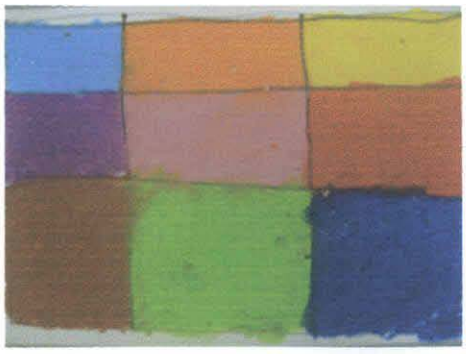
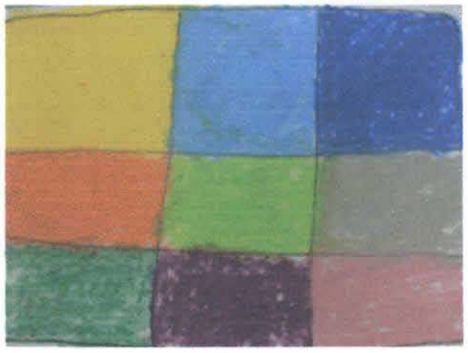
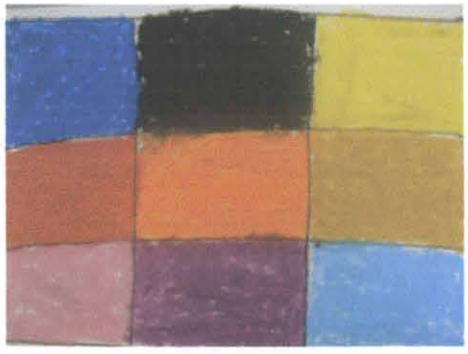
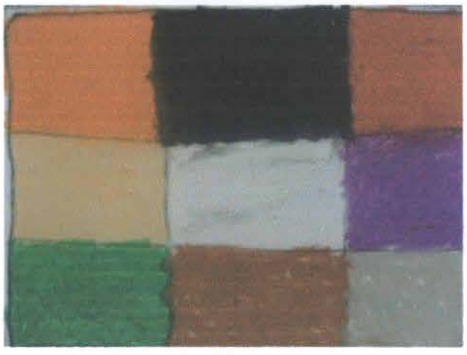
鼻歌を歌いながら塗っている。普段、何をするにも力が入りすぎて、なかなかほっとすることができないのであるが、歌が出るところを見ると、少

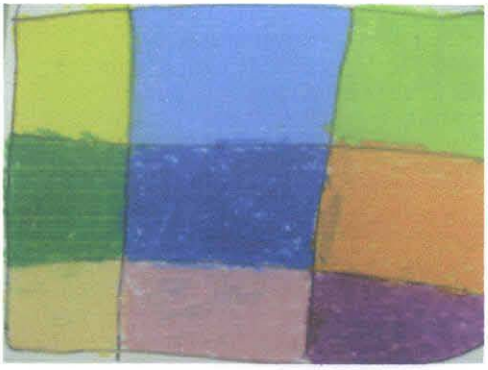
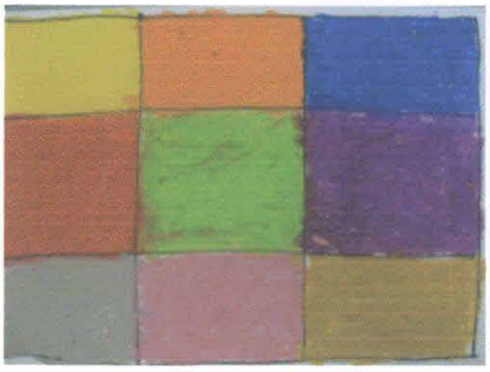
<table>
<tr><td></td><td>し力が抜けているかと思われる。塗った後、とても明るい顔になったのが印象的であった。「えーもうこんな時間。」と一生懸命やっていたので時間が過ぎるのがとても早く感じたようである。</td></tr>
<tr><td>  </td><td>４－１６　リュウヤ
<table><tr><td>1</td><td>10</td><td>11</td><td>12</td></tr><tr><td>2</td><td>3</td><td>8</td><td>9</td></tr><tr><td>7</td><td>6</td><td>4</td><td>5</td></tr></table>（感想）いやな気分・・・

リュウヤは、初めの枠を描くところで、初めの線がまっすぐ描けなかったので、自分で何とか折り合いをつけようと、線を太くしたり、紙を折ってまっすぐに線が引けるようにしたり試みたが、結局折り合いをつけることができなかった。9つの部屋を作るところを12の部屋になってしまい、色を塗ることに気持ちが行かなかった。なんとか自分の気持ちを色塗りに持っていこうとしたのだが、初めの線がまっすぐでないことが気になってしまった。色の塗り方にはエネルギーが感じられる。自分の思うようにできなかったときの折り合いのつけ方が今後の課題でもある。</td></tr>
</table>

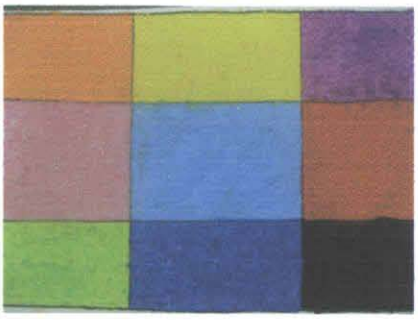
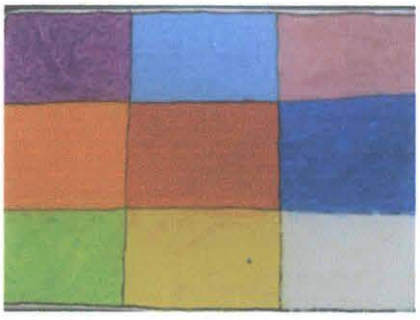
○5年生の9色法

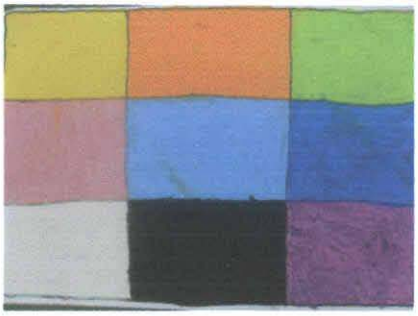
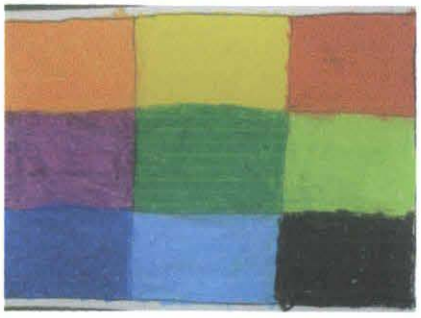
	5－1 （感想）すごく明るいと思う。 ほとんど自分の意見を言うことがなく、「○○さんと同じです」という言い方をする。なかなか自分の主張を出せないが、色を塗っているときは、ほとんど友だちの絵を見ないで、色を選ぶのも「自分で選ぶ」という気持ちが伝わってきた。
	5－2 （感想）きれいだと思った 「自分の好きな色選ぶのって難しくない？」となかなか自分の好きな色を選べなかったが、塗っているうちに「こんな色塗ってるやん」「びっくりするなあ」と言いながら、楽しい雰囲気で塗ることができた。
	5－3 （感想）明るいときも少し暗いときもある 「わあ、クレヨンなんて久しぶりや」とクレヨンを使うのがとても楽しみな様子であった。友だちと話しながら塗っているが、時々「先生は野球のチームどこ好き？」「先生はこの色好き？」と野球のチームカラーの話から自分の好きな色、周りにいる人の好きな色への興味に移っていたようである。

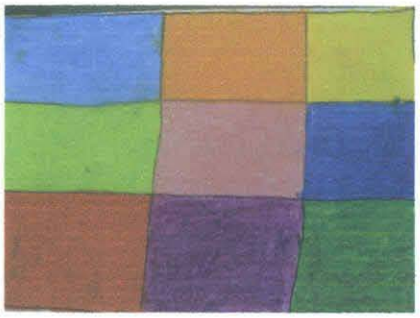
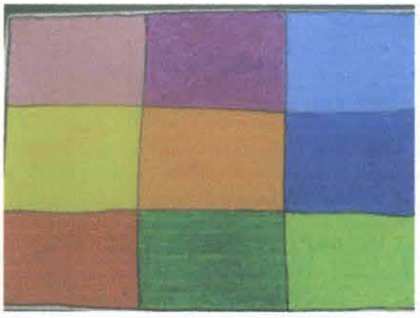
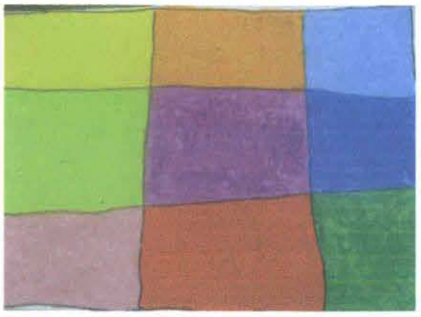
	５－４ （感想）明るいところもあれば、暗いところもある 初め、クレヨンを使うことに抵抗していたが、使い始めると「おーっ！こんなんやったなあ」と小さい頃を思い出しているようであった。
	５－５ （感想）ちょっと暗いけど、だいぶ明るい。 友だちとの関わり方で、悩むことも多い。「ちょっと暗いけどだいぶ明るい」というのは、本児の気持ちを表しているように感じた。塗っているときは、集中して塗っていたように感じる。
	５－６ （感想）好きないろだから塗ってみた 塗っているときは、かなり集中していた。はじめに色を選ぶのに時間がかかっていたが、一色塗ってしまうと、周りの状況はほとんど気にならないようであった。
	５－７ （感想）野球の色だから、塗った ３色目の赤色を塗ったところで、「もう野球の色しか思いつかんから、これしか描けやん」と言っていたが、「自分の好きな色選んだらいいんじゃない？」と声をかけると、「そうやなあ・・・」と言って、クレヨンの箱を見ていた。

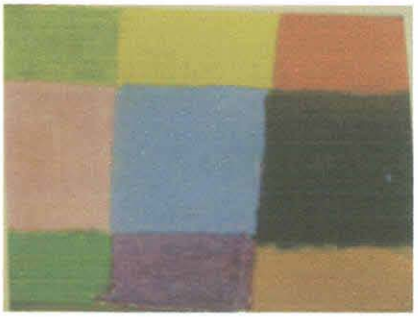
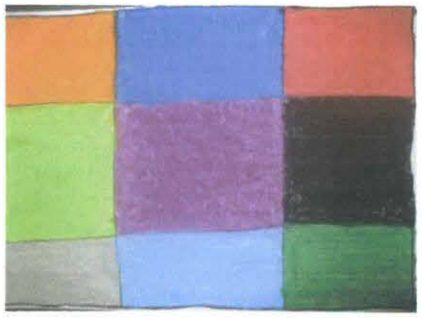
	５－８ （感想）最初は明るく、だんだん暗くなってきている感じがする 正義感の強い子どもであるが、９人の力関係の中で、その正義感を出せないで過ごしている。しかし、塗っているときはとても楽しそうである。
	５－９ （感想）明るくなったり暗くなったりして交互だった。 初めはまわりにあわせて「野球の色や！」と言っていたが、そのうち、「好きな色でいいやんな？」と確認してきた。「いいよ、自分の好きな色で塗るだけ。」というと、「そんじゃ、ぼくはこの色やな。ぼくらしい色やな」と言って、楽しそうに塗っていた。

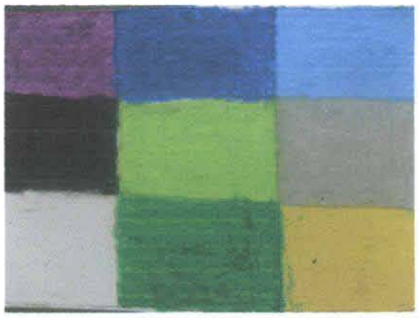
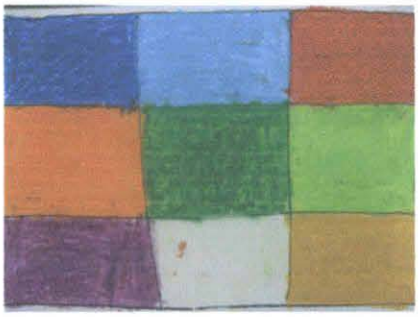
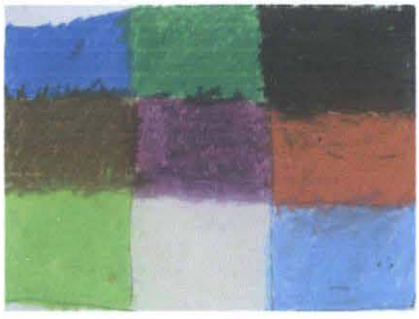
○6年生の9色法

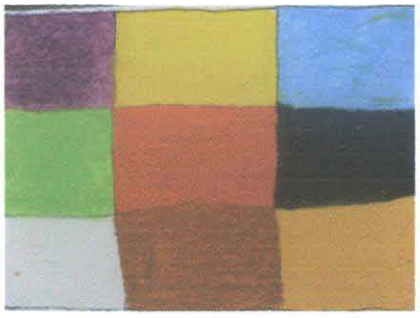
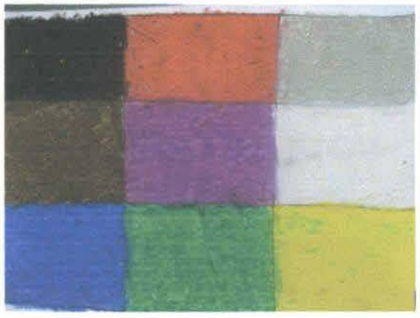
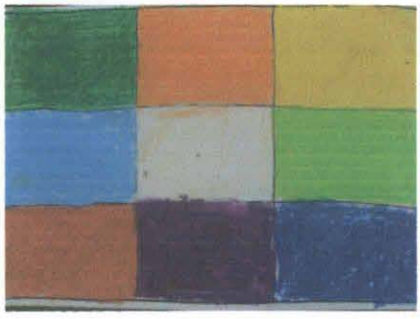
	6－1　ナミ（特別支援学級児童） （感想）　全部明るい色やった！！（ひとつひとつで見たときは明るくないけれど、全体を見ると明るく感じる） はじめは、特別支援学級の教室でした1回目と同じ色を塗らなければならない思ったらしく、なかなか始められなかったが、「1回目と違う色でいいよ」「1回目と同じになってもならなくても、ナミさんの絵にはかわりないよ」と声をかけるとあんしんして色を塗り始めることができた。
	6－2 （感想）　はじめは、久しぶりにクレヨンを使って楽しかった。途中からちょっとめんどくさくなってきたけど、でもやっぱり楽しかった。色を決めるのは意外とすらすら決めれた。できたときは、やっと終わった、次何するんやろうと思った。 友だちとおしゃべりするのが大好きな彼女であるが、このときは友だちともほとんど話をせずに、黙々と塗っていた。塗り終わってからは、友だちとお互いに絵を見合いながら「こんな色塗っている」「同じ色も多いなあ」と感想を述べ合っていた。
	6－3 （感想）はじめは楽しくてきれいにぬっていた。けど、途中からめんどくさくなってきた。2段目くらいまでは、迷わないで決めれたけど、3段目は色を決めるのにまよった。できたときは、やっとおわった！！とおもった。 クレヨンを持っているか聞いたときに「そんなんもってるわけないやん」と自分がクレヨンを使うことそのものが考えられない様子であったが、一旦クレ

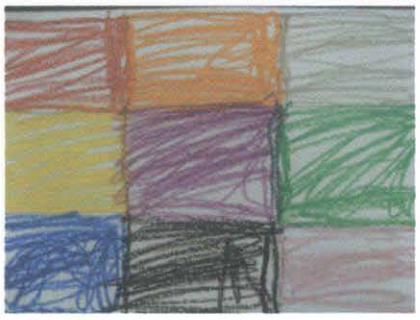
	ヨンを持って塗り始めると「結構楽しいなあ」と筆者に声をかけてきた。
	6－4 （感想）　最初らへんは楽しかったけど、途中からめんどくさくなってきた。何色を塗るのかまよった。 こんなにもやらなあかんの？めんどーとおもった。できたら、やっと終わったぞ。やったーと思った。 お互いに感想を言い合っていた仲間の一人である。クレヨンに対して、あまり抵抗はないように見えたが、塗っているときに汚れる手を気にしたり、友だちに「何色塗っている？」と聞いたりしていた。友達の様子が気になる様子であった。
	6－5 （感想）ぬっているときはどんな色にしようかナーと思いながら、たのしくぬった。 塗る前はクレヨンでぬるの、いやだなあと思っていた。できあがったら、クレヨンでもこんなに綺麗にぬれるんだと思った。 「クレヨンを使う」ということを説明し終わっても「本当に使うの」「クレヨンでないとあかんの？」と、クレヨンを使うことに抵抗があるようであった。しかし、塗り終わると「きれい」「こんなにきれいにぬれるんや」と自分でもびっくりしているようであった。
	6－6 （感想）（はじめは）えーっ、めんどくさ！9つも！早く終わらせようと思った。 んーっと好きな色はこれとこれで・・・・あーまだこんなにある！ 終わった。めっちゃざつ！みんなのすご！！ 友だちの絵がとてもきれいに塗れているので、と

	てもびっくりしているようであった。「終わった」と言った後も、もう一度きれいに塗りなおしていた。友だちの絵と自分の絵を比べて、自分の絵は雑に塗っているように見えたらしく（実際にはそんなに見劣りするものではなかったが）きれいに塗りなおして完成させた。
	６－７ （感想）　１マス目をぬっているときは、らくらくだったけど、最後のほうはめんどくさくなってきた。最初、久しぶりにクレヨンを使ったので、「クレヨンってこんなんだったんだなー」と思った。 小さい頃を思い出しているような発言が多く見られた。「小さい時は、いっぱい色使ってた」「なんにでも絵描いてたように感じる。ちょっとしか覚えていないけど」と小さい頃を思い出している。
	６－８ （感想）めんどうだな・・・９色もぬんの一っと思った。やった後は、意外におもしろかった。でもしんどかった。 クレヨンを持っていたが、自分が使うことは予想していなかったようである。この九色法をした後に、ポスターを描いたが、そのときには「クレヨンを使って、色塗ってもいい？」と、クレヨンを使ったことで、自分の絵の彩色の仕方に、絵の具だけでなく、色々な彩色の仕方があることを思い出したようである。
	６－９ （感想）ぬっているときは楽しかった。塗る前は自分の好きな色があまりわからなかったけど、ぬってから納得した。できあがったときはとてもうれしかった。きれいだった。 「納得した」ということばが、自分を振り返ってみ

	ていることなのであろうか。「自分の好きな色ってよくわからん」と言っていたが、塗り始めると発言とは違って、すぐに色を選んでいるように見えた。自信がない様で、周りの友だちの様子をよく見ている。が、3色目、4色目になると、周りもあまり見ることなく塗っていた。
	６－１０ （感想）　やる前はめんどくせー 　やった後、やっぱりめんどー。 「めんどうだ」と言いつつも、実際には、自分が言うほど面倒に思っていないように見受けられる。周りの様子が気になり、自分の塗った色と比べているような感じである。
	６－１１ （感想）　塗る前はめんどくさそうだったけど、塗り始めると、色を選んだり色を塗るのがおもしろくなってきた。ぬりおわると、達成感がありうれしかった。 色を塗るのに「クレヨンを使う」と言うと、「クレヨンって、低学年じゃあるまいし」と言っていたが、塗り終わってみると、「達成感」を感じている。友だちのを見るということもなく、一生懸命に塗っていた。塗り終わって自分の絵を眺めて、とてもニコニコしている。
	６－１２ （感想）　いろんな色がぬれてよかった。めんどくさいけど、ストレス解消 塗りながら、「おりゃーっ」「えい！」と声をかけながら塗っている。塗り終えた表情は、とてもすっきりしているように見えた。「とてもきれいに塗っているね」と声をかけるとピースサインを出しながら、にこにこしている。

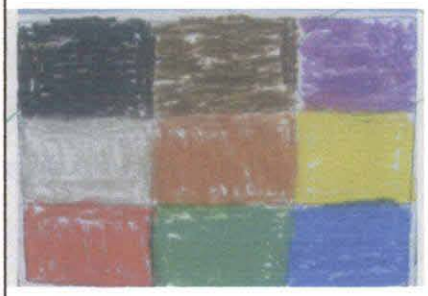
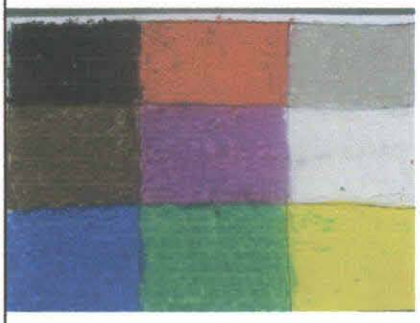
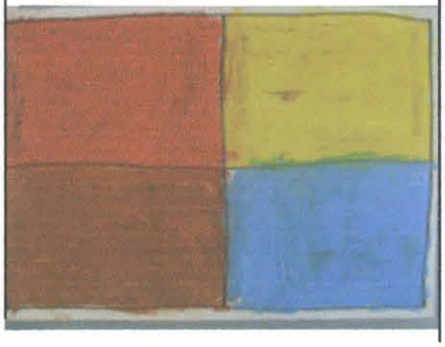
	６－１３ （感想）　ふつう。変わりなし。めんどかった。 色は適当に選んだ。 5年生の最後（3月）に「夜眠れない」と訴え、神経科に通っている。6年生になってから「情緒障害」と診断された。精神安定剤を服用中。小さい頃からチックがあり、5年生のときから、ひどくなってきている。授業の始めは、とても険しい顔をして始めたが（初めてやることややり方をリハーサルできる時間がないときはとくに険しくなる。）このときは、塗り始めてしばらくして「きれいに塗っているね」と声をかけると、にこにこして表情が柔らかくなり始めた。終わる頃には、安定しているときの顔に戻っていた。
	６－１４ （感想）いい色だった。 塗り終わってから「見てみてぼくの」とうれしそうに見せにきた。見せにきたときは、充実感というか、満足感というか、とても満ち足りているような表情をしてきた。母方の祖父が画家で、長期の休みのときは遊びに行き、色々な画材を使って絵を描いたり工作をしたりしているようである。クレヨンを使うことには、周りの子どもたちより抵抗は少ないと思われる。
	６－１５コウ（特別支援学級児童） （感想）　前より違っていた。不思議だと思った。 「前と同じになんて、覚えてないし」と、困惑した表情を見せていたが、「前の絵と違って当然。でも同じところもあるかもしれないよ」というと、「そうか、前と違っていいんやったら、できるわ」と言って、クレヨンを動かし始めた。

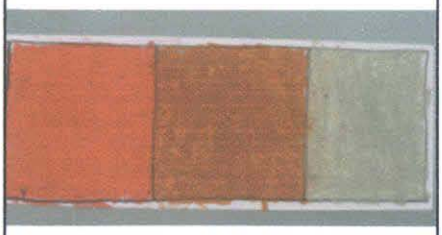
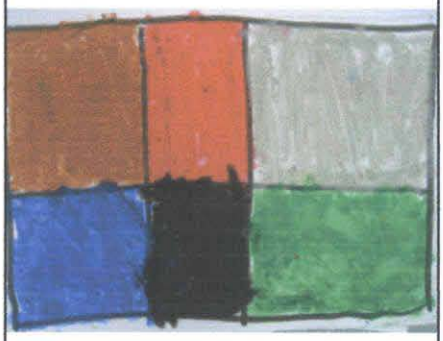
	６－１６ （感想）　おりゃー、手が疲れる。できたー。みんなおそい！（自分の出来上がりを見て）案外男っぽい？かも・・ 周りの子どもたちよりはやく仕上げてしまった。ほとんど周りの様子を伺うことなく、塗っていた。塗り終えてから、周りを見るとほとんどの友だちが塗り終えていなかった。そのときの気持ちが「みんなおそい！」なのである。自分の選んだ色から、自分の性格を考えてみたようである。
	６－１７ （感想）　手についた。やっぱめんどいなあ。できた！ ADHD の診断を受けている。普段はこだわりが強く、ひとつのものに固執すると集団で行動をとりにくくなる傾向がある。また、時間内に課題を終わらせるのも苦手である。授業中は、常に１対１のかかわりを求めてくる。特に図工の時間は１対１のかかわりが多くなる。図工の作品などは独創的である。作業が遅いので、「不器用」と周りは見るが、器用にはさみをつかい、細かい作業を根気よくすることも多い。今回は、時間内に終わったこと、自分の好きな色を選んだことなど、満足することが多いようで、とてもいい表情をしている。色塗りをしている間、落ち着いていて、全く目立たなかった。塗色後「おれもやればできるんさ！（やればできるのだ）」と筆者に言いにきた。
	６－１８ （感想）　「次に何色塗ろうかな」という気持ちが出てきた。「えーそんな好きな色なんて深く考えたことあんまりないで、どうしよー」と少しあせった。終わって、「やっとできた。よかった」と思った。

	塗りながら、「小さい時のこと、思い出すなあ」と言い始めた。「小さい時から好きな色ってあんまり考えたことないからわからんわ」「好きな色って、どんな色が好きやったんかな」「小さい時にやってたら楽しかったやろな」と、今の自分のことと小さい時の自分のことを交互に話をしているように感じた。本児の小さい時の話を聞いて、同じ机で色を塗っていた友だちも小さい時の話をし始めた。お互いに小さい時の話をして聞きあうことで、「へえ、そうやったんや」「小さい頃って覚えているようで、覚えていないようで、よくわからんけどな」と小さい頃の話をして、楽しそうである。
	６－１９マサ（特別支援学級児童） （感想）ぬっていておもしろかった。 塗る色も黙々と自分で選んでいた。普段、6年生と一緒に図工室に入れない。しかし、今回は、廊下側の窓を開けて、廊下から教室の中を見るという格好で、この 9 色法に参加した。図工の時間が終わるころには、自然に教室に入り、みんなと同じ課題に取り組んだ。一つ一つの塗りがたりないので、後日特別支援学級教室での学習で、一緒に塗り直した。「一緒に塗ってもいい？」と聞いておいて、筆者と一緒に塗った。はじめは、筆者の手が動くとマサの手が止まっていたが、「一緒に動かしてみようか」と誘うと、同じ手の動きをした。筆者が横に塗るとマサも横に塗り、縦に塗ると縦に塗った。全色を塗り終わる頃には、筆者は心が休まるような感じを受けた。

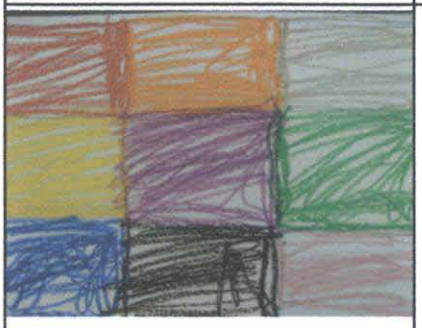
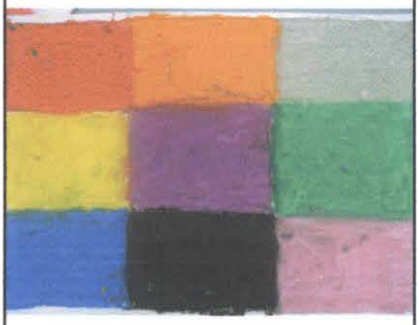
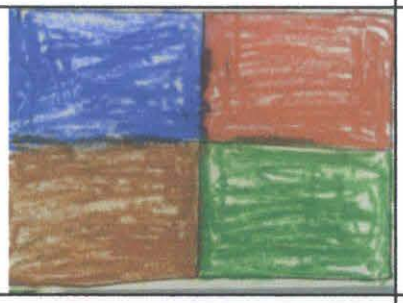
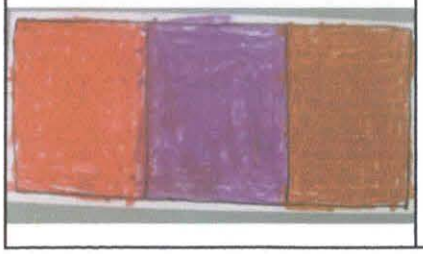
○特別支援学級　３・４・６・９色法

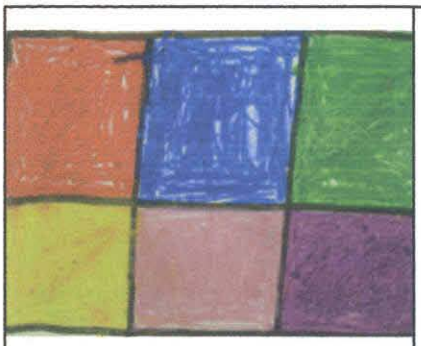
【コウ】

	コウの初めての９色法である。 黒色から塗り始めた。３色目から「もう次々に塗っていっていい？」と要領を得たためか、時間をかけないでひとつの部屋を塗ることができるようになってきた。ナミの「９色の競争」の話もほとんど耳に入っていない様子で、集中して塗っていた
	２回目は、他の６年生といっしょに、９色法を実施した。１回目とは色も塗り方もまったく違った。「好きな色を選ぶ」のに対して、まったく違う色から塗っていったので「違う色選んでる！」と自分の選んだ色にびっくりしている様子であった。２回目ということもあり、色ムラも少なくなった。
	３回目は特別支援学級の教室の３人で、B5版の画用紙の半分の大きさの画用紙を使って実施した。この日は「自分の気分を色で表すとどんな色になるかな」と言って、色を選んだ。週末であったので、疲れている様子が伺えた。しかし、塗りあがった色絵を見て、「ちょっと明るくなったような感じがする」「元気になってきたかな」と自分の心の様子を表現していた。
	特別支援学級の教室で実施。「今日は４色塗ろうか」と声をかけた。「簡単や！」と嬉しそうである。 ９色法を３回やっているので、「自分の気分がいつも同じ気分のままいるわけではない」「自分がいつも同じ色を選ぶわけではない」ということがわかってきている。この日は自分の選んだ色にびっくりするわ

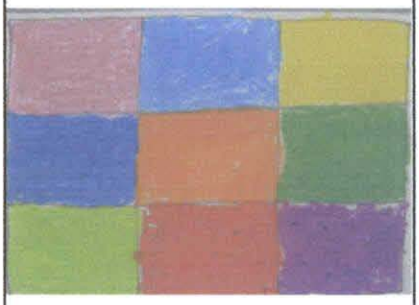
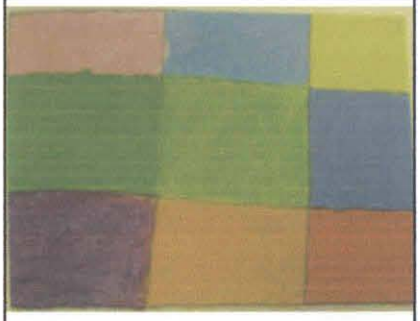
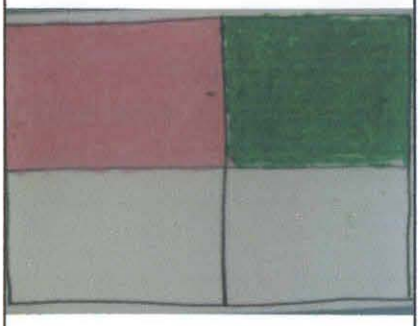
	けでもなく「今日はこんな気分なんやな」と自分で納得しているようであった。
	特別支援学級の教室にて実施。 この日は「自分が元気になれる色ってどんな色かな」と問いかけ、3色塗った。コウは「元気な色って言ったら赤やな」と言って早速赤色を塗り始めた。その後も「元気な色は・・」と言いながら2色目の茶色、3色目の灰色を選んだ。
	特別支援学級で実施 この日はテレビなどで「大地震が来るかもしれない」という予言（?）の前日で、コウは「地震がくるかも」と言って、かなり不安な様子であった。 1色目の茶色は「地震の色」2色目は「地震の後の火事の色」3色目は「家が壊れた色」と上の3色に意味をつけた。下の3色には「(火事を)水で消す」「暗闇」(黒)、最後は「平和な世界」と意味をつけた。色を塗るうちに「平和な世界」を作り上げていった。「地震が来るかも」という不安が、色を塗った後にはだいぶ和らいだようであった。 6色の中で物語を作り、自分で不安を解消の方向へ持っていったようだ。

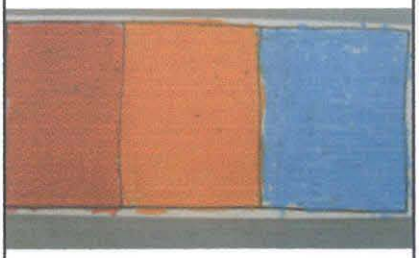
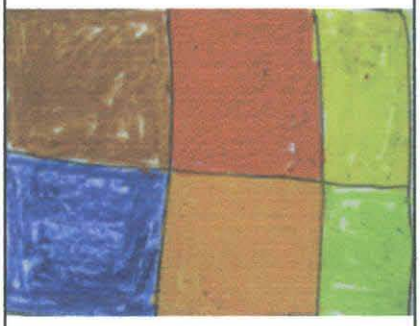
【マサ】

	初めての９色法の色絵である。 無言で赤のクレヨンから手にとり、塗り始めた。初めてなので、色ムラもたくさん見られた。「もっと塗ろう」と誘ったが、クレヨンの箱を閉じてしまったので、９色塗ったところで完成となった。
	２回目は他の６年生といっしょに塗った。しかし、特別支援学級の教室ではなく、図工室で実施したためか、早く仕上げて特別支援学級の教室に帰ろうと思ったらしく、色ムラがたくさん残ってしまった。これを仕上げた後、提出してすぐに特別支援学級の教室に走っていってしまった。
	３回目の９色法は特別支援学級の教室で、コウと２人で塗った。２回目に塗った色絵をもう一度塗りなおした。色ムラがないように「いっしょに塗ろうか」と筆者が誘った。マサが赤をぬっているときに筆者は黄色を塗った。「ぐりぐり」「ちょこちょこ」などと擬態語を入れて塗った。また２人の手の動きが同じような動きになってくると、マサはとてもうれしそうに、筆者の顔を見ていた。
	分の好きな色を４色塗って、そのあと、マサ自身は満足したのか、それ以上塗ろうとしなかった。
	いつも色を塗るときはマサは赤色のクレヨンから塗り始める。何回か塗っているので、筆者がいっしょに塗らなくても、自分ひとりの力で色ムラなく塗ることができるようになってきた。 ９色法や４色法で色体験をしてきているので、普段描く絵にも色々な色が使われるようになってきている。

	枠をしっかり描いた。区切り線も同じフェルトペンで太く描いた。そして、いつものように赤のクレヨンを持って、塗っていった。9色法を初めてやった頃に比べて、ムラなく塗れている。しかも、手に力が入っているようで、「ぐいぐい」塗っている感じがする。しかし、区切り線が太すぎたためか、完成してから戸惑っている様子が伺える。

【ナミ】

	このときは、「9 色のリレー競争」のお話を作りながら塗った。「ピンクチームがリード」「青チームも負けていません。」「「抜かされるかもしれないし、ぬかされないかもしれません」「そして、アンカーになります。」「アンカーは先生が選んでください」「だれが 1 位になるかわかりません」と、塗りながら、ずっと話を作っていた。他の 2 人はナミのお話は耳に入らないのか、自分の選んだ色を塗ることに集中していた。
	2回目は、他の6年生といっしょに9色法を実施した。1回目と違う色を選んでいるのに気がつき途中で「違う色選んでいいの？」と筆者に聞いてきた。塗った後の感想では「全部明るい色やった。一つ一つ見ると明るくないけど、全体見ると明るい」と書いていた。
	「今の気分は何色かな」と聞いたら、「先生は何色？」と聞き返してきたので、「ナミさんの気分はどんな色？」と聞き返すと、「わからん」と無表情になってしまった。「わからない」と言いつつも、2 色塗った。その後は「もう考えられない」と言って、2色で終わってしまった。

	「元気になれる色で塗ろう」と声をかけた。赤のクレヨンで左の部屋を塗った後、クレヨンの箱に「元気になれない色はこちらへ」と言いながら、「元気になれない色」を選び出している。箱に残った「元気な色」は4色であった。その4色の中からあとの2色を選ぶことができずに、かなり悩んだ様子であった。最後には「きれいな色のほうが元気になれる」と言って、「きれいな色で元気になろう」と、赤・橙・水色の3色を選んだ。
	コウの地震の話に誘発されたのか、左上から塗ったのだが、初めの色は「茶色」である。そのあとは、ナミ自身の好きな色を選んでいるように感じる。「赤色は炎の色です」「黄色は花の色です」「青は学校に来たくないです」と説明した後、「5年生のときは、学校に来れんかった（来られなかった）。色々あったから。先生は知らんやろうけど、お母さんが行くなって言って、来れんかった」と5年生のときの話をしている。青色を塗ったことがきっかけになったようである。

5．「色絵四法」と絵本の読み聞かせとの関係

筆者が子どもたちに絵本の読み聞かせをしていく中で、絵本の中の様々な色に対する子どもたちの発言が多く見られたことや、絵本の読み聞かせの後に描いた特別支援学級の子どもたちの「カニ　ツンツン」の絵が、小山内先生による「色絵四法」の開発のきっかけであることは第１章で述べた。

「色絵四法」を試行した後、子どもたちは集中力が高まっているような雰囲気が観察できることや、あるいはまた、子どもたちが自分自身で「気分がスッキリしている」と述べていることから、より効果的な絵本の読み聞かせの方法を探ってきた筆者は、「色絵四法」の効果と絵本の読み聞かせの関係を探っていくことにした。

そのなかで、観察された子どもたちの発言や態度、変化について、考察を加えながら述べていく。

《特別支援学級》

特別支援学級では、絵本の読み聞かせをする前に、「色絵四法」で色塗りをしてもらった。そのときの子どもたちの様子と変化を述べる。

子どもたちに筆者が「きょうは 3 つの部屋を塗りましょう」というと、「３つやったら（9 色に比べて）簡単にぬれるな」とコウは言った。コウの言葉を受けて、ナミも「かんたん！かんたん！」と言って、クレヨンの箱を覗き込んでいる。マサは、いつものように無言で赤のクレヨンを手にした。

３人とも、３色法の色絵が完成したときには、「きれい！」「うまい！」「ほんとにぼくがぬった？」と、色絵の美しさに心を動かされているような表情が見られた。何度色塗りをしても子どもたちは、色絵の美しさに感嘆の言葉を繰り返し述べていた。

その後、『３びきのかわいいオオカミ』（ユージーン・トリビザス、ヘレン・オクセンバリ作　小玉知子訳　富山房　2005）を読み聞かせた。この本のストーリーは『３びきのこぶた』の話の逆の話で、３匹のかわいいオオカミが悪い大ブタに襲われるけれども、最後には大ブタは改心してオオカミと仲良く一緒に暮らすというお話である。

３人とも、『３びきのこぶた』のお話は知っていて、読み聞かせの最中も、しきりに「こんなん、逆やん（逆だね）」「オオカミとブタが反対になってるやん（なっているよ）」と言っていた。色塗りをしないで、絵本の読み聞かせをすると、このような読み聞かせ中の発

言がとても少なく、絵本の世界になかなか浸れないことが多い。しかし、今回は色塗りをした後で、心が活性化されていて、すっとお話の世界に入っていくのが筆者にもわかった。

『3びきのこぶた』の話にも『3びきのかわいいオオカミ』の話にも家作りの場面が出てくる。『3びきのこぶた』には、わらの家、木の家、レンガの家が出てくる。『3びきのかわいいオオカミ』には、レンガの家、コンクリートの家、鉄の家、花の家が順に出てくる。3 人は、鉄の家の場面までは固唾を呑んで聞いていたが、花の家の場面になったときには、みんなほっとした様子が感じ取られた。

マサに「どの家が心に残った？」と筆者は聞いたが、マサはうまく答えられなかった。迷っていたらしい。だから、筆者は絵本をもう一度見せた。レンガの家、コンクリートの家、鉄の家の場面を見せると、マサはすぐにページをめくってしまい、「この場面ではない」という意思表示をした。花の家を見せたときに、「ここ」と言って、うれしそうな表情を見せた。花の家を見せたとき、読んでもらっているときにほっとしたのを思い出したのであろうか、またこの物語の世界に入りこんだようであった。

図4－2 マサの「花の家」

黄色の花の家を描いた後、マサは大ブタがしたように大きく息を吸い込んでにおいをかぐようなしぐさを見せた。そのときは、マサはもうその大ブタになっているようであった。

本の読み聞かせをする前に、色塗りによって色の世界を経験しているので、黄色の花の色は簡単に思い出せたようである。筆者は、直前の色の経験が、マサの絵本の中の一場面の記憶を鮮明にしているように感じた。

絵本を読んでもらって絵を描いた後も、マサは絵本の世界に浸って、もう一度、自分がオオカミになって怖がってみたり、大きく花のにおいをかぐ仕草をみせたり、余韻を楽しんでいるようであった。

コウは、大ブタがコンクリートの家に爆弾を仕掛けて、爆発させたところが印象に残ったといって、「大ばくはつ」と題をつけて、絵を描き、以下の枠の中のようなお話を作った。

「大ばくはつ」

日本にすごい人がいました。その名は「コウ」。コウは大金持ちでした。ある日、コウは

城を建てました。そして、城の前にはみはりがいました。そんなコウにとっても悪い人がいました。それは、大ブタでした。その大ブタは、やっぱり悪いのです。大ブタは、威力の高いダイナマイトを城に投げました。そしたら、城は大ばくはつ。ばくはつがおわったらコウは天国から地上におとされたように、ビンボーになりました。

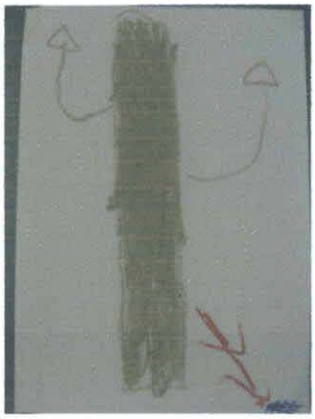


図4－3 コウの「大ばくはつ」

コウは、絵本を読んでもらった後に、自分で話を作るのが「めっちゃ楽しい！」と言っていた。コウは、とても生き生きとした表情を見せ、この授業が終わってから、元気に特別支援学級の教室を出て行った。もちろん次の授業に行くためであるが、「がんばっていくぞ！」と前向きな気持ちになって、六年生教室に向かっていったのである。今までほとんど見られなかった光景であった。3色法で色を塗って、「きれいな色絵を作った自分」は「やればできる」と自尊感情を高められ、そして、お話も作ることができる自分に自信をもち、前向きな姿勢ができてきたのだと思われる。

ナミも、「お城」の絵を描いて、その後、次のようなお話を作った。

お城に王子様とお姫様がいました。はなやかな過ごし方でした。

　でもいいお城ではありません。穴が開いて、そこから知らない人が入ってきました。知らない人が入ってこないように、家来が穴の前にいました。そこで、いい人と悪い人を分けるのです。家来は、いつも穴を見張っていました。

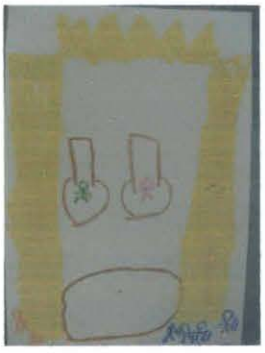


図 4－4 ナミのお城

家来にもいい人と悪い人がいます。いい人は悪い人を見分けられます。だから、お城には、いい人しか入ってきません。

絵本の読み聞かせを始めたころには、自分の考えた話や自分のこと（例えば5年生のときのことや家族のこと）は一切話そうとしなかったナミであったが、「色絵四法」で色を塗る作業を繰り返すことや、絵本の読み聞かせの後の「お話の続きを考えてみよう」の活動をする中で、ナミのイメージしているものや普段思っていることを、だんだん表現できるようになってきた。筆者は、ナミの話に耳を傾け、お話を作って語っていることを邪魔しないように心がけてきた。ナミも安心して、お話を作っているようであった。

《1年生の1色法》

前出の1年生には、筆者は5月当初から朝のショートスタディの時間（１０分間）に週に1回、絵本の読み聞かせをしていた。この頃は、効果的な絵本の読み聞かせの方法を探っているときであった。週に1回だけ、しかも朝の10分間という限られた時間の中での絵本の読み聞かせは、子どもたちと筆者の関係が深まるところまでは達していなかった。

6月に入って、特別支援学級での「色絵四法」の試行が始まった。また、他の学年においても、9色法の試行を順次行っているときであった。この1年生にも「色絵四法」の試行をしていく予定であった。

6月中旬、1年生にいつものように絵本の読み聞かせをした後、筆者は「9色法」を試行する前の段階として、名刺より少し小さい画用紙（縦52.5㎜、横73.7㎜）に黒のフェルトペンで枠付けしたものを渡し、「自分の大好きな色を1色塗りましょう」と教示した。（この日は1名欠席していたので、16名で実施）

図4－5　1年生の1色法“みんなあつまれ！”

子どもたちの様子を見ていると、絵本の読み聞かせをした直後なので、絵本の世界を楽しんでいる子どももいた。主人公について話をしている子どももいた。主人公になりきって絵本の世界にいるらしい子どももいた。あるいは、絵本とは全く関係なく、今朝からあった家での出来事を話している子どももいた。16名の子どもたちは、全員が心の内容が一様ではないことが子どもたちの話の内容や表情から見てとれた。しかし、絵本を読み聞かせた後なので、自分の思い描いたイメージの世界にいると思われる子どもたちが多く見られた。そんな子どもたちに自分の好きな色を1色だけ塗ってもらったのである。

初めて色塗りをするにあたり、筆者は「色ムラができないように、白いところがないようにしっかり塗りましょう」と付け加えた。

子どもたちは、それぞれのクレヨンの箱の中を眺め、自分の好きな色を決めていった。子どもたちは「水色にしようかな」「紫にしようかな」などと口々に言っている。自分の好きな色を 1 色選び出すと、子どもたちは一心不乱に塗りだした。「白いところがないようにね」と筆者が声をかけると、子どもたちは一生懸命クレヨンを動かし、まわりの様子を見ることもなく、夢中で塗っていた。塗り終わった子どもは、自分の色絵を見て「わあ、きれい！」「めっちゃ、いいやん（いいでしょう）！」と自分が塗った色絵に感動している言動が見られた。子どもたちは自分の色絵が完成してから初めてまわりを見渡し、まわりの友だちの持っている画用紙もきれいに塗色してあるのを見て、「きれいやん！」「うまいな～あっ！」「いいやん、いいやん（いいよ、いいよ)」「おっ！おーっ！」と驚きの声を上げていたのである。

自分の好きな色のクレヨンを1本決めるまでに、子どもたちは、「水色がいい」「やっぱり紫に変えよう」「やっぱり△△くんと一緒の色にしよう」「○○ちゃんと一緒の色にしよう」などと言っていた。そんな声が飛び交う中、ユウタは「ぼくは、緑がいいもん！」と初めから一貫して主張していた。色を塗っている途中も「ぼくは緑がいいもん！」と何度も口にしていた。色を塗り終えると、「できたも～ん！」と大きな声で言った。ユウタの顔は、ニコニコの満足感でいっぱいの顔であった。ユウタの心の中では、「緑が大好きなぼく」を確認し、緑色を塗り続けていくことによって、ますます緑色に対する好感度が上がっていったものだと考えられる。もともと、自分の大好きな緑色とユウタの距離は他の色とユウタの距離よりも近かったと考えられるが、色を塗ることによって、ますます縮まったのである。この1色を塗ることによって、緑色はユウタにとってますます身近な色、特別な意味を持った色に変化したのだと考えてよいであろう。他人から見て、何の変わりもない

緑色であるが、ユウタにとっては色を塗ることによって、色塗りをする前とはかなりの違った印象の色に変わったと考えられる。

全員が塗り終えてから「みんなの絵を並べてみようか」と筆者が子どもたちに提案すると、子どもたちは「色が同じ子は離して貼ってな」「一緒の色が隣同士やと、きれいに見えやんからな（見えないからね）」と色絵の並べ方も考えてくれた。筆者が黒板にテープで止めてまとめて貼ったのが、図４－５である。まとめて貼っても、子どもたちは「あっ！これ、ぼくの（色絵）！」「○○ちゃんと一緒の色、でも私の（色絵）はこっち」と自分の塗った色絵はすぐに見つけられた。みんなの色絵の中で、自分の存在を確認した発言であろう。担任の教師にお願いして、教室に掲示してもらった。子どもたちも、「きれいやな」「遠くから見ると、いい感じ」などと感想を言っている。遠くから見て、ある子どもが「“みんなあつまれ！”って感じやな。（感じだね）」と、名前までつけたのである。まさに“1 年生、みんなあつまれ！”の色絵が完成したのである。

絵本の読み聞かせをしてもらうということは、子どもたちが視覚と聴覚を通じて、絵本の世界に入り込むということである。現実の世界と絵本の世界を自由に行き来し、イメージの世界を膨らませているのである。このように子どもたちの心が自由になっているときに、自分の好きな色を塗る。塗ることによって自分だけの特別な色が現れた！という体験をした子どもたちは、とても生き生きした表情のまま、1時間目の学習を始めたのである。絵本の読み聞かせをした後、イメージとファンタジーの世界が子どもたちそれぞれの心の中に広がっている。絵本の世界を堪能し、その余韻を残しているときに、色塗りをして、「自分が塗った色絵の美しさ」に心を動かされ、自己肯定感も感じることができる。また、一心不乱に色を塗ることで、集中力も高められている。そのようなときに、学習に向かう気持ちは、色塗りをしていないときより、積極的な姿勢が見られる。学習意欲を高める効果もあるといえよう。

色塗りをした日の子どもたちの様子を担任教師に聞くと、「いつもざわざわしていて、（学習を）始めるのに時間がかかる子どももいるのですが、色塗りをすると、始まりもスムーズです。そして、学習中も生き生きしてとても楽しそうです」と述べた。普段の子どもの学習に臨む態度も変えるほどの力を持った「色絵四法」なのである。

6．考察

第３章で、「色絵四法」を試行した際の、子どもたちの様子をその都度考察しながら述べてきたが、ここに「色絵四法」の全体的な考察をまとめることにする。

・枠と区切り線について

「枠」を描くだけで、「守られている」「そのなかで自由に冒険できる」という感覚になり、色々試そうという気持ちにつながる。枠は自分で描いてもよいし、指導者が枠を描いた画用紙を渡してもよい。また自分の好きな色で枠を描いた子どもは、クレヨンで塗色したところにはその色は出てこなかった。一番好きな色で枠を描いたので、一番好きな色に守られている、一番好きな人に守られているという感覚になり、一番心地よい枠が出来上がったようである。

子どもたちはそれぞれの部屋を塗るときに、工夫を凝らす。１つの部屋を２つ（あるいはそれ以上）に区切って塗色するにしても、「虹色」にしても、色々な装飾物を描き入れるにしても、決して部屋の外には出ないのである。守られた部屋の中で冒険するのである。

区切り線を描くが、塗色すると、色同士がくっつき、「仲間」になる。一度は分割するが、色を塗ることによって、また統合するのである。色同士が統合したとき子どもたちは「こんな色塗っている一っ！」「違う色塗ったみたい！」と、新しい発見をするのである。

枠と区切り線の太さにも注意を払いたい。枠は太くてもかまわないが（それだけ硬い守りになっていると考えられる）、区切り線は太すぎると色を分断してしまうのである。区切り線を太くして色を塗った子どもたちは、色が統合されないのを見て、非常に戸惑った表情をみせた。元気になるどころか、動揺している様子がしばらく続いたのである。だから、区切り線は太くしないことが重要である。（図５－３を参照のこと）

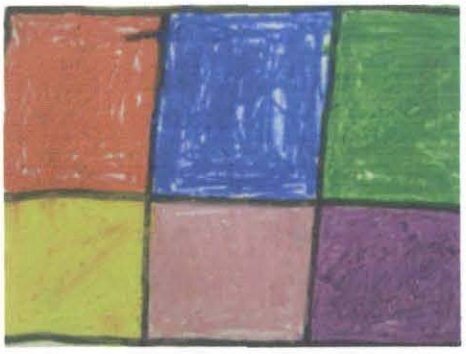


図5−3　マサの6色法

区切り線が太すぎて、それぞれの色が分断されてしまった。

自分で枠を描き、区切り線を引いて、色を塗り始めるのであるが、そのときの部屋の大きさには子どもたちはこだわらない。大きくても、小さくても「自分の好きな色を塗ることが

できる」から関係ないのであろう。(図５－４参照)

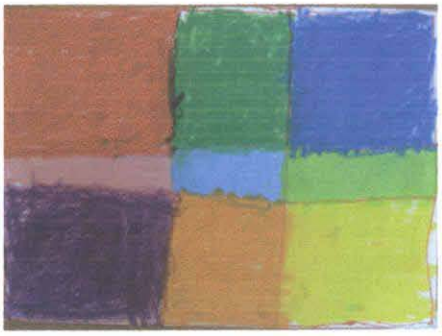


図 5—4 保育園年長組の 9 色法

かなり部屋の大きさに違いがあるが、

全くこだわらずに塗った。

・子どもたちの様々な工夫について

何度も色塗りを経験することで、「次はこんな工夫をしよう」と考える子どもたちが増えてくる。「色を塗りましょう」という教示は、年齢が高くなってくると「(単色で) 色を塗らなければならない」と考えてしまう。だから、一つの部屋を単色で塗るのである。年齢の小さい子どもたちは、あるいは何回も色塗りを体験している子どもたちは、同じ教示でも「自由に色を使って、自由に塗って (描いて) よいのだ」と考える。だから、子どもたちは、色絵のなかに工夫を凝らすのである。以下に子どもたちの工夫したことを４点にわたって述べる。

①枠を守りながら“多色法”を考える子どもたち

子どもたちは、自分で考えた工夫、あるいは段階をあげた工夫に挑戦しようとするのである。６色法の色絵の中で、６つの部屋の枠を守りながら一つの部屋に２色塗り、いわば“７色法”に変えたり、４色法の枠の中で、一つあるいはそれ以上の部屋にたくさんの色を使って塗り、４色法でありながら“多色法”に変えたりするのも、工夫のひとつである。このことは、子どもたちが「次はもっとがんばろう」という向上心を持つということ、「もっと違うやり方でやればうまくできるのではないか」という物事を柔軟に考えるきっかけにもなるのではないだろうか。

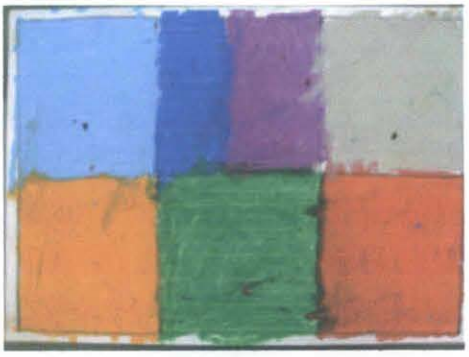


図 5—5 6 つの部屋の中に 7 色塗っている

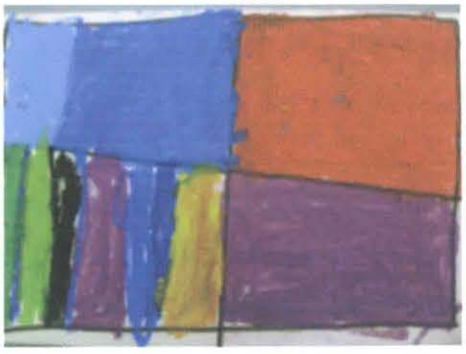


図 5—6 4 色法であるが、

“多色法”になっている

②虹を描く子どもたち

子どもたちの中には、虹を描く子どもたちが多く見られる。そのほとんどが保育園や小学

校低学年の子どもたちであった。年齢が高くなると、ほとんど描かない。描けなくなっていくのである。『1つの部屋を（単色で）塗らなければならない』という思いが強く出てくるようである。

図 5−7 保育園年中児
中心の部屋に“虹”、右下にモザイク模様

子どもたちは、「色絵四法」において、各部屋の中を“きれいに”色を塗ろうとする。「色をいっぱい使ったらきれいになる」と考えた子どもも多数いた。実際に子どもたちは、試行の初めには「色をいっぱい使ったらきれいになる！」と言って、色を重ねたり混ぜたりしている。しかし、混ぜたり重ねたりする色が、自分が思っているきれいな色ではないと気がつき、「混ぜないほうがきれい！」と学習していった。

子どもたちの次なる工夫が「虹」であった。子どもたちは、いろいろな色を使って、虹を表現している。実際に見た虹の色でなくても、子どもたちは色々な色を同じ方向に並べて描くと「虹を描いた」と言う。いろいろな色を並べるということから想像すると、いろいろな友だちと一緒に並んでいる。みんな違うけれども、みんな同じ方向を向いて、みんなで一緒にがんばっていこうという気持ちの表れなのかもしれない。

さらに、虹を描くばかりではなく、1つの部屋の中を縦と横の線で細かく区切って、色々な色を塗っているモザイク様の模様も見られる。あるいは、色絵そのものを「虹」と捉える子どももいる。自分の好きな色を自分の画用紙の中に並べているので、これもやはり「虹」そのものと呼んでもよいであろう。いろいろな色の仲間は、自分の仲間である。「仲間がいるよ！」「一人じゃないよ！」というメッセージも色絵から受け取ることができるのではないだろうか。

③お話を作る子どもたち

色を塗るだけなのに、その中でお話を作る子どももいる。色に直接関係するお話もあるが、直接には関係のないお話を作ることもある。色を塗りながら作ったお話を聞かせてくれる子どももいる。色を塗り終えてから、作ったお話を聞かせてくれる子どももいる。独り言を言いながら塗っている子どももいる。色を塗ることで、自分の想像の世界が広がっていくようである。それぞれの色に意味をつけて、物語を作っていく。初めは、色を塗るだけだった子どもたちが、何回も「色絵四法」を経験することによって、想像する力を豊かにしているのである。初めから子どもたちは、想像力を働かせて色を塗っているのであろうか。特別支援学級の子どもは、初めての9色法の試行の際に「9色のリレー競争」の話を作っている（図

５－２、図の右の枠の中にナミが作ったお話を記した)。指導者との関係の中で、次第に自分の心を開いていくのであろう。子どもたちが色絵をもとにして、お話を作って語っているときは、心を開いている状態なのである。それを聞くまわりの大人たちは、しっかりと子どもたちの話に耳を傾けることで、子どもたちをより深く理解するきっかけにもなるであろう。

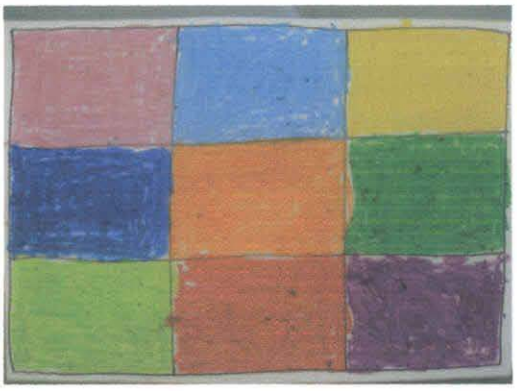


図 5－2 ナミのリレー競争

「これはチームになってるの。これは 9 つの中で、3 つ(人)ずつ(1つの)チームになっているの。何チームできた？そうです。3 チームです。誰が 1 位になるかわかりません。まだわかりません。ぬかされるかもしれへんし、ぬかされないかもしれへんし、それはわからんの。アンカーは 3 番目に走ります。」

④家族の絆を再確認する子どもたち

「部屋」から想像して、家族の成員を思い浮かべた子どもたちも多数いた。色絵の一番外の枠は、「家」であって、その中に住んでいる色は、「家族の成員」なのである。家族の一人ひとりがそれぞれの持ち場を守り、寄り添って生活している姿を想像したのではないだろうか。

また、親子で「色絵四法」をすることにより、親密な親子関係に変わった例も挙げた。子どもと一緒に色塗りをすることで、親子関係が見直されたり、親密になっていったりするきっかけになるものと考えられる。

・真ん中を意識する子どもたち

9 色法には、3 色法、4 色法あるいは 6 色法とは違って、中心になる部屋がある。9 色法の試行のとき、筆者のほうから中心を意識させる言葉かけをしなくても、子どもたちは中心を意識した「真ん中に自分の好きな色を塗ると、気持ちよい」「真ん中だから、○色」という発言をしている。真ん中と周辺を分ける力があるのである。真ん中は特別な部屋で、一番大事なところ（守りの堅いところ）を表しているとわかっているのではないだろうか。真ん中の部屋は他のどの部屋とも接している。どの部屋の色とも仲のよい色なのである。そのどの色とも仲のよい自分の好きな色が端にあると、安定しないのである。自分の一番好きな色

を真ん中において、まわりに 2 番目に好きな色をちりばめる。そうすることによって、もっと落ち着き、気持ちのよい色絵になるのであろう。

その中心の部屋を 5 番目に塗ることによって、全体のバランスを考え、後半の色塗りもがんばろうと気持ちを高めていくきっかけになっているとも考えられる。

考察のまとめ　＝　色を使うことによって元気になる子どもたち

「色絵四法」を試行した子どもたちは、皆一様に「スッキリした」「ほっとした」と感想を述べている。子どもたちだけでなく、「色絵四法」を試行した大人たち（保育園の先生方）も「心のなかのモヤモヤを解消した！」「気持ちよかった！」と感想を述べている。色を塗った後は、大人も子どももスッキリして元気になっている様子が観察できる。つまり、子どもであれば、試行後、運動場へ元気に走って出て行く姿や学習に集中して取り組む姿で確認できる。大人であれば、笑顔で感想を話し、その後足取りが軽くなるなどである。

自分の気持ちを色で表現し、塗色することは、自分の気持ちを整理し、イライラやモヤモヤを解消させる効果があるとも言えよう。イライラがなくなることで、自分のまわりにいる人たちと、よい関係を持つことができるようになる。心が軽くなり、人と関わるときの余裕が出てくるものと思われる。色を塗ることで、そこに自分の気持ちを出し、落ち着かせているともいえよう。塗色することで、子どもたちの心を自由にし、さらに工夫して虹を描いたり、装飾物を描き入れたりすることで、もっと心が豊かになっていくのである。

自分の好きな色をクレヨンで塗ることによって、自分の好きな色がもっともっと特別な色になり、それまで以上に身近な色になる。特別な自分だけの色に変化して、元気にさせてくれるのではないだろうか。また、多動傾向のある保育園の子どもたちも、塗ることに集中して、その時間は多動でなくなっている。そして、塗色前よりも多動が減り、落ち着いた行動をとることができることがふえたことも担当の保育士によって観察されている。

特別支援の必要な子どもたちにとっても、自信を取り戻すきっかけにもなり得る。特別支援学級の子どもたちや、普通学級にいる特別支援の必要な子どもたちも、まわりの人たちに認められることが少なく、自信を失くしていることがよくある。失くしているとは言えないまでも、十分な自信を持てないこともある。しかし、色塗りをすることで、「自分もこんなにきれいな色絵を描くことができた！」と自信を持つことができるであろう。また、色塗りをしているときには気がつかなかった完成した色絵の美しさに驚き、「これでよいのだ！」と自分自身に丸をつけることもできるのである。実際に、特別支援が必要な 6 年生の ADHD

の子どもは、何をするにも時間がかかって、自分に自信の持てない子どもであったが、9色法の試行の際、とてもきれいに塗色できたこと、時間内に塗色が終わったこともあって、「おれもやればできるんさ！（やればできるのだ）」と筆者にはっきりした口調で、うれしそうに報告しに来てくれた。その顔は自信にあふれていたのである。

クレヨンの特徴についても述べていきたい。クレヨンで色塗りをすることで、小さい頃の自分を思い出し、さらに小さい頃の自分に戻っていく。クレヨンの程よいやわらかさがそうさせるのであろう。小さい時にクレヨンを使ってとても楽しかったことを思い出し、今もそのクレヨンを使って楽しいことを実感し、小さい時から変わらない自分を発見するのである。

次に「色絵四法」を集団ですることの意義について述べる。

クラスやグループなど、友だちと一緒にすることで、お互いに「きれいに塗れているね」「その青、いいねえ」と声をかけ合う。全体的に肯定的な声かけは、聞いていても気持ちのよいものである。「上手・下手」の評価は全く出てこないので、お互いに友だちの「(色絵の)よいところ」だけに目が向くのである。友だちからの肯定的な言葉を受け、子どもたちに「自分もやればできる」という気持ちが出てきて、自尊感情につながる。友だちからのプラスの評価は、自尊感情をより強固なものにしていく。クラス全体で「色絵四法」をすることで、みんなと一緒にその時間を過ごしたという経験、色を塗っている最中の気持ちや、色を塗った後の気持ちを友だちと共有し、同じような気持ちになっていることを確認して（シェアリングして）仲間意識も育ち、自己肯定感も育つものと考えられる。仲間意識が育ち始めると、相手を思いやる気持ちも育ってくる。相手を思いやる気持ちがあると、コミュニケーションも穏やかになっていくのである。気持ちをすっきりさせ、自尊感情を感じ、仲間意識を高められた子どもたちは、学習に臨む態度もよくなったことが確認された。

よって、「色絵四法」は子どもたちの心を確実に元気にできる方法であると断言できるのである。

7．今後の課題

指導教官の指導を受けながら、「色絵四法」を開発・工夫してきて、筆者は、半年足らずで、保育園児（計 61 名）と小学生（計 82 名）を対象にできる限り多くの試行を重ねてきた。しかし、具体的な実施方法について、まだまだ当然改善の余地がある。たとえば、学校現場で使うとすると、時間の制約のある中でどの時間帯でやるのが一番効果的であるのか、またどのくらいの頻度で実施するとより効果があがるのか、学習カリキュラムとつき合わせて考えていかなければならないであろう。今回の試行では、保育園においても小学校においても、担任以外の筆者が中心となって、子どもたちに色を塗ってもらったが、担任の教師が実施するときと担任以外の教師が実施する場合の子どもたちの反応の違いについても言及していく必要はある。

また、発達年齢によって塗り方の工夫に違いがあるのか、大きい年齢の子どもたちにも小さい子どもたちと同じような工夫が見られたり、想像力を十分働かせて「色絵四法」に取り組み、「お話」を語ったりすることができるのか、今後も試行を重ねていく必要がある。塗る部屋の順番についても、この論文の中では十分考察できていないので、今後、考察を加えていく課題のひとつである。

ステンドグラス法（SG I）と組み合わせて「色絵四法」を実施しようとすると、「色絵四法」でどの程度色を塗った後で SG I をするのがいいのか、あるいは、反対に SG I を実施した後に「色絵四法」を実施するとなると、どの法がよいのか、考察していく必要がある。

重要なことは、SG I と「色絵四法」の基本的な違いがある。明確に見てわかるのは、色の部屋が SG I は曲線で囲まれているのに対し、「色絵四法」は直線で囲まれていることである。この点に関しては、非常に重要な考察すべき課題として、今後探究していくつもりである。

まだまだ、試行が始まったばかりであるので、課題は多い。しかし、それをひとつひとつクリアにしていくことで、より効果的に「色絵四法」を学校現場に導入することができるであろう。

８．おわりに

この「色絵四法」の試行が始まって、まだ日が浅い。この時点で、確実に言える事は、この方法は子どもたちが確実に元気になるということが確認できた方法であるので、筆者は柔軟にいろいろなやり方、すすめ方を試行しながら、学校現場でこの効果を確認していきたいと思う。

「色絵四法」で色を塗ることで、自己肯定感を持ち、仲間意識を育て、想像力が豊かになり、元気になっていく子どもたちが、筆者の目の前にいた。「色絵四法」で色を塗る時間だけでなく、後から自分の描いた色絵を見ることで、色を塗っているときの感情が再び呼び起こされるようである。「何回見てもいいもんや」「やっぱりきれいだね」という言葉に象徴されるように、子どもたちが感性を磨くきっかけにもなり得るのである。色塗りをした作品だけでなく、そのときの子どもたちの心の様子を垣間見ることができ、子どもたちをさらに深く理解するきっかけにもなる。子どもへの理解が深まったときに、教師は子どもへの対応が変わるはずである。クラス作りの一つのきっかけにも十分なるのである。

「色」がもつ不思議な力を自分の担当する子どもたちだけでなく、すべての子どもたちに感じて欲しいと願ってやまない。

9．引用・参考文献

・　中日新聞 2008 年 8 月 8 日付　朝刊
・　朝日新聞　2008 年 11 月 21 日　朝刊
・　小山内實ら　1989　枠づけ法における「枠」の意味　芸術療法　２０巻 p7-13
・　小山内實・玉田尚子・河口恭子　2007　中学生描画の物語性―HTP アイテム選択法を実施してみて―　三重大学教育学部附属教育実践センター紀要 27 号 p 35-40
・　小山内實・河口恭子・馬場佐和子　2008　ステンドグラス法―自尊感情と仲間意識を育む最適な方法の導入―　三重大学教育学部附属教育実践センター紀要 28 号 p7-12
・　河口恭子　2007　教育臨床の視点を授業の中でどのように活かしていくか―みんなで絵を描いてもっと元気になろう―　2006 年度内地留学生研究報告書
・　岡田珠江・松本裕子　2007　学級で心を育む「お絵かき遊び」（Ｉ）―手法の開発と試行―　三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 27 号 p41－50
・　金関寿夫文　元永定正絵　1997　カニ　ツンツン　福音館書店
・　酒木保・吉沅洪・小山内實　2002　色彩プロットから物語構成にいたる一治療法　芸術療法　33 巻 2 号 p5-12
・　森谷寛之　1995　九分割統合絵画法『子どものアートセラピー』　金剛出版 p69-86
・　小山内實・岡村かや乃　2009　ステンドグラス法Ⅱ（色絵四法、３・４・６・９色法）―特別支援対象者を含む年少組園児～小学六年生、すべての子どもたちのために―　三重大学教育学部附属教育実践センター紀要 29 号（2009. 3 発行予定）
・　末永蒼生　2001　心を元気にする色彩セラピー　PHP 研究所
・　工藤左千夫　2004　絵本児童文学基礎講座Ｉ　すてきな絵本にであえたら　成文社
・　小林里美　2009　子どもの自己肯定感を育てるための働きかけを探して　月刊学校教育相談 2009 年 1 月号 p12-16
・　吉本武史　2000　教師だからできる５分間カウンセリング　学陽書房
・　柳田邦男　2009　みんな絵本から　講談社
・　田嶌誠一編　2003　臨床心理面接技法２　p98-153　誠信書房
・　近藤良一　2005　絵遊びから心の繋がりへ―集団絵遊び「療法」の世界―　知書之屋本舗
・　ユージーン＝トリビザス・ヘレン＝オクセンバリ・小玉知子　2005　3 びきのかわいいオオカミ　富山房
・　飫肥糺　2007　たましいをゆさぶる絵本の世界　「絵本で子育て」叢書１
・　東山明・東山直美　1999　子どもの絵は何を語るか　日本放送出版協会
・　乾吉佑他　編　2005　心理療法ハンドブック　創元社
・　末永蒼生　2006　答えは子どもの絵の中に―色で読む子どもの心と才能―　講談社

１０．謝辞

この修士論文を作成するにあたり、熱心なご指導を賜り、かつ共同研究者になっていただいた三重大学教育学部特任教授小山内實先生には、心よりお礼申し上げます。ご自身の研究などでご多忙の中、多くの時間を私のために割いてくださり、本論文の細部の細部にまでご指導いただき、どんな言葉でもってもお礼の気持ちは言い尽くせないほどであります。また在学中、1 年間出産・育児のため休学させていただきました。先生のご理解があったからこそ、本大学院での研究が続けられたものと感謝しております。

子どもの見方や感じ方、教師として忘れがちな子どもの立場について、たくさんの具体的なご教示をいただきました。子どもの行動から見える子どもの心について、子どもの立場になって考えること、子ども自身がどのように感じているかなど、教師としてでなく、一人の人間として深く考えるきっかけをたくさん作っていただきました。本当に感謝しております。

また、この「色絵四法」を試行するにあたり、ご協力くださった三重県下 A 保育園の園長先生始め諸先生方、年少、年中、年長組のこどもたちには、心から感謝申し上げます。子どもたちの「また一緒にやろうね」の言葉は、今も私の心に残っています。また勤務校の B 小学校の子どもたちは、「色絵四法」の試行のときに、たくさんの話をしてくれました。保育園の子どもたち、小学校の子どもたちからたくさんの元気をもらいました。ともすれば、いつも何かに追われているかのような落ち着かない気持ちを、穏やかにしてくれる子どもたちの笑顔にたくさん出会えた事に感謝しております。

同じ小山内研究室の院生の前田起代栄さん、また教育臨床内地留学生のみなさんとも、たくさんの話をしながら、この研究を進められたこと、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。同じ教員の仲間だからこその語らいは、これから続くであろう教員生活を豊かにさせるものだと思っております。心からお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

今回、三重大学で学ぶ貴重な機会を与えてくださった、津市立高野尾小学校の校長先生始め諸先生方、三重県教育委員会、津市教育委員会の方々に深く感謝しております。本当にありがとうございました。この三重大学で学んだことを、さらに研究を深め、今後に生かしていくことを誓って、お礼の言葉とさせていただきます。ありがとうございました。

２００９年2月 13 日

岡村かや乃拝